

地域活動論叢

2017（平成29）年度



西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部

地域活動論叢の発刊によせて

学長 工藤二郎

地域連携室が、2017年度より地域連携活動の報告書として「西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部地域活動論叢」を刊行することになりました。本書の創刊にあたりさまざまな議論と準備をしてくださった方々に心よりお礼申し上げます。

地域連携室は「将来計画2016～2018年度」の、殊に力を入れる2本柱のうち1本である「地域に根差し、地域とともに歩む大学、短期大学部づくり」を具現化するために、2016年8月に設置されました。地域連携室運営協議会が地域連携室と連携室内のワーキンググループなどの関連組織の管理運営のための取り決めを行い、地域連携室はより具体的に連携のための仕事を実行する組織です。2016年夏以降、月1回のペースで地域連携室運営協議会と地域連携室員の会合が開かれ、次第に地域連携活動が拡大してきました。また、地域連携のための学外構成員も決まっており、2017年3月には自治体、企業団体、地域の3部門から数名ずつ参加していただき、学生・教員の活動の発表と議論を行う地域貢献活動交流会ならびに地域懇談会を催すことができました。

2017年度に入ると正式に予算措置がなされ、地域連携室アドバイザーの石丸美奈子氏が着任し、彼女を介して多様な職種の方々との接触が可能となりました。さらに、学生に投稿を促し、キャッチコピーを「とどけ！ぬくもり要から」、イメージキャラクターを可愛い天使姿の「要（かなめ）ちゃん」と決定しました。夏にはNPOとの交流会、オープンキャンパス、フードドライブキャンペーンに取り組み、また、9月には「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の講演会として関西大学の江川直樹教授と卒業生の関谷大志朗氏による公開講演会を開催しました。この時の話し合いにより、チャペルとクリスマス礼拝を本学に好意的な多くの方々に公開することになりました。このような活動は大学機関別認証評価実地調査の独自基準Bに記載され、10月初めに調査員に説明されました。秋頃からは、英語学科の大谷教授を中心とする女性活躍ワーキンググループがクリスマス礼拝公開の手配を行い、クリスマス礼拝の当日には多数の来場者を得ることができました。一方、1年以上かけて交渉してきた北九州市と本学との包括連携協定が9月に結ばれ、北九州市とのパイプが確実なものとなりました。さらに、子ども子育て支援ワーキンググループは、映画「さとにきたらええやん」の上映準備を行い、2018年2月初めに上映会が行われ多数の観客を得ました。上映後は北九州市子ども家庭局の子ども食堂担当係長の長迫和宏氏と本学の命婦准教授による子ども子育ての現状と問題点を対話で明らかにするアフタートークがあり、参加者たちとの質疑応答がありました。2017年度の本学の地域連携の企画は、2018年2月末の時点で10ありそれぞれ着実に実施されています。

このように地域連携室のこの2年間の歩みは素晴らしい成果をあげており、谷川副学長を中心とした室員の方々の絶え間ないご努力に心より感謝申し上げます。

目次

1. 学長挨拶「地域活動論叢の発刊によせて」	
2. 地域連携室室長挨拶「『地域活動論叢』の発刊にあたって」	・・・ 1
3. 「花園に、山姥？」 地域連携室アドバイザー石丸美奈子	・・・ 3
4. 西南女学院大学と西南女学院大学短期大学部の地域貢献活動報告 西南女学院大学と西南女学院大学短期大学部の地域貢献活動の概要	・・・ 6
<子ども・子育て支援と学校教育>	
(1)だいすきにつぽん	・・・ 7
(2)生き生きチャレンジキッズ	・・・ 10
(3)いぼりの森の《みんな、だぁ～い好き！！》“みんな♪フレアイ隊”	・・・ 12
(4)一緒に遊ぼう	・・・ 15
(5)極低出生体重児に対する親子遊びの会(ほほえみの会)	・・・ 17
(6)「お菓子の家」の展示発表会を通じた参加型体験学習による 地域貢献の取り組み	・・・ 19
<食と健康>	
(7)『食と健康』に関する地域密着型食育活動の展開	・・・ 22
(8)地域住民の運動と栄養に関する栄養相談や食事指導の支援活動	・・・ 26
(9)SAT システムを使った食事診断会	・・・ 29
(10)乳がん検診・自己検診法の啓発活動	・・・ 32
<2017年度ベストサポーター感謝状>	・・・ 34
5. 公開講演会報告(2017年9月7日実施) 「協働する学生のチカラ in 佐治・男山・南花台・そして越前大野 …」 江川 直樹・関谷 大志朗	・・・ 35
6. 新聞記事に見る 地域連携室2017年度の歩み ～地域連携室の足跡～	・・・ 92

このたび西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部地域連携室より『地域活動論叢』を刊行することとなりました。『地域活動論叢』を育て、本学の地域貢献活動の基盤強化をめざして参ります。

1. 地域連携室の創設と歩み

近年、大学の機能別分化が推進され、人口減少を背景にした地方創生やC C R C構築などをめぐって地方大学に対する自治体や地域諸団体の期待が高まっています。本学では、従来より活発な地域貢献活動が展開されてきたところですが、「地域とともに歩む大学づくり」（将来計画 2016-18）を進めるため 2016 年 8 月地域連携室を設置しました。本学地域連携室は、学生の教育活動の一環としての地域貢献活動が、本学が基盤とするキリスト教教育と専門職業人養成機能に有機的に結びつき、相乗効果をもたらす学内外の環境づくりを担う部局横断的な学長直属の組織です。設置時に「学生の教育活動の一貫としての地域貢献活動に関するガイドライン」を提示したほか、「地域貢献活動におけるインシデントレポート作成と振り返りの勧め」、「地域貢献活動がチャペルの時間と重なる場合の特例」「西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部地域貢献活動助成要領」など、地域貢献活動実施上の諸課題を部局を越えて整理、合意を得て教職員に提示して参りました。

本年度は、著名なコピーライターである石丸美奈子氏に地域連携室アドバイザーとしてご就任いただき、学内外の風通しをよくすることをめざしました。

その中で、関西大学 江川直樹教授、関谷大志朗研究員をはじめ、私たちにとってかけがえのない出会いが多くありました。学外の方々との出会いは「地域からみた本学の姿」を教えていただける貴重な機会です。

さらに、本学の地域貢献活動のキャッチコピーとイメージキャラクターを広く学生と教職員から募集しました（右）。現在、地域連携室学生スタッフの募集にむけて準備を進めており、学生の身近な存在となるべく、努力を続けているところです。

地域連携室室員を要（かなめ）とした諸活動もスタートし、女性活躍ワーキンググループでは本学のクリスマス礼拝における英語スピーチ導入や一般からの参加拡充をめざして働きかけを行い実現させました。そのほか、子ども子育て支援ワーキンググループによる映画『さとにきたらええやん』上映会、北九州市立大学を主幹校とするCOC+事業の一環として大学連携型ふくおか版C C R C公開講座などが実施されました。こうした取り組みも本学と地域の方々との新たな接点となり、本学への期待の声が集まりつつあります。

とどけぬくもり 要（かなめ）から
（地域貢献活動キャッチコピー）



要（かなめ）ちゃん

2. 大学が行う地域貢献活動をめぐる研究の推進

『地域活動論叢』では、学生と教職員が進めている地域貢献活動並びに地域連携室の独自の取り組み、連携協定を結ぶ諸団体との共同の取り組みなどを紹介して参ります。また、今後、学生参加の地域貢献活動に関する研究推進の要として成長させたいという思いももっております。以下は私見であることをお断りして、実践研究における課題をいくつか述べておきたいと思っております。

(1) 越境的学習としての地域貢献活動

学生にとってキャンパスで学ぶという文脈と地域貢献活動を通しての地域住民との交流という文脈の往還を経験でき、活動によっては複数の学問分野の協働活動という文脈との往還を経験できる場合もあるなど地域貢献活動は、越境的学習の場あるいは過程を提供するものと考えられます。越境的学習においては、1) 越境先での経験、2) 内省、3) 越境先経験を概念化、4) 越境元での実験、5) 越境元での経験、6) 内省、7) 越境元経験の概念化、8) 越境先での実験というサイクルが形成されることから(石山 2018)、サイクルの自発的展開を促進する仕組みづくりが地域連携室の主要課題のひとつと考えられます。

(2) 越境的学習をもたらす実践共同体形成の課題

地域貢献活動を行う組織は独自の実践共同体を形成すると考えられます。とくに留意しておきたい課題は学生と教職員の関係性ですが、地域住民には大学が行う地域貢献活動は学生と教職員が一体となって実施しているものと認知されると思われまふ。地域貢献活動の実践共同体において学生と教職員は同じ目的に向かって協働する対等な関係をめざすものと考えられます。

しかし、次の点では学生-教職員関係における非対称性が現存します。

- ① 本学所属の学生として活動しており、社会的責任において大学組織として引き受けるべき事項がある
- ② 専門知識・スキル及び職業人としての信念は形成途上であり、地域貢献活動において揺らぐことがある
こうした揺らぎは教職員においても生ずるものですが、教職員は自立的にゆらぎへの対処を通して新たな学習を成立させることができます。地域活動における自立をめざす学生に対する教職員の役割は、教授や指導よりも、つなぎ、促進、保証などに重きが置かれると考えられます。

(3) 協同的学習の研究から

大学における協同的学習に関してさまざまな知見が提示されています(中西ほか 2015, 中西ほか 2017)。これらの知見は、チームワークを前提とする地域貢献活動マネジメントにおいても考慮すべきと考えられます。

いずれにしましても『地域活動論叢』は誕生したばかりです。今後、本学学生、教職員そして地域の皆様の中でどのように育っていくか、暖かく見守っていただければ幸いです。

石山恒貴. 越境的学習のメカニズム 実践共同体を往還しキャリア構築するナレッジ・ブローカーの実像. 福村出版, 2018
中西良文ほか. 大学初年次教育科目における社会的動機づけに関する検討. 三重大学教育学部研究紀要, 66, 2015, 261-264.
中西良文ほか. 協同学習におけるグループ間差に関する研究. 三重大学高等教育研究, 23, 2017, 129-132.

「花園に、山姥？」

地域連携室アドバイザー 石丸 美奈子

25番のバスを降り、門を入ると、絶壁だった・・・。

★

地元の人間（特にある年代以上の）にとって、「西南女学院」と言えば、私立ミッション系お嬢様学校である。

お洒落で洗練されてて、男子禁制の。

秘密のベールに包まれた憧れの花園なのだ。

まさか、そこに、通うことになるうとは（迷い込んだ物の怪状態）。

★

髪振り乱し、坂を上る。

シオンの丘という総称で、校舎や図書館、食堂、ホールが、コンパクトに集まっている。

花や緑が生き生きと輝き、手入れ掃除は隅々まで。

若くて綺麗なお嬢さん方が行き交い。笑い声が聳る。

下界とは隔絶された園。

★

基本、月に二回の会議。

様々な地域連携活動の視察。

加えて、

公開講座への参加。

オープンキャンパス、文化祭、クリスマス礼拝！など、行事への参加。

共同研究会や、女性活躍推進PTへの参画。

調子に乗って、

地元メディアへの広報。

ネットワークを駆使しての交流などなど。

なかでも、毎週木曜10時50分からのチャペル（ミサ）には、ハマった。

歴史あるマロリーホール。賛美歌、ピアノ演奏、奨励（お話）、そして祈り。



ミッション系大学の本丸。

あ。ここではどんな会議や会合においても、その始まりと終わりにきちんと黙とうするんだぜ。

★

せっせと名刺を配る。

コピーライターになって30有余年。

アドバイザー歴も15年超。

西南女学院大で、8件目になるが。

今回のリアクションが一番大きい。

イシマルがああ西南に！？、というのもあるけど。

実は、うちの娘が、妻が、母が、ワタシが・・・なのだ。

OGが、いたるところに。

なんせ、2022年には100周年を迎える老舗。

地元定着率も高かったんだね。

★

教授陣はユニークである。

おっとり品がいいし、学究肌で、国際感覚に溢れ。

看護福祉栄養保育英語観光、という学科のせいもあると思うけど。

フランスで買った真っ赤なジャケット、素敵な謎の帽子、季節を先取りしたファッション。

ちょっとしたジョークで笑わせたり。

Duffyのマスコットをプレゼントしてくれたり。

アドバイザーの過激発言にも概ね寛容である。

地域連携室キャラクター「要ちゃん」。

学生案で決まったのだけど。

選考及びその後の展開に、オトナ達が、うきうき取り組んでいる。

★

学院の運営に、事務方の力は欠かせない。

大学・短大、中学・高校、幼稚園。

名門と言えど、少子化の波からは逃れられない。



支えるのは、彼ら。

西南ラブ、は強い。

★

とまあ、こんな感じの一年なのだ。

鉄の街、無法松の一生・・・。

とかく男っぽいイメージのある地に、ここまでオトメな学び舎が残っていたなんて。

外界遮断純粋培養ゆえの賜物か。

とはいえ、地域に開かれた大学たれ、はもはや宿命。

他大学や行政との連携も。

守りながら、拓く。をどう進めるか。

西南女学院の二つの大きな指針。

「感恩奉仕」。

「その学びが、あなたの要になる」。

この軸さえぶれなければ。

二年目は、もう少し、学生と係わってみようかな。

★

そうして、今日も、ふうふう、花園を目指す。

「山姥が、来たぞ〜！」。



【石丸氏のプロフィール】



(公財)北九州市芸術文化振興財団理事

西日本工業大学評議員

北九州マラソン実行委員

コピーライターとしてのデビュー作は、マルシヨク・サンリブ「生活は生もの。」。

八幡東区「響ホール」の名付け親でもある。

これまでにユニクロ、新日鉄、花キューピッド等の広告制作及び、北九州市（周年事業）福岡町（現・福津市総合計画）等自治体の広報を担当。

また、1987年北九州ミズ21委員就任をきっかけに30年にわたり、NHK九州沖縄地方番組審議委員、福岡県行政改革審議委員他、観光振興・教育文化芸術振興・街づくり等の各委員会委員を歴任。

この10年ほどは、外部アドバイザーとして、北九州モノレール社外取締役、井筒屋アドバイザー、西日本新聞北九州本社アドバイザー、北九州市立大学広報アドバイザーに就任。

プライベートでは、毎年夏と冬に超異業種交流会（イシマル組）を主催。

著書に「夕刊を読む女。」がある。

西南女学院大学と西南女学院大学短期大学部の地域貢献活動（概要）

本学では感恩奉仕の精神にもとづき、女性らしい豊かな人間力と専門的な実践力で社会に貢献する人材育成を目指しています。座学に加え、学生たちが自ら学外に出向き、さまざまな課題に向き合い、できることをみつけていくことを大切にして参りました。これまでの学生参加の地域貢献活動を活動形態別にみますと次の6つに分けることができます。

- ① 市民公開講座：最新の知識・技術、生活の知恵などを提供する講義や演習
- ② 体験・アクティビティ：あそぶ、たべる、学ぶ、語り合うなどの体験型の企画
- ③ ピアサポートグループ活動：介護や子育ての悩みなどを参加者同士で受けとめ支え合うグループ活動
- ④ 提案とアクション：若い女性の視点を取り入れた商品開発や地域活性化への提案とアクション
- ⑤ 海外における貢献活動：アジア地域での地域貢献活動
- ⑥ そのほか

また、課題別にみると6つに分けることができます。

- ① 健康・食・運動
- ② 福祉・介護
- ③ 子ども・子育て
- ④ 学校教育
- ⑤ 産業・観光
- ⑥ 地域づくり

2017年の地域貢献活動は10件でした。『地域活動論叢』では、課題別に＜子ども・子育て支援と学校教育＞及び＜食と健康＞に分類し（下表参照）、それぞれの1年間の成果と課題をまとめました。本書は、この1年間の学生たちと教職員が地域の皆様とともに歩んだ道のりをコンパクトにまとめたものであります。これらが地域の皆様と私たちにとって共通の宝物となりますことを祈念しております。

表 2017年度に本学で実施された地域貢献活動

<子ども・子育て支援と学校教育>

- ・ だいすきにつぼん [地域の小学生]
- ・ 生き生きチャレンジキッズ [地域の小学生]
- ・ いぼりの森の《みんな、だぁ～い好き！！》“みんな♪フレアイ隊” [地域の未就学児]
- ・ 一緒に遊ぼう [障がいのある子どもとそのきょうだい]
- ・ 極低出生体重児に対する親子遊びの会（ほほえみの会）[極低出生体重児及び超低出生体重児とその保護者]
- ・ 「お菓子の家」の展示発表会を通じた参加型体験学習による地域貢献の取り組み [市民]

<食と健康>

- ・ 『食と健康』に関する地域密着型食育活動の展開 [地域住民]
- ・ 地域住民の運動と栄養に関する栄養相談や食事指導の支援活動 [浅生スポーツセンター利用者]
- ・ SATシステムを使った食事診断会 [一般市民と学生（ESDセンター利用者）]
- ・ 乳がん検診・自己検診法の啓発活動 [幼稚園に通園する園児をもつ母親]

注) [] 内は協働のパートナーあるいは支援の対象です。報告書作成の段階で実施予定のものを含んでいます。

地域貢献活動報告書

だいすき にっぽん

子どもたちに伝えたい「食」と「あそび」と「ことば」

1. 企画名

2. 主催者名 学校法人 西南女学院 『だいすき にっぽん』 実行委員会

3. 企画代表者 西南女学院大学保健福祉学部 福祉学科 稲木光晴

4. 概要

(1) 活動の経緯と特色

2014 年度より「子どもゆめ基金」の助成を受けて、地域の小学生とその家族が日本の伝統文化を体験的に学べる行事を開催しています。日本の文化を熟知して、他の国の文化も受け入れることができる真の国際人になってほしい、そのような思いで企画しました。日本の四季折々の慣習や年中行事には、昔の人々の「智慧」「技」「願い」が込められています。この想いを大切に、大学・大学短期大学部の教職員と地域の職人から次代の社会を担う大学生・短大生へ、そして小学生とその家族へ、バトンをつなげていく活動です。その活動は、以下の特色を有しています。

① プログラム構成

「ことばあそび」：各回のテーマにちなんだ内容で、日本文化を身近に学べるようなあそびをします。内容が充実してきたため、第4回目より、アイスブレイクの位置づけではなく、「食」と「あそび」の間に時間枠をしっかりとって実施するようにしました。

「食」：栄養学科青木ゼミのゼミ生によって、栄養面、内容等を多面的に考えられたメニューで、解説の後、子どもと保護者と共に調理実習をおこないます。今年度は、日本の伝統食という視点だけでなく、例えば、行楽弁当では、自分達でバランスや食べる量等を調整する力を養える等「食育」の要素を例年以上に盛り込みました。

「あそび」：“あそび隊”を中心に講師の先生方とあそびを展開します。本物にこだわり、専門家に事前指導を受けるなど、事前準備をいつも以上に念入りにおこないました。

② 学部学科の枠を超えた活動

参加学生の所属学科は、大学保健福祉学部福祉学科・栄養学科、大学人文学部英語学科、短期大学部保育科。今年度、初めて“お助け隊”に英語学科の学生が加わってくれました。

③ 教職員・学生が協働

教員主導ではなく、教職員・学生関わる者すべてが同等な立場として主体的に活動しています。そのため、運営会議は学生が中心に進めていきます。

④ 思いやりの心を大切に

プログラムそのものだけでなく、さりげない心配りこそ大切に運営しています。また、今年度は1年ぶりに「震災をおぼえて」第5回目にプログラムを組みました。この心は、本学の建学の精神にもつながると思っています。

⑤ 共に学びあうこと

プログラムを企画運営していく中で、学生と教職員は互いに学びあう姿勢を保っています。

(2) 対象者と開催場所

募集人数は、小学生 30 名程度。開催場所は、西南女学院大学・西南女学院大学短期大学

(3) 内容および参加人数

開催日	実施内容	参加者人数
第1回(6/24)	「ことばあそび」北九州と日本各地の“方言” 「食」行楽弁当 「あそび」万華鏡作り	子ども 14名 保護者 9名
第2回(8/23)	「ことばあそび」“魚へん”の漢字 「食」関門海峡だこ 「あそび」“漁”をモチーフにした運動あそび	子ども 27名 保護者 18名
第3回(11/25)	「ことばあそび」日本の紋様の名称 「食」そばうち 「あそび」風呂敷染め	子ども 28名 保護者 20名
第4回(12/16)	「ことばあそび」様々なカルタあそび 「食」御節料理 「あそび」大筆を用いた書道	子ども 27名 保護者 20名
第5回(1/20)	「ことばあそび」12か月の名称 「食」炊き出し食 「あそび」割りばしやロープを使ったあそび	子ども 20名 保護者 14名

5. 評価

- ① 各部門で活動および計画の振り返りを行い、次回につなげます。
- ② 毎回の運営会議で、共有すべき事項は共に話し合い改善策を講じます。
- ③ 実施日当日は随時、参加者の子ども達と保護者に感想を求め、要望や改善点を聴取します。

【子ども】「僕ね、だいすきにつぼん、大好きなんだ。3日前から楽しみで眠れないんだ」等

【保護者】「勉強になることばかりです」「クオリティーが高い」「お金を別途払ってもいいから、夏休みに集中的に開催して欲しい」等の感想が寄せられています。

6. 活動経費

大学共同研究費 (研究代表者：青木るみ子 課題名：児童及び保護者を対象とした日本伝統文化の啓発活動
(だいすきにつぼん)の展開と検証 配分額¥712,000)

個人研究費、参加費 1名¥300

7. 今後の課題

- ・昨年度の課題が全く改善されないままであったため、学生の活動への環境の不便さは今後も課題として残っています。
- ・学外の活動助成金が獲得できるように次年度は努力していきたいです。

8. 御礼

今年度は、北九州市水産課、漁師さん達、子ども図工教室の染色の先生、毎年お世話になっているお蕎麦屋さんや井上さんには、打ち合わせから準備、当日の運営と大変お世話になりました。参加者の子ども達や保護者だけでなく、我々スタッフも貴重な体験と学びをさせていただきました。ありがとうございます。また、この会が毎回充実した活動ができるのは、学生スタッフやお手伝いいただく先生方、その先生のゼミ生の皆様のおかげです。心より感謝いたします。そして何より、毎回楽しみに来てくれる子ども達、保護者の皆様あつての「だいすきにつぼん」です。この会に関わる全ての皆様にお礼申し上げます。

9. 添付資料

広報用チラシ、実施時の様子 (写真資料)

以上

↓ 開催案内チラシ (表)

西南女学院大学
西南女学院大学短期大学部

だいすき にっぽん

2017-2018

子どもたちに伝えたい「食」と「あそび」と「ことば」
西南女学院で「日本の伝統文化」にふれてみよう

子どもたちに日本文化の真の伝承者となって欲しい…
日本の四季折々の慣習や年中行事には
昔の人々の「智恵」「技」「願い」が込められています
だいすき にっぽんは、「触れあう体験」を大切に
楽しく学べるプログラムを準備しています

詳細は裏面をご覧ください

虫 中徳桐織が蝶 種糸巻 三つ道い松葉の丸 菊織
葉付き三つ桃 丸に瓢 達い大根 伊勢海老の丸 結び文
木目陸 糸輪に覗きぬく橋 汽船鐘 鳩 丸に朝顔

↓ 開催案内チラシ (裏)

実施要項

だいすき にっぽん

日本の四季に美しいことばあり

6.24 土 げし あやめはなさく 夏至: 苜蓿華 《食》 行楽弁当を作る 《あそび》 万華鏡を作ってみよう	8.23 水 しょしょ ふかききりまどう 処暑: 蒙霧升降 《食》 北九州近海の 旬の魚を料理しよう 《あそび》 みんなで魚をして 遊ぼう	12.16 土 たいせつ くまあなにこもる 大雪: 熊蟄穴 《食》 御節料理を作る 《あそび》 大筆を使って 字を書こう
11.25 土 しょうせつ きたかぜこのはをはらう 小雪: 朔風払葉 《食》 新蕎麦を打とう 《あそび》 風呂敷を 染めよう	1.20 土 だいかん ふきのはなさく 大寒: 欸冬華 震災の記憶 《食》 炊き出し食を みんなで作ろう 《あそび》 身近なもので工夫 して面白く遊ぼう	●お申込み 下記内容を明記のうえ メールでお申込みください hayashida@seinan-jo.ac.jp 締切日 各回、開催日の3週間前まで

- 開催時間 10:00-15:00(受付9:30)
- 開催場所 西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部
- 受付 8号館1階エントランス
- 募集人数 小学生30名程度(先着順)
- 参加費 1名につき 300円(保険加入料・食材料費)
- 悪天候等で中止する場合は、当日7:00に緊急連絡先へ事務局から連絡します
- 主催 西南女学院「だいすき にっぽん」実行委員会 代表 稲木光晴
- お問合せ 西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部 会計課 林田正雄
093-583-5149 hayashida@seinan-jo.ac.jp

●お申込み
下記内容を明記のうえ
メールでお申込みください
hayashida@seinan-jo.ac.jp
締切日 各回、開催日の3週間前まで

- *参加者のお名前、年齢、学年
- *同伴者の有無
- *緊急連絡先及び連絡方法
- *参加の日時
- *大学までの来校手段
- *参加者のアレルギーの有無とその内容

○お断りしました個人情報には、事務局が管理し、
必ずプログラムにしか利用しません

☞ 毎回、丁寧な解説があります ☞ 学生さんはとても優しい ☞ 市役所の課長さんの講義 ☞ 鮎は、活きたまま届きました



☞ 大好きなお菓子もおかずに大変身



☞ ことばあそびの様子



☞ 初めての
大筆



☞ 本格的な染色を体験。真剣です ☞



☞ 皆勤賞のプレゼント贈呈式 ☞ 卒業する大好きなお姉ちゃんへ



子ども達の作品。素敵です ☞



地域貢献活動報告書

1. 企画名 生き生きチャレンジキッズ
2. 主催者 井堀市民センター（北九州市小倉北区井堀3丁目15番2号）
3. 本学代表者 事務部長 伊東幸雄
4. 参加教職員 藤田准教授、林田会計課会計係長、神山地域連携室職員

5. 概要

- ・西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部(以下、「本学」という)は、井堀市民センターから、「生き生きチャレンジキッズ—小学校ではできない様々な経験を地域との絆や知識から学んでもらう—」というテーマに沿った企画・運営の依頼を受け、小学生自らが体験できるプログラムを、本学を会場に行うこととなりました。
- ・今回は、開催時期が新年に近いということを勘案し、「お正月」をテーマとし、古より言い伝えられている「正月のあそび」と「干支」を取り上げました。
- ・日程等は次のとおりです。

(1)開催日：2017年12月2日（土）9時30分～12時

(2)開催場所：本学7号館

(3)プログラム：

- ①昔の宮中行事や公家の遊びを学ぶ
- ②チーム対戦による異なるカルタ遊びで順位を競う



(カルタ取り、低学年も勝ちに行きます!)

(十二支は理解できました!?)



③パネルシアターによる十二支の起源を学ぶ

④クイズ形式で干支の漢字を解く



(干支の漢字と知っている漢字を上手に組み合わせることができました!)

⑤2018年の干支『戌』を使った年賀状作りに挑戦する



(楽しく、真剣に年賀状を作成中)



(出来上がった作品)

(4)参加者は、小学生が23人、市民センター職員4人、協力者としての学生1人(保育科)であった。



(参加者全員での記念写真)

6. 評価

- ・今回の企画について、参加者である小学生からは、全員が楽しかった、うれしかったとの評価でした(市民センター集計のアンケートから)。
- ・小学生と対象とした企画では、座った姿勢で手を動かすことを長時間継続することよりもからだを使って動き回ることのほうが、評価としては高いようです。

7. 収支の状況

- ・井堀市民センター及び地域連携室助成金からの予算を執行させていただきました。

8. 御礼

- ・本企画は、本年度が3回目です。市民センターの皆様には参加の機会を与えていただき、感謝申し上げます。
- ・学生様には、本企画の運営を全面的に担っていただきました。プログラムはすべてが滞りなく終了し、子どもたちには大きな達成感・満足感を与えることができましたこと、大変感謝しています。ありがとうございました。
- ・また、本学教職員の関係者の方々におかれましても、通常業務終了後の時間を本企画への提案等に割っていただきましたこと、大変感謝しております。ありがとうございました。

9. 参考

- ・この活動は地域連携室のブログに掲載しています。
アドレスは、<http://www2.seinan-jo.ac.jp/chiiki/?p=405> です。

地域貢献活動報告書

1. 企画名 いぼりの森《みんな、だぁ～い好き！！》みんな♪フレアイ隊
2. 主催者名 井堀市民センター
3. 企画代表者 西南女学院大学短期大学部保育科 藤田稔子
4. 概要

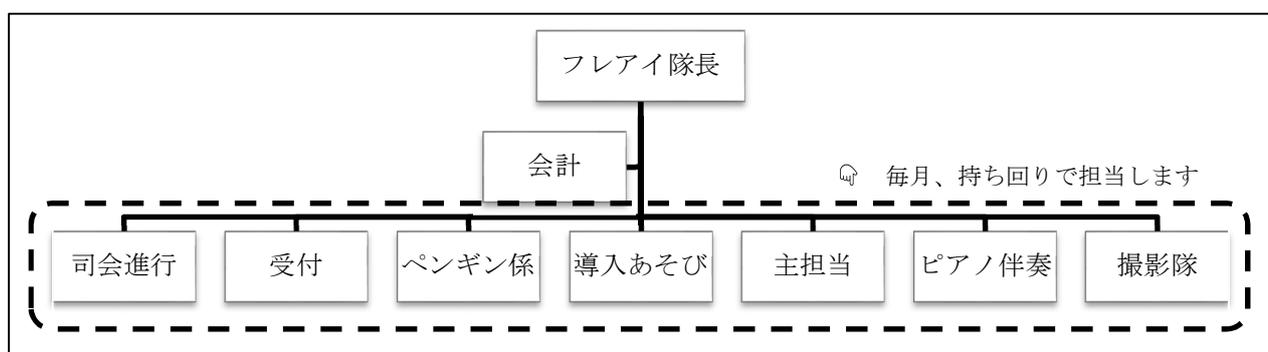
(1) 活動の経緯と特色

短期大学部が位置する井堀小学校校区にある井堀市民センターから、「井堀校区の子育て環境を充実させたいので共に活動して欲しい」との依頼を受け、2016年4月から活動を開始しました。この活動は、保育科2年「こども学特別演習」の一環として藤田ゼミ（以下、フレアイ隊）で担当しています。

子育てフリースペース いぼりの森《みんな、だぁ～い好き！！》は、月に2回開催し、1回は市の保健師・看護師による「子育て相談」と子育てサポーターによる行事が、もう1回は、このフレアイ隊が担っています。フレアイ隊の活動の目的は、「子どもが楽しめるあそび」「親子で触れあうあそび」「子どもが他者（学生）とあそぶ」という3つのあそびを通して、子ども・親・学生の育ちを促します。また、この活動は、以下の特色を有していると考えています。

① 徹底した役割分担

フレアイ隊は、以下の図のような役割分担で運営しています。それぞれの役割でセンターと直接的に関わっていきます。



② 子ども達に分かりやすいプログラム

今年度は、毎回「ペンギンのプール体操」からプログラムは始めました。親子共に身体が温まったところで、主活動へと集中を高めるため「絵本」「手遊び」「パネルシアター」等の主活動に応じた導入あそびをし、メインのあそびにプログラムは進めていきます。

③ ハンドメイドの暖かさを大切に

毎回、子ども達が身につける名札は、フェルトで作ったヒヨコの名札です。1年の最終回では、参加者全員へのメッセージを込めたフォトフレームを、皆勤賞の子どもへは日めくりカレンダーを手作りで作成しプレゼントしました。

(2) 対象者

0・1・2歳児を中心とした未就園児とその保護者

(3) 開催場所

井堀市民センター 多目的ホール

(4) 開催日、内容および参加人数 (8月までは第4木曜、11月からは第1水曜 9:20~10:00)

開催日	内容	参加者人数
4月27日	『おかあさん だいすき』 ~ふれあいあそび~	子ども 18名 保護者 15名
5月25日	『ピクニックに行こう』 ~パネルシアター~	子ども 13名 保護者 12名
6月22日	『あめ』 ~製作あそび~	子ども 16名 保護者 13名
7月27日	『夏祭り』 ~ごっこあそび~	子ども 18名 保護者 13名
8月24日	『かくれんぼ』 ~パネルシアター~	子ども 15名 保護者 11名
11月1日	『ちびっこ運動会』 ~運動あそび~	子ども 11名 保護者 10名
12月6日	『クリスマス会』 ~製作あそび~	子ども 16名 保護者 14名
2月7日	『よい子の音楽会』 ~音楽表現あそび~	子ども 9名 保護者 7名

5. 評価

毎回、実施した日の昼休みに全員が集まり、振り返り会を行い、改善すべき点は改善策まで導き出します。この振り返り会の議事録は、毎回フレアイ隊長が記録をした後フレアイ隊の LINE に貼り、全員がいつでも読むことができるようにしています。議事録を見ると、「安全性の問題について」「(様々な年齢の子どもがいるため) 発達段階に応じた楽しみ方の工夫」「プログラムのスムーズな進行のための工夫」に分類される内容の記述が多くみられました。

6. 活動経費

井堀市民センターの経費でさせていただきました。

7. 今後の課題

- ・毎回、活動の次の時間が授業の為、慌ただしく帰校しています。参加者の皆様には活動終了後は忙しなく対応することになり、申し訳ないと思っております。
- ・今年度は、前期と後期と曜日が異なり、途中で保健師さん達と開催日が変わってしまいました。また、時間割の決定が遅く、センターの広報にご迷惑をおかけしています。もう少し余裕を持った計画立案ができるようにしたいです。

8. 御礼

学生達を娘の様に成長を見守り、活動をサポートして下さる井堀市民センターの館長様はじめ職員の皆様、子育てサポーターの方々に心より感謝申し上げます。また、毎回楽しみにして参加して下さる子ども達とお母様にお礼申し上げます。

9. 添付資料

広報用チラシ、実施時の様子 (写真資料)

以上

📢 開催案内チラシ

いぼりの森の「みんな! だぁ〜いすき!」 <井堀市民センター>

2017年度 みんな♪フレイアイ隊 年間計画					2017年度 みんな♪あどび隊 年間計画				
西南女学院大学短期大学部 学生担当					子育てサポーター、子育てボランティア担当				
9時20分~10時					10時~11時30分				
月	開催日	テーマ	内容		月	開催日	テーマ	内容	
第1回	4月 4月27日(木)	「おかあさん だいすき」	ふれあいあそび		第1回	4月 4月5日(水)	「はじめまして! あそびたい! お花が笑った」	自己紹介、舞のぼりもあるよ	
第2回	5月 5月25日(木)	「ピクニックへ行こう」	パネルシアター		第2回	5月 5月3日(水)	祝日 休み		
第3回	6月 6月22日(木)	「あめ」	製作あそび		第3回	6月 6月7日(水)	「からだを動かそう!」	リズム体操	
第4回	7月 7月27日(木)	「夏祭り」	ごっこあそび		第4回	7月 7月5日(水)	「七夕」	七夕のたんざく作り	
第5回	8月 8月24日(木)	「かくれんぼ」	パネルシアター		第5回	8月 8月2日(水)	「夏休みフリースペース」	フリー	
第6回	9月 9月28日(木)	学生が実習中		お休み	第6回	9月 9月6日(水)	「おばあちゃんといっしょ!」	デイサービスとの交流会	
第7回	10月 10月26日(木)	学生が実習中		お休み	第7回	10月 10月4日(水)	「秋の落葉ひろい」	紙あそび	
木曜日水曜日入れ替え(時間: 9時20分~10時)					水曜日木曜日入れ替え(時間: 10時~11時30分)				
月	開催日	テーマ	内容		月	開催日	テーマ	内容	
第8回	11月 11月1日(水)	「ちびっこ運動会」	運動あそび		第8回	11月 11月23日(木)	祝日 休み		
第9回	12月 12月6日(水)	「クリスマス会」	製作あそび		第9回	12月 12月28日(木)	御用納め 休み		
第10回	1月 1月3日(水)	お正月 休み			第10回	1月 1月25日(木)	「節分」	豆まき、鬼たいじ	
第11回	2月 2月7日(水)	「よい子の音楽会」	音楽表現あそび		第11回	2月 2月22日(木)	「ちょっと早めのおひなさま」	おひなさま作り	
水曜日木曜日入れ替え					木曜日水曜日入れ替え(時間: 10時~11時30分)				
月	開催日	テーマ	内容		月	開催日	テーマ	内容	
第12回	3月 3月22日(木)	学生が学校行事等		お休み	第12回	3月 3月7日(水)	「おたのしみ会」	?	

☆原則、第1水曜日と第4木曜日がフリースペースの実施日です。第1水曜日は、「子育て相談」も併せて実施しています。



子ども達もお母さん達も真剣!
今日の活動はプログラムをご覧ください



お母さんから離れてお姉ちゃんのお膝の上でもへっちゃらよ!



親子で製作あそび

皆勤賞の子ども達には手作り日めくりカレンダー



ちびっこ運動会の様子



参加者の皆さんへ手作りフォトフレーム



1. 企画名：一緒にあそぼう
2. 団体名：ちゃれんじ
3. 企画代表者 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科 助教 山本 佳代子

4. 概要

(1) 目的

障害のある子どもときょうだい、その家族を対象とし余暇活動支援を行う。活動ではさまざまなレクリエーション活動を通し、子どもたちが楽しく体を動かしながら多様な動きを身につけること、仲間と体験を共有し、仲間と一緒に遊ぶ楽しさを知ることが目的とする。

またスタッフとして参加する学生は、子どもたちとの関わりを通し、障害についての理解を深めること、場面に応じた声かけや関わり方を知ること、プログラムの企画や実践の方法について学ぶことを目的とする。

- ①対象：障害のある子どもときょうだい、その家族
- ②内容：体育館でのレクリエーション活動・水泳活動・休日を利用してのおでかけ・食育活動
- ③活動場所：西南女学院大学第二体育館・障害者スポーツセンター（アレアス）他

(2) 実施日時・場所・参加者数・実施内容

実施日	時間	場所	活動内容	参加者数	スタッフ数
4月20日(木)	16:00-17:30	西南女学院大学 第二体育館	レクリエーション活動	子ども7名 保護者5名	16名
5月18日(木)	16:00-17:30	交通公園	自転車に乗ろう	子ども7名 保護者7名	15名
6月15日(木)	16:00-17:30	西南女学院大学 第二体育館	レクリエーション活動	子ども3名 保護者2名	16名
7月13日(木)	16:00-17:30	障害者スポーツセンター(アレアス)	水泳活動	子ども4名 保護者2名	5名
7月20日(木)	16:00-17:30	障害者スポーツセンター(アレアス)	水泳活動	子ども7名 保護者5名	9名
7月24日(月)	10:00-12:00	グリーンパーク	かぼちゃの収穫	子ども2名 保護者2名	10名
8月17日(木)	10:00-14:00	平尾台	平尾台で遊ぼう	子ども10名 保護者6名	13名
8月24日(木)	16:00-17:30	障害者スポーツセンター(アレアス)	水泳活動	子ども5名 保護者3名	5名
9月7日(木)	16:00-17:30	障害者スポーツセンター(アレアス)	水泳活動	子ども4名 保護者2名	5名
9月14日(木)	16:00-17:30	障害者スポーツセンター(アレアス)	水泳活動	子ども5名 保護者4名	6名
9月30日(土)	10:00-13:00	西南女学院大学 調理室	親子でクッキング	子ども8名 保護者6名	14名(栄養:山田ゼミ含む)
10月5日(木)	16:00-17:30	西南女学院大学 第二体育館	レクリエーション活動	子ども4名 保護者2名	21名
10月16日(月)	10:40-12:00	西南女学院大学 531 教室	スタッフミーティング		15名

10月19日(木)	16:00-17:30	西南女学院大学 第二体育館	レクリエーション活動	子ども7名 保護者5名	14名
11月16日(木)	16:00-17:30	西南女学院大学 第二体育館	レクリエーション活動	子ども9名 保護者6名	14名
12月7日(木)	16:00-17:30	西南女学院大学 第二体育館	レクリエーション活動	子ども9名 保護者6名	18名
12月11日(月)	10:00-12:00	西南女学院大学 531 教室	保護者とスタッフ懇談会	保護者3名	19名
12月21日(木)	16:00-17:30	西南女学院大学 526 教室	クリスマス会	子ども10名 保護者7名	19名
1月18日(木)	16:00-17:30	西南女学院大学 第二体育館	レクリエーション活動	子ども5名 保護者4名	15名

(3) インシデントの有無
なし

5. 評価

◇活動後の記録作成

活動後、学生スタッフは、子どもの様子や自分自身の関わり方、また活動の中で気になった点などについて記録を作成する。全員分を集約し次回活動までに全体で共有し、次の活動につなげる。

◇保護者の意見

水泳活動、食育活動、野外活動後、また年度末にアンケートを実施し、保護者の意向を確認し活動に反映させる。他に今年度は、学生から「お母さん方と話す機会を設けたい」という提案がだされ、4年生を中心に会の企画、運営を行った。懇談会では、普段の活動で聞くことができないお母さん方の子どもに対する思いや、障害のある子どもを育てることの大変さや嬉しさなどさまざまな思いを聞くことを通し、今後、【ちゃれんじ】で自分たちは何ができるのかということを考える機会をいただいた。

◇今後の課題

学生スタッフ20名の内、11名が卒業するため、来年度の活動をどのように実施していくかについて検討が必要。

活動では、子どもたちの安全確保のため、マンツーマンでの対応が望まれる。これまでと同様の活動内容を実施できるか、できない場合どのような形で継続していくか学生スタッフと検討していく。

6. 決算

西南女学院大学地域貢献活動助成金：16,300円（腸内細菌検査代他） 子どもゆめ基金：216,000円

7. 謝辞

活動に子どもたちを連れてきて、子どもたちと触れ合う時間を作ってくださいる保護者に感謝致します。次に、子どもたちが楽しく活動できるよう、活動の企画、事前準備、当日の運営、次回に向けた振り返りに真摯に取り組み、共に活動を作り上げてくれた学生スタッフに感謝申し上げます。

また、平尾台の活動にご協力いただいた福祉学科の稲木光晴先生、食育活動と一緒に取り組んでいただいた栄養学科の山田志麻先生とそのゼミ生の皆さん、グリーンパークにも感謝申し上げます。

1. 企画名 極低出生体重児に対する親子遊びの会（ほほえみの会）

2. 主催者名 ほほえみの会

3. 企画代表者 北九州市立医療センター小児科 松本 直子

4. 概要

(1)活動の経緯と特色

1)極低出生体重児の障害の発生率については、脳性まひ等の重篤な神経学的後遺症の他、学習障害や注意欠陥/多動性障害といったより軽微な障害のリスクが指摘されており、退院後も継続して子どもの発達状態を確認していく必要がある。一方、出生直後に子どもが新生児集中治療室(以下 NICU)に入院となった事の影響として、母子の愛着の形成が阻害されうることや虐待のリスクの高さが指摘されている。ほほえみの会は、2005年度に北九州市立医療センターの医師の申し出により計画を始め、2006年度より実施・運営を開始した。これまでの研究より、母親にとっては「ほほえみの会」が発達早期に母親が気軽に専門家に相談できる場となっていると同時に、同じ境遇にある母親同士の情報共有の場となっていることが示唆された。また年に1回の同窓会の開催により、「ほほえみの会」がわが子の発達を共に見守る存在として認識されていることが明らかとなった。一方子どもの発達に関する成果として事例を中心に検討が行われてきた結果、社会性や言語・コミュニケーションの発達に著効の見られた児、対人面の発達が運動発達を促す可能性等が示唆された。

2)対象者：北九州市内の3つの病院を生存退院した、参加時点で重篤な後遺症のない極低出生体重児及び超低出生体重児である。対象者の選定は各病院に依頼し、案内と返信用はがきを病院から対象者に送付してもらっている。参加希望者には、本学宛に返信用はがきを送付してもらっている。

3)活動の目的は、a)身体や指先をつかった遊びを通して子どもの発達の基盤をつくること、b)同胞とのかかわりを通して、友達とのかかわり方や社会性を学んでもらうこと、c)早産で小さく生まれた子どもをもつ保護者がお互いの悩みや心配事を相談しあう場を提供すること、d)保護者が医師や保育士など専門家に対して気軽に相談できる場を提供すること、e)家での親子のかかわりに役立つ遊びを紹介すること、である。

4)ほほえみの会の運営・実施は全て本学スタッフがやっている。病院は対象者に会のアナウンスをすること、質問会への参加に携わっている。

5)保健福祉学部3学科の2年生以上の学生が対象となっているが、学科毎にリクルートの方法は異なる。栄養学科は基本的に4年生の天本ゼミの学生が参加している。福祉学科及び看護学科は、小児看護や保健師、保育士、障害児・児童領域等子どもにかかわる専門領域に関心のある学生に対して募集を募り、学生の自由意思に基づき参加が決定される。学生は、病院との打ち合わせや対象者との連絡調整以外の全ての運営に携わっている。期待される学生の学びとしては、対象理解の深まりや広がり、安全危機管理の意識の向上、対人援助技術の向上、保育技術の向上、他職種間の連携・協働の力などが挙げられる。

6)企画内容及び日時・場所

企画内容及び日時は別紙参照。場所は6号館3階の行動観察室を拠点とし、活動内容に応じて校内各地を利用した。

7)予算

福祉学科の教育経費より60,000円、それ以外の支出は対象者の参加費(1人350円、レク

リエーション保険代を含む)及び申請者の個人研究費及び私費で賄っている。

8)公的資金による助成金

なし

9)学生・教職員及びスタッフの交通費

学内活動であるため学生の交通費・報酬はなし。親ミーティングの講師も全てスタッフで賄っているため報酬はない。

5. 評価

(1)アウトカム評価

対参加者：通年でご参加いただいた参加者より「こんなにきめ細やかな配慮の下、支援していただいて、感謝しかない」、「至れり尽くせり」、「学生さんも一所懸命準備してくれて、ありがたかった」等の感想をいただいた。

対学生：学生の学びに関する評価は特に行っておらず、客観的な資料はない。しかし、以下のような行動変容が見られた：①実習中も休日等を使って様子を見に来る、②活動前日に長時間準備を行う、③空いた時間を使って VTR 視聴をする、④子どもの行動の意味について教員に質問に来る、など自発的・能動的な動きが見られた。

(2)プロセス評価

対参加者：子どもや家族のニーズを理解するために、活動終了後に振り返りを行った。学生から見た現状と課題についてそれぞれの役割から意見を述べてもらい、教員が解説・助言を行う形で支援の方向性や目標などを共有した。

対学生：アウトカム評価参照。

(3)企画の妥当性と今後の課題

参加いただいた保護者の満足度が高かったため、活動自体の目的は一定程度達成できたものとする。学生に対しては客観的な評価を行っていないが、その必要性があるのかどうかについては甚だ疑問である。本活動は学生の自由意思に基づくものであり、学生の求める学びが提供できていれば活動を継続するであろうし、そうでなければ辞めるであろう。辞めるに当たっては「何ら遠慮することはない」と常日頃から伝えており、辞めたことで当該学生が不利益をこうむることが一切ないよう最大限配慮している。

今後の課題としては、参加希望者数が例年少ない(e.g., 本年度通年参加者は 3 名)ため、広報活動に力を入れなければならないと考えている。しかし使用教室等ハード面での制限がある(e.g., 6 名以上だと狭すぎる)ため、そのバランスが難しい。

6. 決算

なし

7. 謝辞

学生の学びを見守って下さった参加者親子に深謝いたします。また親ミーティングの講師をお引き受けくださった卒業生の保護者の皆様のお蔭で活動に幅をもたせることができました。さらにご多忙の中、運営に携わって下さった病院の先生方、本学教員の皆様に感謝いたします。

文責 保健福祉学部福祉学科

野井 未加

「お菓子の家」の展示発表会を通じた参加型体験学習による地域貢献の取り組み

2017年度 木村ゼミ主催

西南女学院大学短期大学部 生活創造学科 木村久江

【目的】

○「お菓子の家（本学ではジンジャーブレッドハウス）」の創作授業における各個人の作品を、学外で展示・発表することにより、授業を受けるだけにとどまらない体験型の学習を行うこと

○展示会における来訪者との交流を通じて、調理製菓スキルの向上だけではなく、学生の会話、討議、企画などのコミュニケーションの能力を向上させること

○来訪者との「ミニチュアお菓子の家」制作講習会などを展示と併行して行い、地域社会の方へ食育体験の場を発信・提供し、学生に地域交流を体験させること

以上、アクティブラーニングにより学生のどのような力を伸ばせるか、地域連携や貢献の成果をどのように学生に意識させ自分の大学への貢献感や所属感を醸成できるかの二つの点を踏まえて、今までの学習過程を改善、整理することを試みた。

【内容】

2017年度に企画した体験学習の内容を以下の表にまとめる。「お菓子の家」の作品展示発表会の開催と展示会における来訪者へのインタビューを通じた交流や制作体験イベントによる交流などである。

2017年度「お菓子の家」展示・交流を通じた参加型体験学習の概要

開催場所	開催テーマ	時期	概要	アンケート調査記入者	入場者数
小倉城内 (北九州市小倉北区)	国際交流をしましょう アジアの人の知らない世界	2017. 5.13 ～6.4	・小倉城4階市民の大広間における作品展示 ・「ペーパークラフトによるお菓子の家制作のイベント講座」と題し、親子でペーパークラフトのお菓子の家の制作講習を行った(展示会、国際交流イベントと同時開催)。	合計 524名 内 外国人156名	約18,000名 (小倉城 調査結果)
小倉井筒屋本館8階 (北九州市小倉区)	童話の世界で心豊かに	2017.12.6～ 12.11	・デパート内共用スペースにおける作品展示 ・「ミニチュアお菓子の家のデモンストレーション」と題し、親子の参加を募り、ミニチュア版お菓子の家の制作講習を行った(展示会と同時開催)	合計 648名	150,500名 (小倉井筒屋 調査結果)
福岡銀行 北九州営業所2階ロビー (北九州市小倉北区)	オリジナルツリーとともに 童話の世界で心豊かに	2017.12.13～ 12.22	・福岡銀行オリジナルクリスマスツリーとお菓子の家卒業作品を共同展示 ・「ペーパークラフトによるお菓子の家制作のイベント講座」と題し、親子でペーパークラフトのお菓子の家の制作講習を行った(展示会と同時開催)。	合計 80名	約6400名 (福岡銀行 調査結果)
クロサキメイト 2階特設会場	夢と創造の世界を ～お菓子の家づくりで異文化を知ろう～	2018.1.10～ 1.23	・黒崎メイト内共用スペースでの作品展示 ・段ボールによるお菓子の家制作のイベントを企画(展示会と同時開催)	合計 210名	調査集計中
西部ガス株式会社 ヒナタ北九州 (リバーウォーク内)	親子でお菓子の家づくりを 体験しよう	2018.1.20	「クッキーのミニのお菓子の家」の制作と展示 およびコンテストの企画	合計 14家族	参加者 約40名 (西部ガス調べ)
北九州市営バス内 (北九州市内一円)	ハッピーバレンタインバス	2018.1.20～ 2.14	・市営バス車内へ、学生の「お菓子の家」の作品展示、親子イベント制作作品の展示、および車内への装飾 ・当該バス2台をリバーウォークでバスを展示し、実際の市内運行に使用した。		約12500名 (北区管内交通局調べ)
高齢者複合施設 「ふれあいの里とばた」	お菓子の家で癒しの 空間を	2018.2.1～	・高齢者複合施設における作品の展示と施設の慰問		展示中
北九州市立医療センター 健和会大手町病院内	お菓子の家で癒しの 空間を	2018.2.1～2.16 2018.2.1～	・病院共用スペースにおける作品の展示 (作品は、一部づつ分けて展示)		展示中

【評価】

○来訪者の感想が与えた学生への達成感、満足感

各展示会ともに多くの見学者を集め、各展示会で数百名の方々から学生がフィールドワークにより直接アンケート回答をいただいた。選択式回答では半数を超える回答者から、「かわいい」「夢がある」「癒された」「見る機会があって良かった」「食べたくなった」などの肯定的な感想をいただいた。また自由記載においても、「心が癒されてやさしい気持ちになった」「手間と愛情が感じられる」「細かなところまで工夫されている」作品の技巧への称賛のことばや「今後も続けてほしい」「楽しい気持ちにされてもらってありがとう」などの作者への激励をいただき、学生に授業では経験できない達成感、満足感を与えるものとなった。

○実施後の感想記述や自己評価からみた分析

学生達の感想から、一連の展示会において学生自身が得た達成感や満足感の要因は、インタビューにおける自分達の作品への共感や称賛であったことに加えて、コミュニケーションそのものができたこと、自分の話を他人が聞いてくれたことや説明できたことに驚きや喜びを感じていることが分かる。

お菓子の家という苦勞して制作した作品を単に見てもらえたことだけでなく、来訪者との双方向のやり取り

2017年度の学生の自由記載から見える自己評価			
学生の感想や気づき	項目	自己評価	醸成される効果
・初対面の人と話せることの達成感 ・自分から話すことの意味とできる喜び ・地域の人・外国人との対話体験の達成感・喜び	コミュニケーション力	能力感・自己肯定感	これらの達成感や体験を与えてくれた大学への帰属や所属への満足感の醸成
・小さい子どもをどうやって楽しませるか ・子どもやその親との交流の喜び	育児・家族・家庭		
・難しいと思っていたことができた意義 ・やり遂げることの意義 ・褒められることの喜びと満足感	自らの実行力	貢献感の向上	
<イベント企画における> ・見えないところで頑張っている人の存在 ・協力して行うことの大切さ			
<イベント企画実行における> ・周囲や友人の励ましの存在と効果 ・励ましや支えの重要性		他者に対する信頼感	

ができたことが、学生達の成功体験を作っているということだと思ふ。学生達は、自分の知らない他人との交流において、自分から話ができたと、聞いてもらえたこと、温かい言葉をかけたもらったこと、意見がもらえたことなどに達成感を感じている。合わせて企画実行を通じて、多くの人との協力やお互いの励ましや支援が社会において必要であることを経験として知ることができたと思われる。一連の体験型学習によって、自己に対する「能力感・自己肯定感の向上」と「貢献感の向上と実感」、他者や地域に対する「信頼感・所属感の向上」が伺え、自らの総合的な対応力の自己採点評価では、5点満点で自己評価した結果は、2.0点(受講開始)→4.3点(受講後)であった。また、この達成感により、体験を与えてくれた大学へ帰属や所属への満足感の醸成に繋がっていくと考える。

○授業評価アンケート結果

授業・演習終了後に、学生に対して自己評価アンケートを無記名で実施し、達成度や満足度を5点満点で評価してもらった。以下の設問「コミュニケーション力や表現力を高めることができた」「授業において話し合い、発表などの参加する機会が作られた」に対する評価点の受講者平均は、それぞれ4.3点、4.2点であり、今回の地域貢献の取り組みは、アクティブラーニングとしても評価できるものと思われる。

○地域連携における自治体からの評価

平成29年4月から平成30年3月までに小倉北区で開催された作品展示会やお菓子の家の制作イベントが、北九州市市民文化スポーツ局が主催する平成29年度の「まちづくりステップアップ事業」として認定された。これは北九州市が、地域住民の交流の促進となる活動、まちづくりにつながる研修等の活動、国際交流の促進にかかわる活動等を支援する事業に対して認定するものである。

【決算】 (2018年3月初旬まで活動予定のため、2月28日現在未決算)

北九州市助成金 245,000円 (まちづくりステップアップ事業) ・ 本学地域貢献活動助成金 31,422円

【謝辞】

本学の各展示会に来場し、アンケートなどに協力していただいた地域の方々、また企画に賛同し会場を提供いただいた、株式会社井筒屋、福岡銀行北九州営業部、株式会社メイト黒崎、株式会社ヒナタ北九州、小倉城、北九州市交通局、病院(医療センター、八幡病院、健和会大手町病院)、高齢者複合施設「ふれあいの里 とばた」の皆様へ感謝申し上げます。また後援を頂きました北九州市にお礼申し上げます。

↓◎小倉城展示案内チラシ



↓◎井筒屋・福岡銀行・西部ガス 市営バス展示案内チラシ



↓◎クロサキメイト展示案内チラシ



↓◎小倉城 展示・イベント風景(2017年5月)

↓◎小倉井筒屋 搬入・イベント・展示風景(2017年12月)



↓◎福岡銀行 北九州営業部 展示・イベント風景(2017年12月)



↓◎西部ガス ヒナタ北九州 (2018年1月)

「クッキーのミニのお菓子の家」制作のイベント

↓◎クロサキメイト展示・イベント風景(2018年1月)



↓◎市営バス「パッピーバレンタインバス」市内走行 お菓子の家を車内展示・飾りつけ(2018年1月～2月)



地域貢献活動 成果報告書

1. 企画名：『食と健康』に関する地域密着型食育活動の展開
2. 主催者名：西南女学院大学保健福祉学部・九州歯科大学口腔保健学科
3. 企画代表者：西南女学院大学保健福祉学部栄養学科 田川辰也

4. 概要

(1) 活動の経緯と特色

すべての国民が心身の健康を確保し、生涯にわたって生き生きと暮らすためには、何よりも『食』が重要である。食の多様化により引き起こされた、メタボリックシンドロームなどの生活習慣病の蔓延を解決するためには、食育としての取り組みが必要である。そこで、本学栄養学科および九州歯科大学は、2014年度より、地域住民の健康増進に貢献することを目的とした『食と健康』に関する公開講座を開催している。本取組は『講演』と『食事提供・食育イベント』をセットにした学生参加型の社会貢献事業であり、現在、本取組は4年目を迎えている。本取組は地域と大学との連携を深め、地域住民への食に関する普及啓発活動を推進し、健康寿命延伸のための社会貢献事業の構築を目指すと同時に、両大学の学生が一連の食育推進活動を実体験することにより、社会貢献ならびに専門職業人としての意識を高め、専門的知識を備えた人材養成を推進することを目的とする。

(2) 対象と開催場所

参加者：北九州市の地域住民 開催場所：西南女学院大学8号館8101教室

(3) 実施日時、参加者数、実施内容

◆ 第1回

開催日	7月2日(土)	一般参加者数	118名
講演テーマ	『それは突然やってくる！急性心筋梗塞の恐怖』		
講師	西南女学院大学保健福祉学部栄養学科 田川辰也教授		
食事提供	『一汁三菜減塩ランチ』		
イベント	血圧測定、血管年齢測定、骨密度測定、減塩食品の展示		

◆ 第2回

開催日	8月26日(土)	一般参加者数	114名
講演テーマ	『「もしも」のために備えてますか？～災害時の食のお話～』		
講師	西南女学院大学保健福祉学部栄養学科 境田靖子講師		
食事提供	『備蓄食材を使ったアイデアランチ』		
イベント	血圧測定、血管年齢測定、骨密度測定、非常食の展示		

◆ 第3回

開催日	10月21日(土)	一般参加者数	133名
講演テーマ	『腸活でスッキリ！お腹にいいこと始めませんか？』		
講師	西南女学院大学保健福祉学部栄養学科 田川辰也教授・近江雅代教授		
イベント	血圧測定、血管年齢測定、骨密度測定、腸年齢チェック		

◆ 第4回

開催日	12月2日(土)	一般参加者数	114名
講演テーマ	『美味しく食べて脳を鍛えましょう』		
講師	九州歯科大学口腔保健学科 吉野賢一教授		
食事提供	『初冬のごちそう繊維たっぷりランチ』		
イベント	血圧測定、血管年齢測定、骨密度測定、歯科相談、舌圧測定		

- (4) インシデントの有無：なし

5. 評価

(1) アウトカム評価

2016年度は参加者より200円、2017年度は300円を食事代として徴収しているにも関わらず、応募数および参加者数が減少することはなかった。さらに、2016年度までの申込数平均134名から2017年度は148名と、応募数は増加しており、本取り組みに対する地域住民の関心および満足度の高さが窺える。

4年間で計15回実施しているが、2017年度最終回参加者の約40%が6回以上の参加経験あり、リピーターが多いことが本取組の特徴と言える。参加者（地域住民）においては、講演の聴講に加え、講演に関連した食事の喫食やさまざまな体験型イベントへの参加し、自身の身体状況や生活習慣を顧みることにより、食生活や運動状況等の生活習慣改善への強い動機づけに繋がっていると考えられる。

(2) プロセス評価

本事業は、教員と学生の協働による、地域住民を対象とした健康と食に関する支援活動であるとともに、将来を担う専門的知識を有する人材の養成・育成を目的としている。そのため、本事業への学生（主として4年生）の積極的参加を促しており、学生は食育イベント（血圧測定、血管年齢測定、骨密度測定、展示等）および講演後の食事提供（献立作成、検収、大量調理等）を担当する。一連の食育推進活動を実体験することにより、両大学の学生は、社会貢献の大切さを学び、専門職としての意識が向上すると考えられる。

(3) 企画の妥当性と今後の課題

年度初めの4月にミーティングを開催し、実施日および演者を決定している。講演テーマについては前年度アンケートから、地域住民の関心が高いものを取り入れている。食育イベントについては毎回指導教員と学生スタッフとで内容を検討し、骨密度測定（骨活レシピの作成含む）、血管年齢測定、血圧測定、減塩食品の展示、食育SATシステムによる食事診断等を実施している。食事提供についても、献立決定から試作、栄養教育媒体（リーフレット）の作成まで学生が行っている。また今年度は、福岡県内での災害発生を受け、災害時の食をテーマにした講演と非常食の展示を行い、災害に対する意識の啓発にも貢献した。

本取組では、参加者にリピーターが定着し、公開講座への参加が市民交流の場となり、健康増進に対する意欲向上だけでなく、高齢者の閉じこもり予防等にも繋がっていると考えられる。今後の課題として、継続実施のため、学内外の研究費の獲得を積極的に行うとともに、新規参加者を促すために近隣市民センターへの広報活動等を検討している。

また、現在、本事業は、4年次学生が主体となって行っているが、今後は1～3年次学生の参加を促し、早期体験学習としての運用も検討する。

6. 決算

別紙に記載

7. 謝辞

本事業の一部は、『2017年度西南女学院大学共同研究費』により、実施されたものである。また、本公開講座にご参加いただきました地域住民の皆様ならびに多大なるご協力を賜りました西南女学院大学および九州歯科大学の教職員・学生の皆様に対し、心より感謝申し上げます。

8. 添付資料

- ・写真資料
- ・決算報告

写真資料



写真 1：講演



写真 2：食育イベント(血圧測定)



写真 3：食育イベント(骨密度測定)



写真 4：(非常食品の展示)



写真 5：学生による献立説明



写真 6：給食提供&喫食

決算報告

2017 年度 西南女学院大学保健福祉学部・九州歯科大学 連携公開講座
決算書

収入	予算額		¥1,051,000
	参加費	7 月	¥35,400
		8 月	¥34,200
		12 月	¥33,600
	合計		¥1,154,200

支出	消耗品		¥513,354
	支払手数料	郵送費	¥31,638
		印刷費	¥349,898
		保険代	¥6,150
		腸内細菌検査	¥43,200
合計		¥944,240	

残高	¥209,960
----	----------

1. **企画名** 地域住民の運動と栄養に関する栄養相談や食事指導の支援活動
2. **主催者名** 西南女学院大学及び戸畑スポーツコミュニティ事業団 健康増進活動
組織名 北九州市立 浅生スポーツセンター (株式会社オリエンタルコンサルタンツ)
3. **企画代表者** 西南女学院大学 保健福祉学部 栄養学科 講師 山田志麻
福祉学科 稲木光晴教授、山本佳代子助教、栄養学科 石井愛子助手
北九州市立 浅生スポーツセンター 総括責任者 川本卓史

4. 概要

(1) 背景及び目的

この活動は戸畑 D 街区スポーツ施設の指定管理者である株式会社オリエンタルコンサルタンツとの協働事業として、スポーツセンターを中心に地域住民の食や健康の維持増進を推進する活動としてスタートしました。これまで身体活動量の多い者や、運動をよく行っている者は、総死亡、虚血性心疾患、高血圧、糖尿病、肥満、骨粗鬆症、結腸がんなどの罹患率や死亡率が低く、また、身体活動や運動が、メンタルヘルスや生活の質の改善に効果をもたらすことが認められています。高齢者においても歩行などの日常生活における身体活動が、寝たきりや死亡を減少させる効果があることが示されています。浅生スポーツセンターは、地域住民が気軽に利用できるスポーツ施設として有用であると考えられますが、これまでに公的なスポーツ施設では、運動と食事や栄養について気軽に相談できる窓口がなかったのが現状です。そのため、本事業では、地域住民が日頃の「栄養」や「食べ物」、「サプリメント」や「運動と食事」等について相談ができるよう、栄養相談ブースを定期的に設置し、個人の健康管理や栄養の改善を図ることを目的としました。

また、学生にとっては、健康の維持増進を目的に参加している利用者（特に高齢者）を対象に、簡易栄養相談を行うことで、高齢者の食事や栄養の実際を知ることが出来ます。将来、健康保健分野の仕事に従事する学生にとって、本活動は食事指導やコミュニケーションスキルを身につける貴重な経験になると考えます。

(2) 対象者及び開催場所

対象者：平日の浅生スポーツセンター利用者（主にシニアを対象とする）

※診断や測定結果の利用について説明を行い、同意を得られた方に行った。

実施日：2017年6月、9月、12月、3月の平日（午前・午後）の3日間

実施場所：浅生スポーツセンター 会議室

参加者数：1クール 10～15名

(3) 実施内容

ソフトを使用した簡易栄養診断および栄養相談による食生活の見直しを、体組成測定 (InBody)、血色素測定 (ASTRIM FIT) を利用したモニタリングにより、体組成分析（適正体重、筋肉量、脂肪量、肥満指数、部位別筋肉量や部位別脂肪量）や貧血チェックを行い、運動や日頃の活動に見合った食事の提案を行った。1人当たり所要時間は10～15分程度としました。記入用紙は、同意書、食事チェックシート、高齢者用アンケートの3枚、配布用紙は、食事診断結果表、InBody結果表、血色素測定表の3枚としました。

5. 評価

6月に行った栄養相談の概略のみを以下に示します。

【結果】

対象者は男性 11 名、女性 39 名の計 50 名で、男性の平均年齢は 70.9 ± 7.5 歳、女性の年齢は 71.4 ± 5.3 歳でした。男性の身長は 167.0 ± 7.9 cm、体重は 63.7 ± 8.3 kg、女性の身長は 152.0 ± 5.4 cm、体重は 52.1 ± 10.6 kg でした。男性の BMI は 22.9 ± 1.8 、女性の BMI は 22.5 ± 4.2 で、その内訳は、やせ 4 名、標準 37 名、肥満 9 名でした。既往歴は高血圧が 25% と最も多く、次いで高脂血症 17.9%、糖尿病 12.5%、骨粗鬆症 7.1% の順でした。ヘモグロビン推定値は男性 14.5 ± 1.3 、女性は 13.4 ± 1.0 で、貧血傾向にある者は男性 9 名中 2 名、女性 38 名中 4 名でした。握力は、男性は 32.5 ± 7.4 kg、女性は 20.0 ± 4.1 kg でした。また、体組成測定より、身体機能が低下している者は、男性 3 名、女性 10 名、筋量の減少が認められた者は、男性 3 名、女性 20 名でした。サルコペニアは、男性 1 名、女性 8 名でした。また、アンケートの結果より、肥満者は標準体重の者に比べ、「一人で外出」する割合が低く、「転倒不安」、「物忘れ」、「疲労感」の割合が高い結果となりました。

【結論】

本調査の結果から、地域に在住する比較的活動量が多い自立した高齢者であっても、筋肉量が減少し、身体機能が低下している可能性が示唆されました。このことから、今後は運動の質や量、食欲、食事内容や食事摂取量等からのアプローチが、サルコペニアを予防するために必要であると考えられました。(2017年10月7日家政学会九州支部大会にて発表)

利用者の声

- ・日頃の食事の悪いところや不足している栄養がわかってよかった。
- ・正確な体組成がわかり、継続的な経過が数字として見られるので励みになる。など

6. 決算

活動助成金：50,000 円

支出：栄養ソフト（ヘルスジャッジ3）48,660 円

7. 今後の課題：

- ・学生の授業に支障のないスケジュール調整
- ・リピーターの個人対応及びその後の追跡
- ・利用者の要望に見合った調理実習の検討

株式会社オリエンタルコンサルタンツが管理する若松グリーンパークで使用しているキッチンカー等を利用した食のイベントなどを検討中。

- ・健康体操教室、食育講座、スポーツ栄養学講座などの講座の開催を検討

8. 謝辞

栄養相談に参加、ご協力いただきました、スポーツセンターの利用者様に心より感謝申し上げます。また、スポーツセンターの職員の方々、共同研究者の先生及びゼミ生のご協力により、このような活動ができましたことを心からお礼申し上げます。

9. 添付資料

チラシ、食事診断結果表、体組成分析結果 (InBody)、写真 (身体測定、栄養相談の風景)

地域住民の運動と栄養に関する栄養相談や食事指導の支援活動

参加無料!

栄養診断の開催

身体測定や、食生活に関する簡単なアドバイス
を西南女学院大学のご協力により実施します。

日時	6月の毎週 月曜日 (6/5、12、19) 午前 10:00~12:00 (受付 午前9:30~11:30) 午後 1:30~3:30 (受付 午後1:00~3:00)
場所	1階 会議室1
対象者	65歳以上の トレーニング室利用者 65歳未満の方でも参加状況により参加できることもあります。
内容	①身長・体重・握力の測定 ②筋肉量や脂肪量等の測定 ③貧血チェック ④簡単な栄養診断・アドバイス ⑤生活習慣に関するアンケート ※所要時間は約 20分
申込	当日、トレーニング室 利用前 に 総合受付 にて、「参加希望」とお伝えください
定員	午前、午後ともに約 12名程度
注意	※駐車場利用の方はお時間に気を付けてください。 ※参加された皆様の個人データは、厳重に管理するとともにお名前等は一切公表いたしません。 ※変更、開催中止とする場合がありますのでご了承ください。

健康スポーツセンター 部長・中島 繁
西南女学院大学栄養学科 担当：山田

食事診断結果表

診断日 2017/08/23

性別	年齢	身長	体重	BMI	標準体重
男性	70歳	165cm	64kg	23.5	標準

ヘルシスコア

65

100点満点

あなたの食事で素晴らしいところは、
過剰になりやすい脂質をとり過ぎていないところです。
脂質のとり過ぎは肥満や生活習慣病、動脈硬化等を誘発します。
肉類や油ものに富まない食のヘルシーな食事を続けましょう!

コメント

栄養バランス

総エネルギー	1643 kcal	基準: 2500±150kcal
たんぱく質	8.2g	基準: 8g未満

気になる栄養素は! ビタミンA

緑黄色野菜やレバー、ウナギを食事に!

不足は夜盲や目の低下や視力の低下等の原因になります。野菜に含まれるビタミンAはがん抑制作用も注目されているのでしっかりととりましょう。

食のバランス

野菜料理等は調理法で食べやすい工夫を!

野菜は食物繊維・ビタミンEなどの栄養素が豊富で、たんぱく質も豊富です。ただし、生野菜などがたくさん食べると消化しにくいです。煮たり炒めたりと調理方法を工夫して食べやすくし、血酸を増やしましょう。また調味料の塩分、糖分は控えめに。

食の総エネルギー

274

1人1食あたり 2017/08/23 16時00分

InBody

ID: 00008	身長: 165cm	性別: 男性	年齢: 70	測定日時: 2017.12.28 10:24
-----------	-----------	--------	--------	------------------------

体成分分析

体脂肪率 (%)	23.1	基準: 20.0-22.8
筋肉量 (kg)	6.1	基準: 7.1-8.7
骨量 (kg)	2.20	基準: 2.47-3.01
水分 (%)	12.0	基準: 10.9-10.8
体脂肪 (kg)	43.5	基準: 44.3-40.7

inBody診断

71 (100点)

※体成分分析結果を総合的に判断し、
身体状態を総合的に評価した結果です。

体脂肪率	23.1%	標準: 20.0%
筋肉量	6.1kg	標準: 7.1kg
骨量	2.20kg	標準: 2.47kg
水分	12.0%	標準: 10.9%

経時脂肪

経時脂肪 (%)	29.0	基準: 20.0-22.8
経時脂肪 (kg)	12.0	基準: 10.9-10.8

肥満指標

BMI	23.5	基準: 18.5-24.9
体脂肪率 (%)	23.1	基準: 20.0-22.8
体脂肪 (kg)	43.5	基準: 44.3-40.7

部位別筋肉量

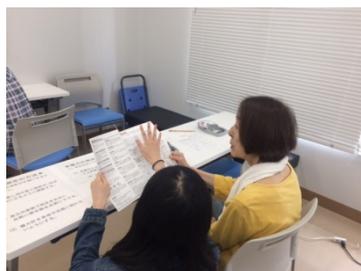
右腕	1.22kg	標準: 1.20kg
左腕	1.13kg	標準: 1.20kg
右足	4.99kg	標準: 4.61kg
左足	4.61kg	標準: 4.61kg

骨量

右腕	0.8kg	標準: 0.8kg
左腕	0.8kg	標準: 0.8kg
右足	2.7kg	標準: 2.9kg
左足	2.9kg	標準: 2.9kg

体成分分析

体脂肪率 (%)	23.1	基準: 20.0-22.8
筋肉量 (kg)	6.1	基準: 7.1-8.7
骨量 (kg)	2.20	基準: 2.47-3.01
水分 (%)	12.0	基準: 10.9-10.8



1. **企画名**：SAT システムを使った食事診断会

2. **組織名**：まなびと ESD ステーション～食から始まる健康プロジェクト～

3. **代表者**：境田靖子（保健福祉学部栄養学科）

4. 概要

【目的】北九州市食育に関する実態調査¹⁾（2012）によると、「朝食を毎日食べる人の割合」は20歳代男性で48.6%、女性で58.6%、「家庭で調理した夕食を食べる頻度」は20歳代男性で毎日が28.6%、女性38.1%とすべての世代の中で最も低く、他に「食育についての関心度」は20歳代男性で関心があると答えた者は22.9%、女性で33.8%と、若い世代の食に関する問題点が数多く抽出されている。一方で、北九州市は政令市の中でも、高齢化率が最も高いにも関わらず、男性の平均寿命78.95と健康寿命77.34の差は1.61年、女性の平均寿命86.46と健康寿命の差は3.68年と、全国平均男性1.47、女性3.23に比べ長いことから²⁾、高齢者の低栄養やロコモティブシンドロームなどによるQOLの低下が危惧されている。しかし、行政が行う健康教室や栄養相談は、もともと食や健康に高い興味を持つものしか参加せず、無関心期にある者が自分の食実態について把握し、改善意欲をもつ機会が少ない。以上のことから、市民が健康でいきいきとした生活を営み、活力のある社会を実現するために、適切な食事量や食事バランスといった正しい食知識の提供を行い、市民の健康増進に寄与することを目的とする。

【対象】（ESD ステーションの前を歩行中またはESDに活動に来ている）市民および大学生

【内容】

1) 実施方法

- ①ESD ステーション前を通行中の市民にチラシを配布しながら声をかける。
- ②SAT システムの料理サンプルの中から、「自分が食べた料理（またはそれに近いもの）やこれから食べようと思っているもの」を選択し、トレーに1食分の食事を乗せる。
- ③トレーをSAT 診断の読み取り機に乗せ、食事を診断、パソコン表示および結果印刷。
- ④選択した食事内容の診断結果が出力された用紙を用いて、食事量についてスタッフ学生が説明。

※食事診断 SAT システム [(株) いわさき] とは・・・エネルギーやたんぱく質などの栄養情報が搭載された IC タグのついた実物大の立体料理模型を選び、読み取り機に乗せると、選択した料理に関する栄養価計算の結果が瞬時にパソコンに表示され、栄養バランスを星5つで5段階評価する。写真等の平面媒体と違い、具体的な量を示し、触ることができるため、選んだ食品の量的な把握や共有がしやすく、指導者にとっても対象者にとっても、わかりやすい栄養相談ツールである。

- 2) 日時：2017年5月13日（土）、5月27日（土）、6月10日（土）、7月8日（土）9月30日（土）
11月18日（土）13時～16時（※12月9日は中止した）

3) 場所：まなびと ESD ステーション（北九州市小倉北区魚町3丁目3-20 中屋ビル地下1階）

4) 実施者：栄養学科4年 10名

事前にESD ステーションにおいて、6パターン程度の食事診断の結果サンプルをもとに、ペアで結果解説のトレーニングを行い、本番に臨んだ。

5) 参加者：食事診断を行った市民 合計 125名

（18歳未満5名、18～29歳25名、30～49歳21名、50～69歳52名、70歳以上22名）

6) インシデント：特記事項なし

【評価】

1) 実施後の学生による「実施内容の振り返り」の導入

昨年度からの改善点として、学生による振り返り学習を取り入れた。実施後に、参加学生で結果説明の内容と相談事項の共有（カンファレンス）を行い、後日、レポートに要点をまとめる学習を行った。レポートには、①結果説明時に困ったこと、②その時に、どう対応したか、③市民の方と関わることで、自分自身の新たな気づきや発見、または今後の課題は見つかったか？の3点についてをまとめレポートを提出し、後日、教員からのコメントを挿入し、学生に返却した（下記の表を参照のこと）。

2) 企画の妥当性と今後の課題：北九州市立大学による大学間連携共同教育推進事業「まちなかESDセンターを核とした実践的人材育成」は2016年度で終了したが、その後も継続してESDステーションでの食事診断活動を実施している。食事診断を体験する方は半数以上が50歳以上の方であるが立地条件を生かし、北九州市食育推進計画でも重点課題³⁾となっている若い世代の参加が増えるように検討していきたい。また、今年度より実施した学生による振り返りはインシデント発生の予防につながる情報を得ることもできるため、今後も継続していきたい。

【決算】 地域貢献活動助成 (支出) PCプリンターインク 47940円

1) 評価結果の説明時に困ったこと	2) その時に、どのように対応したか？
例1) 問題点が多かったので、何からアドバイスしたらいいか困った。	⇒朝食だけでも一汁三菜といった食事に毎日でなくていいから変えることができるか尋ねたが難しそうだった。先生が冷凍野菜を紹介していたので、簡単に入手や調理ができるものを紹介すればよかったと思った。
例2) 普段から食事には気を付けているという自信がある方で、特に問題がなさそうに感じたが・・・	⇒よく話をされる方でもあったので、話を広げることを意識し進めていくと、間食が多いことが分かった。
例3) ドレッシングの油を気にしてボン酢に変更している、ボン酢が体にいいから積極的になんにでもかけている。	⇒ボン酢が体に良いのかどうか分からなかったので、あまりかけすぎないようにとお話しをした。 (教員からのコメント) 「酢は体にいい』『しょうゆを酢で割っている分、減塩になる』ということでしょう。確かに脂質は少ないですが、食塩に要注意です。 しょうゆ大さじ1 (18g) = 塩分2.6g, ボン酢大さじ (15g) 食塩0.9gですので、3倍かけるとしょうゆと一緒にということになります。
事例4) 説明をしていて、青汁を飲むがよいのかどうか質問があり、どのような成分があって効果があるのか知らなかった	青汁のことなどわからなかったため、先生に助けていただいた。 (教員からのコメント) (教員からのコメント) 日ごろから、食品の包装パッケージ上の成分表示を見るように心がけましょう。

3) 市民の方と関わることで、自分自身の新たな気づきや発見、または今後の課題は見つかったか？

・初対面の方なので、話すうちにどこまで踏み込んで良いのか、様子を見ながら話すことが難しかった。

・出た結果が良くなかった場合、悪い点をいきなり指摘するのではなく、対象の方に毎日このような食事なのか、他2食はどのような食事なのかを聞いてから改善案を提案するように心がけた。

・食事内容の聞き取りなど、栄養教育の部分が生かされる状況だった。

・野菜の摂取量から、少ない方には量を増やし、先に食べると満腹感が得られてよいといったことなど、結果ででた数値からそれぞれの食事のアドバイスができたことが前回よりも成長した点だと自分なりに感じた。

・アドバイスというよりはわかりやすい説明ができるようところがけたが、買い物途中の方や時間もあまりない中で参加して頂いていた方も多く、端的で的確な説明をすることはとても難しく思った。

・ほとんどの方が食塩摂取が多いようで、日本人の食塩摂取の現状そのものだった。一見バランスのよさそうなメニューを選んでいる方でも味噌汁や主菜、副菜の取り合わせによってはかなり大きく目安のラインを上回っていた。1日の食塩摂取の半数を1食の食事ですべて取っている方も多く、目標量が女性で7g、男性で8gということをお伝えすると、驚いていた。どのように食塩を減らしていくか、というのが一番の課題であり、少しでも意識の改善を促していくことが、私たちがこころがける事だと思った。

・参加して私たちの説明を受けて下さった方が、料理を作る時や自宅や外でご飯を食べる時に、少しでもこの日の事を思い出して何か意識して食事をとっていただけるよう、記憶に残るような説明を、雑談をまじえたりしながら、今後上手くできるようにしていきたい。

・目の前の資料（成分表や外食カロリーブック）をうまく活用することが毎回できていないように感じた。

（教員からのコメント）普段から使いこなし、「何を見れば、これが載っている」ということを把握しておくことが必要。 数ある資料のうち、自分に合っているものを見つけておくことと便利。

【文献】

- 1) 北九州市保健福祉局：平成24年北九州市食育に関する実態調査・調査結果について、北九州市印刷物登録番号第1210190F号，2013年
- 2) 北九州市：北九州市健康づくり推進プラン，北九州市印刷物登録番号第1210148A号，2013年
- 3) 北九州市：第二次北九州市食育推進計画，北九州市印刷物登録番号第1310147A号，2014年



写真1 食事診断 SAT システム



写真2 市民の方へ結果説明1

地域貢献活動報告書

企画名：乳がん検診・自己検診法の啓発活動

代表者：吉原悦子（保健福祉学部 看護学科）

【概要】

① 背景

近年、乳がんは増加傾向であるにもかかわらず、「面倒だから」、「時間が取れない」などという理由で検診の受診率は低いのが現状である。そこで、子育て中の母親に対し、乳がんに関する知識と自己検診法の周知を行うことは重要と考え、啓発活動を行うこととする。

② 対象者

シオン山幼稚園に通園児を持つお母さん方で啓発活動の講演会への参加の意志がある者。

③ 活動の目的

乳がんに関する知識や自己検診法を習得し、健康への意識を高め、また、ひとりでも多く乳がん検診に関心を持ち、乳がんの早期発見につなげることとする。

④ 活動内容

日時：2018年3月13日（火）13:00-14:00

場所：シオン山幼稚園

内容：助産別科の教員による講演を「女性の身体のこと～気になることはありませんか～」のテーマで行う。その後、ブースに分かれて乳がん自己検診の体験を行ってもらう。本学看護学科の学生を各ブースに配置し、乳がんの自己検診モデルを使用し、参加者に実際の乳がんモデルを触診してもらう。看護学科・助産別科の教員とともに触診の方法、頻度など自己検診法について、学生が説明を行う。終了後、質疑応答の時間を設ける。

事前準備：講演会の対象となる幼稚園のお母さん方へ、事前に講演会のご案内を行う。その際に、「ニーズ調査」を同封する。その結果は、講演内容の準備に使用する。ニーズ調査の回収は配布から1週間後とし、幼稚園に回収箱を準備する。学生は、事前に乳がんと乳がん検診、健康教育について復習をし、自己検診法についての演習の企画を行う。

事後：参加された幼稚園のお母さん方へ講演会について有益性についてのアンケートの記載を依頼し、結果を検討し次年度の課題とする。

【実践内容】

事前学習会①

2017年9月1日 17:30-19:30

乳がん看護の認定看護師より「乳がん検診」のテーマで乳がん検診さらに自己検診について講義を受け、モデル乳房を使用し、実際にセルフチェックの演習を行った。

事前学習会②

2018年2月19日 13:30-16:00

本学教員より「健康教育について」のテーマで学習会を行った。成人の教育理論やセルフケア理論を学び、そこから健康教育企画についてのステップを復習した。さらに、どのような媒体を使用し、どのような内容を伝えるのかを検討した。また、講演会のご案内のチラシや配布する事前アンケートの準備を行った。

当日の実践：

インシデントの有無とその対応：

アウトカム評価

プロセス評価：

企画の妥当性と今後の課題：

決算：共同研究費「地方中規模私立大学における地域貢献活動のプロジェクトマネジメントの研究」（代表：谷川弘治）にて実施。



↑ 「乳がんと乳がん検診」講義



↑ 「乳がんと乳がん検診」演習

講演会のご案内

テーマ：女性のからだのこと
～気になることはありませんか？～

「最近何となく元気が出ない」「忙しくて自分のからだのことは後回しになってる」などなど。

ママ世代は子どもや家族のことを優先し、なかなか自分のからだのことをじっくり考えることができない時期です。ちょっとだけ、ご自分のからだのことについて考えてみませんか？

乳がん検診の話やセルフチェック体験も行います。

皆様のご参加お待ちしております。

日時：2018年3月13日(火) 13時～14時
場所：シオン山幼稚園
参加費：無料
主催：西南女学院大学
看護学科/助産別科 教員、学生

お問い合わせ先
西南女学院大学 看護学科 吉原裕子
TEL:082-082-0064
E-mail:yoshihara@scimn-jo.ac.jp

監修：山本 聖子
監修：山本 聖子
監修：山本 聖子



↑ 「健康教育について」

← 案内チラシ

2017年度ベストサポーター感謝状

2017年度は、1名、1団体に地域貢献活動のベストサポーター感謝状をお渡しすることといたしました。

ベストサポーター感謝状



井上幸一郎様

井上幸一郎様には、「だいすきにつぼん」の取り組みに対して長きに亘り格別のご支援を賜って参りました。

西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部はあなたを本学地域貢献活動のベストサポーターとして心から感謝の意を表するものです。

末永い交流が続きますよう、今後ともよろしくお願い致します。

2018年4月18日

西南女学院大学
西南女学院大学短期大学部
学長 工藤二郎

ベストサポーター感謝状



井堀市民センター様

井堀市民センター様には、「井堀の森のみんな、だあくい好き!!」みんなフレアイ隊」の取り組みに対して長きに亘り格別のご支援を賜って参りました。

西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部はあなたを本学地域貢献活動のベストサポーターとして心から感謝の意を表するものです。

末永い交流が続きますよう、今後ともよろしくお願い致します。

2018年4月18日

西南女学院大学
西南女学院大学短期大学部
学長 工藤二郎

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」
公開講演会報告

協働する学生のチカラ
in 佐治・男山・南花台・そして越前大野 …

江川 直樹（関西大学環境都市工学部 建築学科 教授，建築家）
関谷 大志朗（関西大学佐治スタジオ研究員，地域デザイナー）

2017年9月7日 13:30～16:00
西南女学院大学6206大講義室

○司会挨拶

荒木：ただいまよりCOC+公開講演会を開催させていただきます。本日の司会進行を務めさせていただきます、本学福祉学科の荒木と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。本学の慣例に従いまして、本日も黙禱をもって開会させていただきますとおもいます。黙禱。早速始めさせていただきます。最初に、本学工藤学長より一言ご挨拶いただきたいと思ひます。工藤先生よろしくお願ひいたします。

○学長挨拶

工藤：皆さんこんにちは。今日はたくさんお集まりいただき誠にありがとうございます。今日は関西大学の江川直樹先生と、同じく関西大学の佐治スタジオで研究をされている関谷大志朗先生がお越しです。学生と周辺の連携についていろいろ話して下さる予定です。COC+の拠点事業の中身、生涯活躍の町というテーマに関係した、佐治、男山、南花台、そして越前大野について、お二人にご講演をお願いすることになっています。どうぞよろしくお願ひいたします。

荒木：工藤先生ありがとうございました。先生方のご紹介につきましては、本学の地域連携室アドバイザーの石丸先生にお願いをしたいと思います。

○講師紹介

石丸：地域連携室アドバイザーの石丸です。よろしくお願ひします。江川さんと関谷さんの紹介をしますが、江川さんは早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程終了、現代計画研究所に入社、大阪事務所を開設し、集住関係を中心とする建築都市デザインの実践に取り組み、この間日本都市計画学会賞をはじめ数多くの受賞歴があります。2004年より関西大学の教授になり、集住環境資質の向上のために集住環境デザインのための実践的研究を継続中です。なぜ私たちが知り合いかというと、1990年に且過市場の再生計画のような委員会が立ち上がり、そのときの座長でこられた大阪大学の鳴海教授が会議の際に私の事を目にかけてくださいました。そこから年に1度大阪のフォーラムに勉強しに行くようになりました。1995年の阪神淡路大震災の際のフォーラムの時に、鳴海先生からの紹介で江川先生に実際に神戸を案内してもらい、それがきっかけで今でも交流が続いています。彼は建築や町づくり、都市計画をしていて、本学は看護や福祉や栄養でジャンルが少し違うと思ひますが、町や生活については共通のベースであり、あるいは大学や学生が地域や企業や行政とどう関わっていくかについて大変勉強になるとおもいます。

関谷さんは、天草出身で2年前にはじめてお会いして優秀な学生が集まる江川ゼミのエースの一人です。

本日は学外の方にも参加頂き、JR九州常務取締役の古宮さんやモノレールの皆さんなど様々な方がこられているため、ネットワークを新たに作っていただけたらいいなと思います。

荒木：石丸さんありがとうございました。早速江川先生のご講演から頂戴したいと思います。江川先生よろしく願いいたします。

○第1章 江川先生「協働する学生の力～の前に」

江川：皆さんこんにちは。今日のテーマは（資料1）一番上に書いてありますように協働する学生の力、佐治、男山、南花台での地域連携活動の話、そしてその現場の話を、その現場で活躍している若者に話してもらおうということです。その前に建築やまちのこと、特に私たちは人が集まって住む環境の形のデザインを考えるということに興味があって、それを専門にしていますが、なぜ地域連携のような活動をするようになったのかを最初にお話ししたいと思います。

私は、大学に着任する前に設計事務所を主宰していましたが、大学から呼ばれた時に、設計事務所だけではできないようなことを大学ではやりたいな、できそうだなと思いました。しばらくは設計事務所も大学も並行してやっていたのですが、そのうちに、大学で設計や環境デザインを学生や事務所のOB達と一緒にすることにしました。設計の仕事というのは必ず施主がいて、その施主と「こんなことをしませんか。こんなことをしたら面白くないですか？」等と話しながら仕事はできていましたが、今日は、全く違ったアプローチの仕方とそこに至る道筋を少しご理解いただいた上で、今取り組んでいる活動を聞いていただくと、皆さんがおやりになっている看護や福祉と私たちの町づくりと地域連携の関わりを考えるきっかけになるのではと思います。具体的な活動の内容については、この後、関谷君に話してもらおうことにしています。

<集住環境の再編まちづくりについて>

最初に、私が設計に携わってきた、集まって住む環境のスライドを見ていただきながら、集まって住む環境はこれからどのようなになればいいのかについてお話します。その時に、3つのキーワードを気にしながら聞いていただければと思います。1つめはまちに住むということ、2つめは自分のことは自分であるのが当たり前ですが自分の家は自分で作るということ、3つめは今までは大きいことが良いことで何でも大きくプロジェクトを作ると効率が良いといわれていたが、そうではなく重要なのは小さいことと混ぜるということだということです。最近では、私が昔から重要だと思っている多様性がようやく社会にも評価されるようになったこともあり、この3つのテーマを出しながらお話します。

まずは、社会潮流の変化による公的賃貸住宅団地の空間的变化です。20世紀になり都市化や近代化で都市に住むようになって住宅が足りなくなったり、戦争で家が焼かれて住む家がなくなったりした時代の状況と今の状況は随分違います。沢山作ってきましたがこれからは少し目標を変え、持続的に住み続けられるような環境に変えていかなければいけないと思います。そのような意味からだと今まで集まって住んできた団地等も、周辺に閉

じた環境の中でユートピアを作ろうとしていた世界があると思いますが、そうではなく開かれたような環境や周辺と連続するような環境に変えていかなければいけません。その中に、自分の家に住むのではなく自分が町や地域に住むというように、例えば大学も町の中の1つの要素と考え、自分たちで取り組みをしていっています。専門家はあくまでも専門家として支援をし、まあ、いろいろな専門家の役割があるとは思いますが、私の専門家としての考えは、本当は住民の皆さんが重要だと思っているけれども経験的に気づいていないことを一緒にお話したり、共同作業をしながら発見していく支援をしたりすることが専門家として一番重要であると思います。そのようなことから住民参加と書いていますが（資料2）、これも協働です。後で関谷君から説明がありますが、協働の協の字が「りっしんべん」です。十と基本は一緒です。みんなと一緒にするのですが、でもその中で一人一人が自分で作っていくという風に考えようということです。もう1つは、震災復興や団地の建て替えや町のリノベーションをしていく中で小さくや混ぜる事については、実例を見ていただきながら理解して頂けるとありがたいです。それが町に住むということです。もう1つは、私たちも開発のような何もないところに新しくものを作るという時代から、古くなった物をスクラップアンドビルドにして建て替える時代を経てきました。しかしこれからは、今あるものを残しながら新しく建てる行為も混ぜながら取り組みをしていく時代に来ているように思います。これを私達は再編と言っています。その時に町に住む自分や自分達で作る中で、とても重要な課題は20世紀の目標に合わせてできている制度です。この制度を変えていかななくてはだめで、従っている限り、あるいはその制度があるがゆえに足かせになっていることがたくさんあると思います。それを変えていく努力をそれぞれのジャンルの専門家の人たちが皆で話し合いをし、確認しながらしていく必要があると思います。このような3のテーマの観点で見ただけであればと思います。

・まちの再編について

私達は集住環境の再編まちづくりをしています（資料3）。例えば団地で言えば団地再編です。少し前までは団地再生や町の再生とよく言われてきました。私達が団地再編という言葉を使い始めたのは、2011年に大学で文部科学省の補助事業に申請し採択された時からです。再生・更新が括弧して書いてありますが、周りからは「団地再生ではないのか、団地再編は関西大学の方言ではないのか。」などと言われていました。しかし今では再編という言葉が一般化してきていて、まだそんなに社会的に認められている言葉ではありませんが、団地に関しても団地再生と言うより団地再編と言う人の方が多くなってきています。例えば団地はいろいろな団地があり団地の現状は様々ですが、既に大きな綻びが出現している所もあれば、その綻びが見え初めてきている段階の所もあります。長年継続して住んでいる方も沢山いて賃貸住宅でも公的賃貸住宅の中では、終の棲家という風に考えている方も沢山いるように、以前のように賃貸住宅が仮の住まいであるということも全然違った状況になっていると思います。そのように長年住んでいる方が、綻びが出現しつ

つある状況をもっと生き生きとして生きがいを感じられるような雰囲気再構築していくことがとても重要で、それはいろいろなことの中で住民が実際どう思うかが重要です。団地再生と言っていた時代は、建て替えや古いものを直すといった新しく住む方達が主人公でしたが、ストックを活かしながらするには今ある環境の中にお住まいの方々にこれからもっと生きがいを持って幸せに生き続けてもらうことが重要です。そのためには単に建て替えばいいということではなく、今までの大きく管理するために必要だった決まりや考え方から、もっと小さく自分たちで自分たちの周りの環境を作っていけるような仕組みに変えていかなければいけません。そのようなことを含めて再編集するため、私達は再編と言っています。私はずっと集まって住む集住環境や住宅地の仕事をしていて、そのような住宅で何をしているかという、学生たちは大学の入学時に建築学科で建物を作ることを勉強したいというように言いますが、本当に重要なことは建物でまちを作ることです。私も住宅でまちを作る仕事をずっとしてきて、最近では特にまちのリノベーションをしているということです。

・地域連携活動につながるプロセス

私は1982年に大阪に戻ってきて現代計画研究所大阪事務所を開設し、それからずっと関西で設計の仕事をしていますが、このジャンルの仕事と今日お話しする地域連携の仕事につながっていく流れを表にしました（資料4）。最初に書いてある庚午南広島市営住宅ですが、平屋の公営住宅を積層した集合住宅に建て替える仕事です。いわゆる団地再生と言っていた建て替えの仕事を1980年代からしていました。この表は全てまちのリノベーションの仕事のつもりですが、実際にその趣旨で建物の建て替えをその頃からしていたというのが不思議です。

4番目に紫で書いてあるキャナルタウン兵庫は、都心の空洞化が叫ばれてその空洞化を解消する為に、JRの貨物ヤードの跡地を、住宅を含む複合的な市街地に変更するというまちのリノベーションです。

その下の御坊島団地再生ですが、本当に疲弊化してしまった公営住宅団地の建て替えをコーポラティブ方式で実現させました。公営住宅の建て替えをコーポラティブ方式で取り組み、一人一人の家のプランが全部違い、ファサードも全部違うというようなプロジェクトです。これらは結果的にもそうですが、目標としてそのまちのリノベーションであると同時にそれぞれの方々の人生のリノベーションとまでは言いませんが、再編集や再構築を世の中と一緒にもう一度考えていこうというプロジェクトです。生きていく価値等に繋がるような建築の設計を私達は目指していましたが、それを、大勢の人たちと一緒に関わって進めました。

それまでも、地域に住んでいる方々との接触の中で仕事はしていましたが、阪神・淡路大震災以降の復興プロジェクトあたりから、特に地域に住んでいる方々とそれを支えるためのいろいろな専門家の人たちと協同でする仕事が増えました。とても面白い仕事です。

例えば再編してなにか建物を建て直し壊れたところを部分的に残しながら新しい要素にリノベーションしていく時に一番衝撃だった経験は、敷地が決まっていなくて、どのように自分たちが復興していくのかを話しながら作っていくとか考えていくというような事です。最初にイメージしてこういうものを作ろうという設計のプロセスではなく、何も無いところから集まり皆でどうするか考え、敷地に使える所を一生懸命考えてわからないことだらけの中で敷地化しています。作りながら考えるというプロセスを設計の中でやらざるを得なかったのですが、やってみると面白いことがわかりました。敷地が決まっていたその中に誰かが決めた設計条件の物を建ててくださいと言われても面白くなく、建築の仕事とはどこにどういう物を作るかという設計条件を決めるのが本来の仕事であるはずですが、しかし、それまでは、経済性や敷地の規制、法律などで設計条件が決められているので、その中で周囲の人たちと些細な調整を住民と一緒にしているという時代でした。私は阪神・淡路大震災の時神戸にいて被災者でしたがその震災を契機に、プロジェクトをやりながら考えるという方法を発見してとても面白かったです。その経験が現在やっている地域連携の活動にとっても繋がっていると思います。最初から目標や方針があつてするわけではないのです。

男山の団地再編に際しては、男山地域再生計画というのを行政と一緒に策定しました。普通公共の事業計画は、目標を決めて何年までに実現しようとし、それが実現できたかできなかつたかが成果になりますが、どこからスタートするかがとても重要なので、この再生基本計画ではスタートの方法しか提示しませんでした。これを私達は玉突きアプローチと呼んでいます。スタートさせた小さな活動が連鎖しながら次から次へといろいろな所につながり、そして我々が心の底で望んでいるようなことに変化し行政や事業者も今までのしきたりなどを変えていくモチベーションになるのではないかと提案したところ、このような基本計画は今までないと議会で問題になったそうです。しかし、うまくいくかもわからないがやってみようということで、現在取り組みが始まり、進行しています。

次にJR六甲道駅南のプロジェクトについてです。これはとても大きな範囲の復興まちづくりを、住宅を含む再開発で本当に大勢の人たちとの協働の中でやりました。行政が作った都市計画に対して住民が猛反対したので、神戸市は決まっていた都市計画を変更しよう一度皆と一緒に考え直そうと始めたプロジェクトです。

次の南芦屋浜は、被災地の近くで実際に工事が進行中だった埋立地に将来のまちづくりの核として復興公営住宅を作るところからはじめました。これも敷地がきちんと決まっていない所からスタートしました。

次は若宮町住宅です。これは被災地の割と小さなまちの復興再生、復興再編です。それまで公営住宅等がなかった所に小さな公営住宅をまちの中に混在させていきます。これは小さな公営住宅や町のアパートが多様な住宅の中に混ざっているという手法で、日本でも初めての画期的な方法でした。

その次の浜甲子園団地さくら街は、4,600戸をたった2年で作ったという大規模な

団地を普通のまちにどう変えていくかというプロジェクトです。このプロジェクトは建て替えのプロジェクトですが、建て替えとストック活用ではできることとできないことはありますが目標は一緒です。たった2年で4,600戸作ったのをある程度全体の形を整えるのに約50年かかると言われています。ずいぶん前から継続して関わっており、現在も進行中です。

これからがメインの話に繋がっていきます。(資料5)

2004年に大学に行くことになり学生たちとなにかしたいという事でカンボジア・カンポンブロック村の実測調査をしました。カンボジアの西南に位置するトンレサップ湖という湖の中にある水上集落ですが、トンレサップ湖というのは水位が雨期と乾期で3倍くらいに変化し、水がなくなると高床式のとても綺麗な空中集落になります。この実測調査を学生たちみんなとする所から始めました。しかし、調査だけではなく、自分達で実際のまちに関わっていく方が良いと思い、今日お話するような活動に繋がっていきます(資料6)

最初は2007年から関わり始めた兵庫県の真ん中に位置する丹波市青垣町佐治という過疎の集落です。2011年から始めたのが京都府の南のほうにある八幡市の男山団地で、これは大阪と京都の間にあるURの団地を中心としたプロジェクトで、建て替えではなくストックを生かしてどのように持続できるまちに作りかえられるだろうかというプロジェクトです。2015年からは河内長野市の開発団地、郊外ニュータウンで、空き家の多い賃貸住宅団地がまちの真ん中であって戸建てに囲まれているという、そのニュータウン全体をどうしようかという話です。このような流れの中で今日のお話に繋がっていきます。

<集まって住む環境のデザインについて ーいくつかのプロジェクトから>

・キャナルタウン兵庫

資料の丸で囲ってある以前(資料5)の話をして。キャナルタウンというまちの再生、リノベーションの話です。これはJR兵庫駅南の大きな貨物ヤード跡地を、空洞化した都心ににぎわいをもう一度取り戻す為に、住宅を建てて人が住んでいる環境にしようかと、神戸市、神戸市住宅供給公社、UR都市機構が事業主となって取り組んだものです。最初はアメリカの超高層住宅やヨーロッパの古い団地でも多くつくられたような、巨大な公園を作ってその公園の中に住宅を建設するという、タワーインパーク、ハウスインパークの手法と同様の絵が描かれていました。公園の中にある住宅は緑の中であって良い環境のように思いますが、まちを作っていくという観点からすると欠点が多いこととなります。本来まちというのは、道路の両側に建物があって、その建物によって道の空間ができ、その結果できるのがまちなのです。今、ヨーロッパでは、そのようにしてできた公園の中にある集合住宅を全部壊して、あるいは一部残しながら沿道に建物が配置された

まちに作り直しています。私達も後で述べる建て替えの事例のように沿道型配置にしたいところですが、ストックを残しながらやろうとすると、そこが一番難しいので、いろいろな提案をしていますが、実現するにはもう少し時間がかかるように思っています。

で、このプロジェクトですが、当初は（資料7）周囲に緑があってその中に超高層マンションが何本か立っているという絵が描かれていました。しかしそれではまちを作ることにならないので、もう少し低い中高層のマンションで、かつ、低いのと高いのを混ぜて建てるという提案をしました。一般的に、中高層というのは14階建てくらいで、建築基準法やいろいろと構造的にも一番効率がいいため、14階ならば14階だけで作る事が多いです。しかし、ここではできるだけ普通のまちに見えるように、歩いている所は団地の中ではなくまちの中のように思えるように作っています。兵庫の最初の港、旧兵庫港というのがこの南の方の大和田の泊で、いろいろな産業のための運河がこのように引き込まれて敷地の端まで来ていたので、その運河の水を駅まで敷地の中に取り込んで流していこうということにしました。下の図面です。このような計画を作って様々な人と協働し何度も絵を描き直しながらこのようなプロジェクトになりました。駅前のブロックにももちろん住宅があって、さらに、図書館や商業施設など多様な施設が混ざっています。普通、団地は施設用地があって、それ以外は全部住宅になっていることがほとんどですが、それを混ぜるのはなかなか難しいです。日本の都市計画は用途をわけるという方向でしたので、それを混ぜるようにしようと思うと大変です。西側のブロックの一番大きなエリアは（資料8）、実は全部賃貸住宅でできています。ぱっと見ただけでは、そうは思えないと思いますが、URの賃貸住宅です。相当高密に住宅が配置されていますが、普通のまちの中を歩いているように感じると思います。運河沿いを歩きながらこの中を通り抜けてその向こうのまちに行きます。団地は行き止まりのように出来ていましたが、まちは行き止まりにはならず通り抜けできるものです。クルドサックという手法があって、車は通り抜けできないようにしようと考えられた方法で、私が学生の頃にはそれが新しい手法だと一生懸命教えられましたが、今ではクルドサックは良くないと考えられています。人と車がいかに共存しながら安全な環境でありつつ、多様な要素が混ざり合った豊かな環境にしていくのが、これからの目標になります。住宅と住宅の間にある空間は建築の余りの空間ではなく、むしろその余りと考えられていた空間こそがまちとしての主役で、その空間のために周りの建物をどう作っていくか、あるいはその間の空間をどのように整備していくかが重要なのです。当然のことながら違った要素のものでまちの空間はできていくため、一人が頑張ればそれで良いまちができるという話ではないのです。大勢の人と協働しながら阪神・淡路大震災の前後をまたいで作り上げていったプロジェクトです。

・芦屋市の二つの復興住宅プロジェクト

私が住んでいる芦屋市の南の方の、阪神・淡路大震災の復興住宅です（資料10）。集合住宅でいかにまちを作っていくか、いかにして地域再編まちづくりの拠点になり得るか

という事がテーマでした。大阪と神戸の間にある人口が10万人にも満たないような住宅中心の市街地の芦屋です。南の海岸部に、震災直後にちょうど埋め立てをしていた場所がありました。芦屋市は国際公園都市と言っていますが、そこを超高級な住宅地にして多大な税収入を得ようという構想で進めようとしていたところでした。その真ん中に公営住宅が来ることになることになるのですが、背に腹は変えられないという事で設計を依頼されました。住んでいるということには大きな意味があり、地域のことがよくわかります。この北側にはアステムという20世紀を代表するような、ある種20世紀が目標としてきたような住宅団地があり、その南側にあたります。今では周りには分譲の集合住宅、戸建て住宅、マリナー、ヨットハーバー、商業施設や結婚式場、さらに砂浜まであり様々な要素が混在したまちになっていますが、その真ん中にある少し高い建物群が復興住宅です。実は住棟の高さが3種類異なっていて、海から船が入ってきた時に六甲山がきちんと見えるように設計しています。ここではこれがとても重要です。また、ここに住んでいる方が海と六甲山の両方を見ながら生活できるということも、この地域で住むには一番重要な価値なので、そのためにどのような住宅、住宅群の形式にすれば良いかということが設計の重要なテーマでした。

できて20年近く経っていますが、今では若者にとっても人気のある不思議な公営住宅になっています。周りには商業施設やパン屋さんや喫茶店があり、朝からそのオープンカフェで、公営住宅に住んでいる高齢の方や、クルーザー付きの高級住宅に住んでいる方が犬をカフェに連れて来たりしていて、様々な方が1つの同じカフェで毎日のように顔を合わせてちょっとした会話ができる環境になっています。こういった、背景に見える環境や流れていく空気や隙間から見える様々なものや、移動するたびに変わっていく風景等を、建築を少しずつ変化させながら作ることで、おのずとそこに暮らす人達は仲良く暮らせるようになるという意図で作っています。公的賃貸住宅が、まちづくりの拠点の役割を果たしてくれています。それだけではなく、地域の中に様々な住形式が混在しているためライフステージに応じて住み替えることも出来ます。それがまちづくりには一番重要だと思っていますので、地域連携まちづくりにはこのような混在の良さを持つ環境にどうすれば再編できるかという事が共通の重要な視点です。この団地には近くの仮設住宅に住んでいた方もいれば、半分が市営住宅で半分が県営住宅なので県営住宅は兵庫県中から来る方もいます。今まで全然お付き合いのなかった人達が一緒になって住むことで早期のコミュニティーを形成するためにも、様々な取り組みをしておりその1つが団地の真ん中にある共同花壇です。

住宅群の配置をする時に、六甲山が見える事と、もう1つは、高齢者の方が非常に多くどうしても家の中に閉じこもりがちになるので日当たりの良い屋外空間を作ることが重要だと思いました。従来の考え方は、家に日が当たれば良いというようになっていて、いろいろな決まり、基準も、家に日が当たれば良いと建築基準法や公営住宅法等ができていますが、それだけではだめだと思います。人はまちに住むので家の中に住むわけじゃなく屋

外もまちなのです。できるだけ日中は高齢者や子どもも日当たりのいいところで過ごしてもらおうということで、昼間日当たりのいい屋外空間を作るのも私達の大きな設計上のテーマでした。だから家だけに日が当たって、裏側が全部影だと意味がないという事で、高い建物と低い建物を混ぜている一つの理由も、南側に開いた環境を作っているという意味もあります。

その環境構造に呼応するように、彫刻家がみんなの畑を団地の中にするプロジェクトを提案しました。今は徐々に若者に入れ替わってきていますが、当初は高齢者が多い所で、自分達で守り育てるという仕組みを作りましたが、維持管理が大変だったところがあったようです。やはり多様な人が支え合う仕組みを作っていかなきゃいけないということも経験によってわかってきました。よかったなど記憶に残っていることは、みんなで畑を耕している右下の風景です（資料10）。こういった風景が日常的に見られるような場所に変えていくことがある種の人が集まって住んでいる場所のイメージの1つだと思います。また、真ん中の下の写真は高齢者の方が車椅子で下まで自力で降りてきて、少し陰のある風通しのいいところに座り、日のあたる所で遊んでいる子どもたちを見ているという、たまたま撮った写真ですが、これがまちな風景だと思います。この経験は後にとっても参考になっていて、賃貸住宅の中にキッチンガーデンや専用庭を作ろうというようなプロジェクトも実現しましたし、今も計画中のものがあります。ヨーロッパでも団地の中に専用庭があるような事例が非常に見直されてきていて、建物が古くてもとても人気のある団地となっている例があります。一般的に、団地は直線でできていると思いますが、直線だけじゃ心も直線になってしまうと考えていて、できるだけ直角や平行をやめて少しずらしたり振ったりしようと考えています。例えば、お金がかかるから駄目だと良く言われるのですが、自転車置き場を曲げてみる等、長期的な愛着のことを考えると効果的だと思います。ここでは、そんな駐輪場も出来ています。

左上の写真ですが（資料12）、最初は何もない所にこの住宅だけができましたので、裸地のため風が吹くと砂埃が飛んでくるというようなこともあったようですが、左にはなぜこのように配置したのか説明する絵が描いてあります。もう1つ、既成市街地のまちなの中に作った復興住宅物も設計させていただいたのですが、「よくこんな、なにも無い場所に復興住宅を作ったものだ。」と非難っぽい話もありましたが、あっという間に右下のようなものとなって、本当に良いまちになっています。私はこの左下のような写真を撮るために船の免許を取りに行きまして、これは私が船の上から撮った写真です。右上が2014年の写真で、ナチュラルな曲線の砂浜まであってすごいまちです。クルーザーやヨットハーバーもあり、一番上の真ん中が公営住宅で、縦に林立する隙間から六甲山が見える事が設計の時のテーマでした（資料13）。

近年では、まちに高さ制限などをしたりしていますが、例えば高さが30mや25mと決めるとそのまちはほとんどそのような高さの建物しか建たず、逆に建てても文句を言われません。高いと低い混ぜ合わせた建物は、今の建築基準法や都市計画のなかではとて

も建ちにくいです。しかしヨーロッパの古くて美しいまちに行くと、高い建物と低い建物が少しずつ混ざっていて、高い建物は教会の塔だったり市役所の塔だったり高いところから自分達の町が見える環境を作るのが実はとても重要なこととなっています。京都も高さを低くして山が見えるようする等、容積率を変えないで高さ制限を掛けると足元の隙間がどんどんなくなってしまい建て詰まった感じになってしまいそうでつらいですね。

これも同じ芦屋の中で設計した復興公営住宅です（資料14）。阪神・淡路大震災時の写真ですが、このように高速道路も切れて壊れています。右下の白い図面（資料15）は、行政が非常に早い行動をしているらんな他の行政の支援も得てあつという間に計画を作った絵です。この集合住宅は、日当たりが良く高速道路からも離れていて公園がいっぱいでき、緑も増え駐車場も沢山あります。しかし「これは私達のまちじゃない。私達が住んで来たまちじゃない。」と言って住民は猛反対をしました。これは作り方の発想が、何もないところを作る時代、開発の時代の発想です。この絵の次にもう1つ、タウンハウスのような街区もあるニュータウン型の絵もありましたが、住民が自分達は元のまちを大切にしたいとそれにも猛反対をしました。その時に呼ばれて、図の右下のような絵を作り、小さな公営住宅が沢山混ざっていて、自力で復興できない人はそこに住むという案を提案しました。復興という意味ではないですが、一人や少人数でわざわざ大きな家を建て直して住む必要のない人は公営住宅に住み、家族が沢山いてこの地域に将来3世代4世代で住み続けたい人は自分の家で復興していくという、そのような人達が集まって住もうという考えです。最終的に出来たものが右下の絵ですが、途中で何度も変えています。空いた土地をまとめながら実際には戸建てに住んでいる人に少しだけ引っ越してもらいながらこのようなまちが出来ました。細い道も基準法違反にならないぎりぎりの所で残し、あるいは建物の中に隙間を沢山作って、風を通したり細い路地のネットワークをまちと建築の空間と連続させながら作ったり、他にも建物の中に木を植える、エレベーターから降りたら木が見える、家に帰る時に町の様子が見えるなど色々なことを考えながら設計しています。北側でもこのように空中に階段があるだけで人が住んでいる感じがしますし、裏側といっても残存地のような路地にはなりません。真ん中の写真は少し変な屋根の建物があり、一番高いところに戸建てを乗せていますがここには自分達の町が見えるため皆が集まるようです。建築もそうですが、私達が1から最後の形まで作るより、個性のある場所を作っていくと住んでいる人達はその場に合う場所に変えていってくれます。そこに、地域連携の再編まちづくりを進めていく上での大きなヒントがあると思います。ここが出来た時は右下で（資料16）、最近になると左のような写真ですが、住民の方はここが見られる場所とわかっています。これは（資料17）階段とエレベーターの通り抜けの所ですが、建物も直角にはせず、わざわざ振ったり階段を平行にしなかったりといろんな工夫をしています。

・神戸市のJR六甲道駅南の復興再開発

これはJRの六甲道駅南の復興再開発のプロジェクトです（資料18）。左上が震災時の写真で、右下は神戸市が提案した再開発計画です。その都市計画決定した案を住民が猛反対して、住民側が代替案として作った案が真ん中の上です。その時に呼ばれて私達は、右下と上の真ん中の図を見ながら左下の絵を提案しました。関谷君のような、私の事務所の大学院を出たばかりのスタッフに、高さを揃えずに高い低いものが混ざったような案を作るようにイメージを伝え、右上の絵を左のように直す案を提案し、その後はこの案をたたき台として、いろいろな人の意見を聞きながら、複数の設計者でそれぞれの担当街区の案を固めていきました。最終的にできたのがこれ（資料19）です。住民の人達が望んでいたような街区の中の広場もあり、プロジェクトには複数の設計者が参加していますが、たまたまその街区は私達が設計しました。まちの真ん中に大きな芝生の広場があります。左下が日常的な風景で、手前の国道2号線からきちんと六甲山が見え、その広場から三宮の方に落ちる夕陽が見え、大きな芝生広場に夕陽の光が差し込んできます。このようなことが本来まちを作る時の設計条件であるべきで、建物だけに日が当たれば良いという話では全くありません。地域みんなが一緒にこのまちに住んでいるなあ実感できるのは、毎日夕方になるとこの広場に犬を連れて人や子ども連れのお母さんなどさまざまな人が集まってきて、それぞれグループを作りながら、全体としては同じ広場にさまざまな人達が集まってきているという風景です。そういう場所をいかに作っていくかが重要だと思います。建築より、建築でできている外の部分がまちの中でとても重要で、そういった視点でまちの再編をしていくことが重要で、そんなことを考えながら設計をしています。

・広島市営庚午南住宅の建て替え

これは大阪に来てはじめてやらせてもらった仕事です。広島の市営集合住宅の建て替えです（資料20、21）。もともと平屋に住んでいた人達が丘のようなところに住むことになります。それぞれの家にはセットバックしたテラスがあって、雨も降ってくるし雪も積もります。なおかつ道路沿いに建物を作ろう、隙間を沢山作ろう、風を抜こう等いろいろな事を考えながら設計しました。結構、ご覧になった人は、考えていた事を理解してくださるようで、地元のホームページを見ると、この建物について解説されている文章があり、驚くほどに理解されています。歩いている時や自分の家から見える風景などもとても重要です。

・和歌山県御坊市の御坊市営島団地の再建

これは（資料22）和歌山県の、疲弊化した公営住宅の団地をコーポラティブで再建したプロジェクトです。5年掛けて100戸を、何回となくワークショップをしながら設計したもので、住戸は全部プランが違います。ただ重要なのは、今までは左上の形で右が提案した形ですが、実際には敷地が半分くらい変わったため全く右上のようになるわけではないのですが、考え方は変わらず、ここでも屋外空間が重要だということです。もちろん屋内空間

も重要ですが、屋外の空間がそれにも増して重要です。左の写真の屋外空間は、単に余った空間にしか見えませんし、実際に余った空間としてしか使われてなかったということです。それぞれ家もプランも違いますが、それに合わせて形も全部変え、一体的な集落のような環境を作っていきます（資料23）。廊下は南側にあり、洗濯物を干している所を人が通り、左下のように立ち話しをしたり、左下の2番目は冬ですが、親子で日向ぼっこをしていたり洗濯物を干したりしています（資料25）。出来上がってみると結構安全な環境で、知らない人がいたらすぐわかるので、情報はインターネットより速いくらいすぐに伝わります。小さな集会場がいくつかあって、このように住戸群を変形して配置しているのでとても夜が綺麗です。最初の建て替えは、旧の住宅の近くに建て替えています。このように（資料24）屋上には日の当たる屋上テラスと、夏向けに日陰ができて風の通るテラスを作りました。また、地域の中にコレクティブハウスのような形式の建物を作りましたが（資料26）、ダイケアの食事など、地域全体の人が利用できるようにしています。大人数が集まる集会には、すでにあった地域の集会場を使います。その分、むしろ小さな集会場を複数作って、例えば、上級生が下級生の勉強を見るような場所を作っています。全体として、集落のような環境ですね。家の中に住むというよりは、まち全体に住むという環境にすることをテーマにしました。

・兵庫県の浜甲子園団地の建て替え

次が最後のプロジェクトになりますが、たった2年間で4,600戸を作った浜甲子園団地の建て替えプロジェクトについてです。当時からとても人気の団地で、今も甲子園球場が近く、海にも近くて場所が良いため人気の団地です。たった2年で作るということになると、ほとんど出来ている上の方の建物群と工事中の建物群が、このように一緒になった写真が撮れるのですね（資料27）。

この団地を、少しずつ普通のまちの良さを持った環境に変えていこうというプロジェクトです。少しわかりにくいですが、右上にあるのが団地の住棟だけでできた従前の環境で、大きくは3つの敷地にわかれています（資料28）。建築は道路に接した一つの敷地に一つの建物というのがきまりですが、団地というのは、丸で囲った大きな所が1つの敷地で、そこに1つの建物があるという解釈でできています。住棟をいっぱい並べて読み替えているだけです。そのため団地の中にある道は、公共の道路ではなく通路と言っていて、あくまでも1つの敷地に1つの住形式という形で配置してあるという事です。建築基準法86条の一団地と言っていて、作る時はとても良くて管理する時も大規模な管理がしやすいのですが、それぞれを住み続けながら改変していこうと思いとどこかをいじると、全部1つの確認申請なのでとても難しいです。この基準を改善する事が、実は国の中でも大変な問題になっていて、例えば賃貸住宅と分譲住宅が混じって一つの団地になっている所も沢山あって、合意形成や建て替えも大問題となっています。この問題を何とか解決したいということで、建て替えなので、ただ新しい住棟に建て替えるだけならそれも可能です

が、そうではなく、私達は団地の中に公共の道を入れ込んで小さな単位の街区に変えています。右下の方は戸建てなのでもっと小さな敷地単位になるわけです。それぞれが持続的に改変しながら住み継いでいけるようなまちに変えていこうということなのです。

ここはとても気持ちが良い場所で、海の近くで空が綺麗です。全て5階建てで、たくさんさんの住棟が並んでいました。もう少し空を楽しむ環境にしたほうがいいと思い、歩いていて上を向くと空の綺麗なことに気付けるような団地にしようということで、市役所と協議を重ね、従来の高さ制限を撤廃しました（資料29）。高さ制限を取り払って高い建物を作るといふ、普通に考えるとある種暴挙に近いようなことをしていますが、それで容積を増やそうというわけではなく、許容容積率からはずいぶん減らした計画にしています。容積に余裕を持って、高い建物と低い建物を混ぜることによって、人々が転げまわって遊べる左下のような（資料32）広場や広い芝生の公園を囲んで住む事を提案しています。これから戸建ての空き家が増えてくると思いますが、その空き家をどういう風にしたらいいかを考えるヒントにもなります。バス通り沿いだけは低くして、奥の部分は高くできる等、いろいろなルールを決めていて、自分達の事務所も幾つか設計しながら、他の建築家にも参加してもらい、混じり合わせて皆で作っています。よく見ると小さな細かな部分が全部違っているのですが、集まって住む環境には、そういった多様性のあるデザインが重要だと思います。あるいは、道路から直接入れたり、自転車が通り抜けできたり、階段を下りたらそのまま道に出ることのできるような工夫や、お母さんと子どもと一緒に遊べるような広場がある事も重要だと思っています。また、もともとあった木を生かすようなことも当然重要なことですね（資料30～35）。

<大学連携の地域再編まちづくり>

・八幡市男山団地

ここから地域連携への引継ぎの話をして、関谷君の話に繋がりたいと思います。

京都府八幡市の男山団地という団地で、スライドでは、屋根の黒い賃貸住宅団地が延々と2キロくらい続いています。その部分が全部で4,600戸あります。そして屋根を黒く塗っていない分譲住宅団地が約1,300戸あり、全部で6,000戸ほどの団地です。周りに戸建て住宅等があり、全体で3万人位住んでいて、八幡市の総人口の3分の1くらいがこの住宅地を中心としたエリアに住んでいることとなります。左上のように（資料36）周囲には戸建て住宅が沢山並んでいますが、団地の周囲は全部駐車場なので、形態的にもまちと完全に切れています。私達は空間の設計をしているので、先にコミュニティーを考えるのではなく、空間によってもっとコミュニティーがよくなるのではないかという発想をします。

最初にした提案は、どうしたらこの空間が連続的な空間や、まちとして一体的な空間になるのかと、建物を間引いてみたり新しく入れてみたりを考えるアプローチからの提案で、住民や関係者に見てもらい議論を重ねています。また、団地の一部屋を借りて学生に

実際に住んでもらい、そこに大勢の学生が泊まりに来ながら、みんなで議論を重ねるということもやっています。ここでは、八幡市、関西大学と、事業主であるUR都市機構、それに京都府とも協働し、連携しながら団地再編のプロジェクトを進めています。お金を出す役割、企画を考え実現までの道を検討する役割、学生と協働する役割など、それぞれの役割をみんなで協働しながら進めています。従来の考え方の通りだと些細な事も全然出来ませんが、全員でどうしたら実現できるだろうかと時間を掛けながらみんなでやれば、みんな決して諦めません。今すぐは無理だけど1週間後に何とかしよう、1ヵ月や1年または3年掛けてしようと、ネタがどんどん増えていきます。詳細は関谷君から聞いてもらいますが、左上にある(資料37)基本計画、先ほど話した玉突きアプローチという手法論だけでできた基本計画で、右は住民に理解してもらうための概要版のパンフレットですが、学生やみんなでどんな物を作れば良いかと考えながらやっています。この右下の方に、「あなたの家はどこですか、行きつけの店やいい店を教えてください。」と住民にも参加してもらう方法で始め、関谷君がまとめました。左上の魚眼レンズで撮った写真のようなイラストも関谷君が描いています。

男山団地はいろいろと混ざりあって、どこからも見えて、風も通り視線も通るような拠点作りから始めることが基本的には一番重要な視点になっています。なので、ただ部屋があればいいという事ではなく、その後の複数の学生の修論による検証の結果からも、オープンな空間であるという意味が非常に大きいということがわかりました。このテラスは(資料38)365日開いていて、学生や地域の人達が一緒に協働しながら活動しています。だんだん通信という配布物も、最初は団地の中だけで6,000戸に配っていましたが、今では地域の1万1,000戸に配布しています。作っているのは学生と地域の人達です。

・河内長野市の南花台

大阪府河内長野市の南花台は(資料40)、コノミヤテラスという拠点を(資料41)皆で運営し、1年半くらいの短期間のなかで、さらに改修しながら追加整備しています。左下は廃校になった小学校を看護学校に作り直す時に、地域の拠点となるような学校に変えていこうと取り組みました。外壁を塗り替えたり中庭の整備をしたりしています。拠点となる看護学校の外壁は(資料43~56)、黒を基調としました。看護学校が黒ということは考えられないという人もいるかと思いますが、きれいな青空の下の場所で、周囲が住宅地なので、黒にしてボリューム感を低減し、日の当たり方の微妙な変化を表現するようにしました。学校側にお話しし、教室を交流スペースに変更する等のことも実現しています。詳しい説明は関谷君にしてもらいますが、学生たちは、これまでお話ししたような様々な経緯、歴史を引き継いで活動していますので、そういった視点で聞いていただければと思います。

ご清聴ありがとうございました。

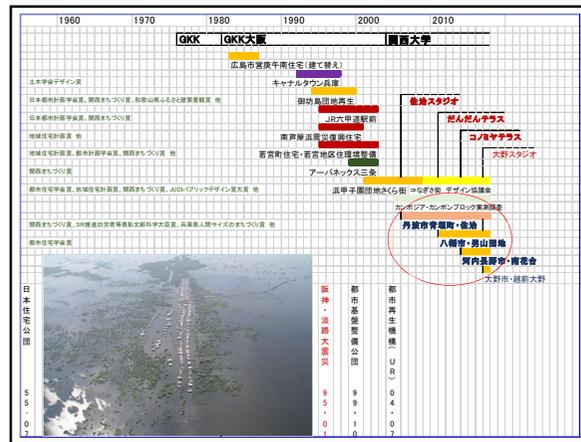
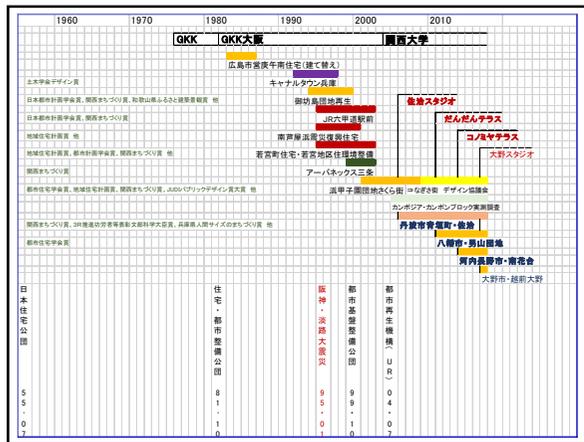


集住環境の再編(再生・更新)まちづくり

1. 社会潮流の変化による公的賃貸住宅団地の空間的变化
 周辺に閉じた団地から開かれたまちへ ⇒ まちに住む
 住民参加による団地再編の取り組みのはじまり ⇒ 自分で創る
2. 集まって住むカタチのこれから 震災復興、建替団地の再生事例から
 ⇒ 小さく解く、混ぜて解く
 ⇒ まちに住む
3. ストック再生型の団地再編(空間・コミュニティ・制度改修を総合化)への取り組み
 ⇒ まちに住む
 ⇒ 自分で創る(制度再編)
 ⇒ 小さく解く、混ぜて解く(自分で創る、制度再編)

集住環境の再編(再生・更新)まちづくり

1. 社会潮流の変化による公的賃貸住宅団地の空間的变化
 周辺に閉じた団地から開かれたまちへ ⇒ まちに住む
 住民参加による団地再編の取り組みのはじまり ⇒ 自分で創る
2. 集まって住むカタチのこれから 震災復興、建替団地の再生事例から
 ⇒ 小さく解く、混ぜて解く
 ⇒ まちに住む
3. ストック再生型の団地再編(空間・コミュニティ・制度改修を総合化)への取り組み
 ⇒ まちに住む
 ⇒ 自分で創る(制度再編)
 ⇒ 小さく解く、混ぜて解く(自分で創る、制度再編)



大学地域連携実践のまちづくり

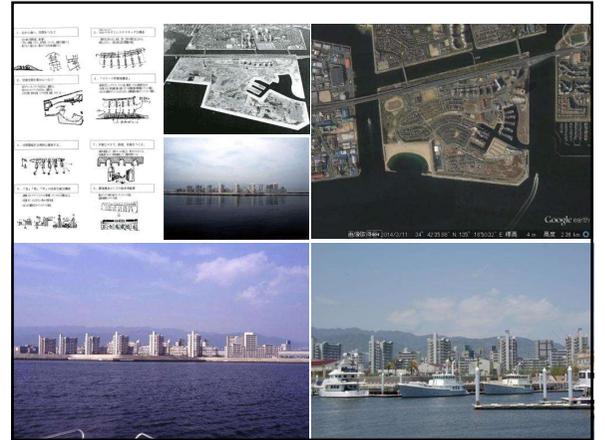
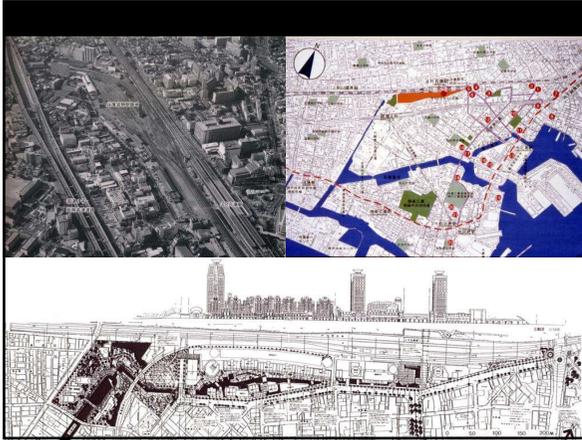
「関わり続ける定住」「21世紀のふるさとづくり」「空き家から地域の再生をデザイン」

丹波市佐治

八幡男山
 「巨大均質団地(6000戸)でストックを生かした再編を」⇒ ココロミタウン

河内長野市南花台
 (河内長野市:人口10万人の高台、丘の上のニュータウン)
 標準典型のまちを場所性を生かしたまちに変える

越前大野
 (大野市:人口3万人の盆地、美しい城下町)



マリーナと六甲山をつなぐ公営住宅



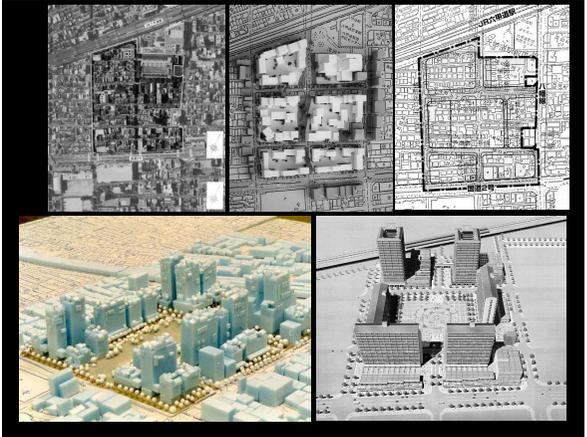
公営住宅と戸建て住宅が混在するまち
芦屋市営 若宮町住宅 阪神淡路大震災からの再生

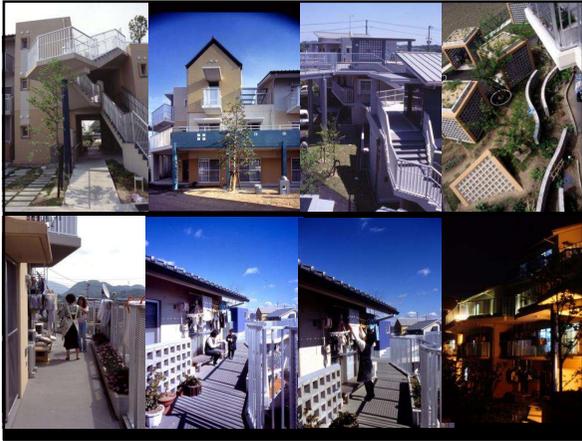
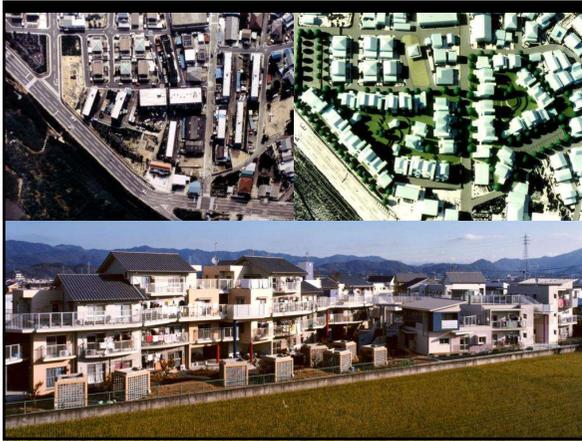


公営住宅と戸建て住宅が混在するまち
残せる路地は残そう つきあたりの集合住宅、視線のコミュニティ



公営住宅と戸建て住宅が混在するまち
通り抜け路地 風と視界の抜け 移ろう影もデザイン













廃校になった小学校を地域拠点機能を備えた看護学校へリノベーション



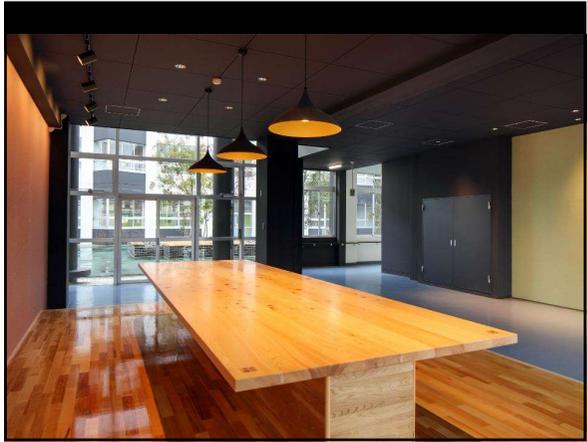
建築の専門家・研究室のOB・学生で議論

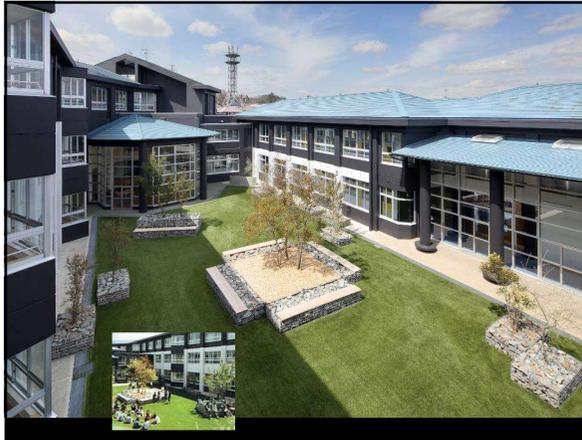
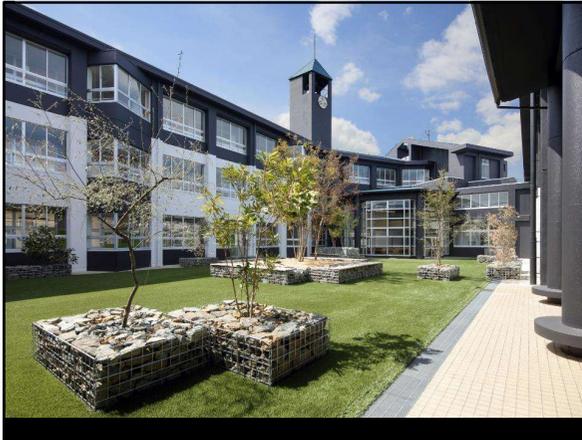


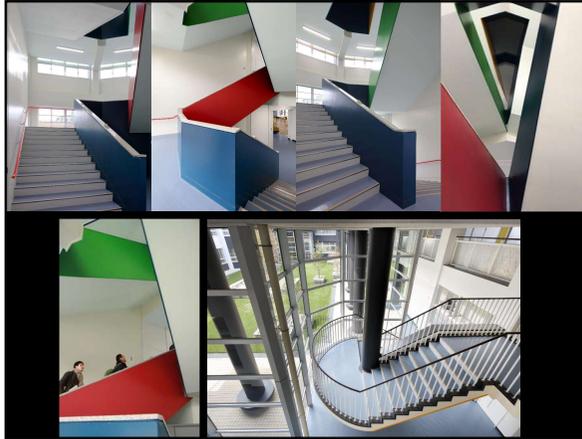
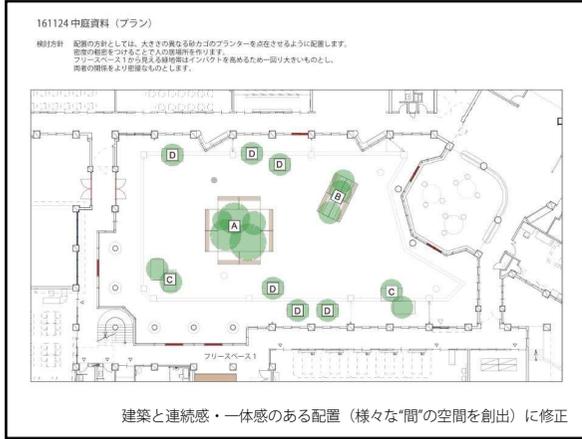
提案CG



外壁の塗り分け操作で元の白だったときのボリューム感や面としての重みは無くなる
斬新でむしろ明るい。色はすごい。







○第2章 関谷先生「協働する学生のチカラ」について

江川先生の話を引き継いで、タイトルの協働する学生のチカラと具体的に活動している内容について僕から色々説明したいと思います（資料1）。地域連携という事ですが、僕たちは協働ということを大切なテーマにしています。協働する学生のチカラ、協という漢字は普通部首が十ですが、研究室で使うのは部首がりっしんべんです。これは心や感情の動きがあるものに使う部首です。普通の協も力が3つあるので力を合わせるという意味の漢字ですが、同じタイトルで研究室の活動をまとめた本を出すタイミングで、僕がこの漢字を使いたいと江川先生に提案しました。力を合わせるだけではなく、僕達は心も合わせるという意味を込めたいという事でりっしんべんの協を使っています。僕達は皆で一緒に何かに取り組むことや、地域の人と一緒に何かを作り上げるという事をとても大事にしています。皆で一緒にするとすると、出来たものが大事ではなく、作り上げる過程がとても大事になると思っています。それをまとめるとスライドが多くなってしまったのですが、色々お話ししたいと思います。

まず、僕のプロフィールですが、（資料2）、熊本で生まれています。こんな大きい話をするのは初めてで、その舞台が九州というのはとても嬉しく思います。江川先生の研究室で大学院まで建築の勉強していました。卒業後は、この後の発表で出てきますが、半年ほど関西大学佐治スタジオで活動してまして、現在は大阪府河内長野市の南花台のコノミヤテラスという場所の運営やプロジェクトのコーディネーターをしています。ちなみに名前の頭文字をとると、関大になるので関西大学の関谷という風に一発で覚えてもらえるのではないかなと思います。

活動主体は江川先生の建築環境デザイン研究室（資料3）で2004年に発足し、今年で13年目になります。これまで224名のゼミ生が生まれ、本当に沢山の活動をしています。先ほどのカンボジアの話や、地域に入ってお祭りの計画をしたり、実験的に団地を改修したり、実際に建築の提案をしたり、最近ではJRの大阪駅でうまく使われていない場所を広場らしくしようというようなプロジェクトも行っています。多岐にも多地域にもわたりますが、今日はこの4つの地域についてお話ししたいと思います（資料4）。まず兵庫県丹波市の佐治のお話をした後に、京都府八幡市の男山地域、大阪府河内長野市、今年始まったばかりの福井県の越前大野について話したいと思います（資料5）。関西大学はこの辺りにありますが（資料6）、様々な地域を移動しながら色々な事に取り組んでいます。

<研究室の主な活動について>

・兵庫県丹波市佐治について

丹波での取り組みについてお話しします。このプロジェクトは2006年に日本建築学会

近畿支部主催でシナリオ丹波という設計コンペがあり、そこで江川研究室の先輩方の提案が丹波市長賞を取ったのがきっかけとなり始まりました。2006年からずっと続いていて、活動が始まって12年目になります。兵庫の北の方、京都に接して丹波市があり、丹波市の中でも北のほうに青垣町があります(資料6)。拡大するとちょうど真ん中に佐治という集落があります。ほとんど山なので、谷あい集落がこのようにあります(資料7)。下にも少し写っていますがパラグライダーが有名です。緑豊かな風景ですが、山間なので豪雪地帯でもあります。盆地なので夏暑くて冬寒く、とても農作物が豊かで、また里山なので林業が盛んで製造所が近くにあり本当に資源が豊かな場所です。佐治の街は生野銀山までの街道沿いにあった宿場町だったので、今も昔の面影を残す街になっています。

その街に関西大学のチームが入っていくのですが、先輩方が提案の中で大きく2つのことを言っています。1つ目は関わり続ける定住のカタチです。ニュースにもなっていますが日本はこれから人口が減ってきています。人がいなくなり、空き地や空き家が増えていく中で、何かか地方にもっと人口を増やそうという話があり、それでは、人口の取り合いになってしまい競争や戦いのようなイメージがついてしまうのですが、そうではないと思います。定住人口を増やすのではなく、関わり続けることもこれからの時代は、定住と呼べるのではないかという1つの考え方を提示しています。2つ目は21世紀のふるさとづくりです。関わり続ける中で長い時間を掛けながら、地域の再生・地域の再編というのを考え続けるための拠点づくりの提案です。この拠点に関わるのは持続的にサイクルのある大学生です。実際に彼らが拠点作りをし、その拠点となったのが、今僕が所属している佐治スタジオになります(資料8)。

この佐治スタジオのリノベーションについてですが、改修の過程をオープンにする所が街の居場所作りのポイントだと思います(資料9)。良好な町並み景観を考えていて、佐治スタジオの全景ですが(資料10)、以前とほとんど変わっていません。少し建物が変わったり物を置いたりしているので若干変わっていますが、格子もそのまま以前の町並みを守っています。もともとは新建材と言われる化学繊維等で作られたような材料が沢山張られていますが、まずは元の姿に建物を戻すということで解体作業をしています。これは学生が主体的にリノベーションをしています。私達は最初に計画は作りません。まず解体して、その建物の姿を基に、地域の若い大工さんと一緒に色々な案を出して、考えながら出来ることを議論していきます(資料11)。さっきの写真にあったように(資料7)木材が豊かな場所だからこそできる木材の活用の仕方の検討や木材の再評価もしてきました。もちろん学生だけでは無理なので、大工さんや設計の方や江川先生をはじめとした専門家の方々と一緒に考えています。図面がないので時間がかかりますが、むしろ時間を掛けることが重要です。ものづくりが好きな地域のおじさんが「これはどうするのか。」等最初は文句を言っているように聞こえますが、よく聞いたら何とかしたいと一生懸命考えてくれていて、どんどん仲良くなり、継続的に顔を出してくれたり、何かあったら助けて

くれたりするようになりました。このような意味で、時間を掛ける事と活動の過程をオープンにする事はとても重要だと思っています。

これは通り土間と言って（資料13）、奥までずっと土間が通っていて街から人が入りやすくするという意図があります。バーカウンターがあったり（資料14）、2週間に1回バスで遠出する会の待合所になったりします（資料15）。田舎だと車で生活するためお酒が飲めません。しかしこのバーカウンターのように自分で歩いていける所にお酒を飲めたり、皆でわいわい出来る場所があると、どんどん地域から人が集まり、地域の居場所になっていきます。またこのような居場所を作ると人の気配がどんどん街に出てきます。佐治の街は結構古民家が多く、奥に長い鰻の寝床と言われるくらい生活空間が奥になってしまい、もともと宿場町で生活感が外にでにくい性質もあり、昼間人がいるのに人気（ひとけ）がなく、とてもさびれてみえます。佐治スタジオは間口が広く、生活空間を前に出せる事もあり、明かりよって、夜でもひとけがある場所作り出しています。

佐治スタジオがどのような活動をしていて、学生がどのように街に入っていくのかという事をこれからお話します。これは、滞在型講座を通じて地域に学生が関わる様子です（資料16）。関西大学の教授の方々が地域再生をテーマに丹波で授業を展開します。2泊3日佐治スタジオで泊まりこんで、実際に林業や古民家を見に行ったり街の歴史を学んだり、町歩きしたり、江川先生がしている設計の授業など様々な授業を展開し、学生が丹波に関わるきっかけを作ります。（資料17）これは、滞在型交流ワークキャンプです。これは1週間丹波に滞在しながら就業体験をするというものです。（資料18）。第一次産業が多いので農業や製造所の仕事、寺社仏閣の檜皮葺という木の皮をふいて檜皮を作る会社の伝統的な技術を学ぶ就業体験をします。他にも地域交流ワークショップでは、裸祭りというお祭りに参加したり町歩きをしたり、実際に地域に入り込み体験的に地域を学んでいきます。（資料19）。これらを通じて、最後は地域の人に活動を発表する機会を設けています。

地域で授業をすることにどのような意味があるのでしょうか？レジメに（資料7）21世紀の故郷と書いていましたが、僕は熊本出身なので田舎について知っていますが、本人もお母さんもニュータウンで生まれ育って田舎がない子が結構います。田舎のことを何も知りません。だからこのような取り組みをすると、丹波の面白さや田舎の魅力に気付いてリピーターになり、佐治スタジオに何度も遊びに来る人がどんどん増えていきます。地域の人達と触れ合う事も学生にとって意味があることが、かつてのヒアリングでよくわかっています。地域が彼らが帰ってこれる故郷になっていくのです。

氷上町では、300年近く続いている造り物の文化がある愛宕祭があり、参加し始めて8年目になります。その祭りの期間中は伝統的な奉納物・造り物を作って飾るという伝統があり、ここを出てくるのが協働する学生のチカラです（資料20）。大学生や地元の高校生がいます。この作り物の作り手が減ってきていて街でも問題になっています。活動が始まった頃は学生だけで作っていましたが、大学生と地域の人と一緒に作業をしたり、現

在では高校生と連携して一緒に作っていたりします。今後、地域を支えていくのは若い彼らであり、子ども達に伝えないといけないという事で学校にも働きかけています。子ども達の中にも自主的に参加してくれる子もいます。この造り物は一式作りという大きなルールがあり、1つの材料で何かを作り上げるというルールの中で作っています。例えば、風車を1,000個程使って、風車だけで1つの物を作ります。他にも瀬戸物一式で作上げた物もあります。これは(資料20)今年した造り物で、うちわ2,700枚で火の鳥を作ります。これもプロセスが重要でうちわ2,700枚を買うのではなく全部集めてきたものです。どのように集めるのかというと、街の人に「祭りで僕らはこういう事をしたいです。」と説明をして、一週間くらい前に回覧などにチラシを混ぜてもらい配布します。1週間地域に入り込んで造り物制作合宿をするのですが、その初日に学生が挨拶に行き、地域の人から材料を分けてもらい、人口は少ないのですがその地域内だけで2,700枚を自力で集めました。先ほど色々な参加の仕方があると江川先生の話にもありましたが、実際地域の人達が造り物を作るというのは体力的にも時間的にも難しい。でも、うちわを提供することならできます。これは、参加の1つの方法だと思っていて、祭りになると提供者の方が見に来て、「私がこのうちわあげたんよ。」という話を学生と一緒にすると学生はそれだけで嬉しく、地域の人でも自分が何らかの形で造り物に参加できた、伝統的な町のものに参加できたと思うところにこのプロセスの意味があると思います。出来ているものが格好いいというのはもちろん建築学科なので必要ですが、格好いい以上にその裏にあるストーリーが大事だということを僕はこのプロジェクトを通して、とても感じています。

道の駅の夕べというお祭りでは、祭りの持続性が問われていました。この祭りでは子供達が作った灯籠のならば方を、図面を描いてこう並べようというようなアイデアを出して実践しました。すると、子供達が喜んでくれて、その風景を見た地域の方が、お金がなくなっても自力でスポンサーを集めてお祭りを継続しようという話につながりました。他にも建築らしいツリーハウスを作ったり古民家の実測をしたりと木造の建築の講座等をしています。

学生が滞在する時にご飯をどうするかという事があります。実はその多くは近所にいる料理サークルのお母さんがたが作ってくれます。「余った材料費は自分達の小遣いなどにして下さい。」というのですが、わざわざ全部使ってくれ「私達が作ったものが綺麗にお皿だけになって帰ってくるのが一番嬉しいので、お金じゃないよ。」と言われて、僕自身もいろんなことに気付かされて勉強になっています。学生たちは慣れない生活で疲れている所にとっても美味しいご飯を作ってくださいるので全部食べてしまいます。そして、お母さん達に挨拶して感想や作り方を話すという交流が生まれるのです。それがとても重要だと思います。

もう1つこのような活動を持続していくひとつの仕組みとして地域が主体となって空き家を活用していく佐治倶楽部というサークルが立ち上がっています(資料22)。もとも

と佐治スタジオが出来る時に、現代GPという国の補助金をもらって整備しました。しかしその補助金があるからずっと活動できるというわけではなく、それ以降もどのように続けるかという事はどの地域でも問題になっています。持続的な運営をどのような体制で行うかのか議論を重ね、補助金が切れるタイミングで佐治俱樂部が立ち上がりました。詳しく説明すると、地元の人や学生や卒業生や周辺に暮らす人が年会費3,000円を払えば佐治スタジオや他の改修した建物等、管理している建物を自由に使えるというものです

(資料23)。例えばカフェをしてみたいがいきなりお店をつくって始めることは難しいので、チャレンジショップのように使ったり展示会をしたりする場所として空き家を使っています。その中で集まったお金でまた別の空き家を改修して新しい事業を行っていくサイクルを作ろうとしています。本町の家という別の空き家も現代GP時代に一度改修しています。その後に佐治俱樂部が立ち上がり、3年目の時に、佐治俱樂部のお金で2階を改修し、現在は2階をリノベーションの事例として解放しています。他にも衣川會館という大きな空き家を改修した場所を使って地域の人が集まる場所を作ったりコンサートをしたりしています。これは(資料25)コンサートの様子ですが、どんどん過疎化していき人があまり外に出てこないような街で、空き家を交流の場所に改修し、また学生と地域の人が交流するような機会を今作っていています。

佐治俱樂部では月に1回、佐治俱樂部ミーティングを開き様々な取り組みについて議論しています。ホームページを調べたら出てくるので是非調べてみてください。例えば、ゲリラガーデンマーケットというお花屋さんをしています。また、豆腐屋が来たり、学生が衣川會館で活動したり毎年餅つき大会など色々な事をしていきますが、そこから繋がりが生まれ活動が広がっていきます(資料25)。佐治の中だけではなく地域外にも発信しようという事で、天神商店街にある関西大学の施設で丹波の物産展をしたり都会の人に丹波に来てもらうコミュニティーツーリズム社会実験(資料27)をしたりしています。例えば、猟師さんがいるので実際に鹿肉を食べられる会をしたり酒造さんの話を聞いたり、丹波だから出来る事を都会の人に知ってもらおうという活動も佐治俱樂部として色々展開しています(資料28)。

関わり続ける定住と言いながら色々な事をしてきましたが、長く時間を掛けてじっくり関わっていくと地域の人意識が変わってくる事は、佐治スタジオを長年している中で見えてきました(資料29)

・京都府八幡市の男山団地について

次は男山についてです。まずはKSDP団地再生プロジェクトについて説明します(資料30)。これは大規模集合住宅団地を住宅等のストック活用を図り、住民の人達が自分で更新できるような持続性の高い集住環境に再編する技術を開発し、実践に生かすことを目的に始めた研究活動です。平成27年度で研究期間は終わっていますが、現在も活動は継続されています。詳しくはホームページを見てください。この団地再編プロジェクト

の枠の中で行っているのが男山のプロジェクトと次に出てくる南花台のプロジェクトです。

男山団地は（資料3 1）全長2キロあり全部箱型の集合住宅が並んでいる団地です。大阪と京都の境目に位置しています。団地の縁には駐車場があり道路を挟んで、戸建てが並ぶという本当に断絶されたような空間になっていますが、実はこの団地内にはメタセコイヤの木のおかげでとても背の高い緑の豊かな緑道があります。周辺の街の人は通りにくいという話もありますが緑の環境骨格がこの団地の大きなポテンシャルです。

平成24年度に関西のKSPDのプロジェクトの中で再編提案を作って住民の人達と、お茶を飲みながら話し合えるだんだんカフェでワークショップをしました（資料3 2）。その中ででてきた意見で、地域の皆で気軽に集まれる場所が欲しいという話があり、実際に作ることになりました。関西大学の設計チームで佐治スタジオのように、拠点を整備します。男山団地内の中央センターという商店街の商店の1つを通りから人が入って来やすいように整備しました。佐治スタジオの真似をしたわけではなく、先に扉があり通り抜け出来るようになっていたのでこのような通り方をしています。また街から中が見えるように、大きいガラスの扉を3枚引き戸にしています。木材は丹波のものです。そして平成25年11月にだんだんテラスが開設されました。まずは365日オープンしてみようという事になりました（資料3 3）。だんだんテラスのだんだんは、少しずつというだんだんと、団地について談話するというだんだんの2つの意味を掛けてだんだんテラスと名前をつけてオープンしました。いきなり始めて目標を立ててするのではなく、まずは地域の人達と話し合いながらだんだん進めます。気軽に集まれる気軽さとは何かと最初は皆ずっと考えていました。

だんだんテラスの様子です（資料3 4）。これが通り抜け出来る扉です。まず集まってきたのは地域の子も達でした。遊ぶ所がなかったり、緑道で遊ぶと怒られたりするそうなのですが、だんだんテラスだと怒られないからといって遊びに来ます。子ども達が来るとお母さんも来てお母さん達も話ができます。また朝市も継続して取り組んでいます。男山地域は少し奥に行くと畑が広がっていて山があるため、学生が週に3回車を走らせて朝一で野菜を取ってきて売っています。朝市がきっかけとなり話が弾み色々な話を聞いたり、絵手紙教室をしたい人が絵手紙教室をしたりと本当に色々な活動があります。365日オープンなのでだんだんテラスには本当にふらっと立ち寄りの方が多く、「365日開いているのはどうですか。」と聞くと「本当にふらっと入れるからいい。」と喜んでくださいます。また「もし土日休みにしたらどうですか。」と聞くと「土日休みだとお店みただからちょっと違う。やっぱり毎日開いていて用もなくお話できて、若い人や常駐している地域の方とお話できるのがとても良い。休みがないではなく、毎日開いているのが良い。」という事でした。他には、ラジオ体操をしたり（資料3 5）持ち寄りのご飯会をしたりしています（資料3 6）。だんだんバーという持ち寄りのご飯会では、皆でお酒を飲む会をしています。このおじいちゃんは元料理人で料理人時代の話をしたくて運営側でカ

ウンターに入るといふ楽しみもあり、繋がりが増え、出来ていきます。まただんだん句会という俳句の会もあります。このだんだん句会で出た俳句はだんだん通信という毎月出している広報誌に載るなど、繋がりが増えていきます。他にはだんだんテラスの前にあるスロープを使った流しそうめんをしたり子ども料理教室をしたり、認知症予防のオレンジカフェをしたりしています（資料37）。また、お片づけマーケットという家に余っている物を集めるフリーマーケットがあります。本当に最初は365日開けるだけで何かイベントをする等全く企画していませんでしたが、朝市などを始めると様々な企画が生まれてきました。それらの企画は私達が計画したわけではなく、地域の人達の色々な話から繋がってできました。なので、自分達で出来る事を小さな事からまずはしていくという事が実はとても重要で、そのきっかけを作っているのは365日開けて、そこに学生がいる事だと思います。私達も予想がつかない事も沢山あり面白いです。

学生は自分達で物を作れるので、屋台のような物を作って夏祭りにでたり麻雀クラブの麻雀の卓を作ったりしています（資料39）。またハーブを練習する人がだんだんテラスに来て、一時ハーブが流れている時もありました。自分達で出来るという事がとても重要で、ちょっとした事でもどんどん繋がっていくのでだんだんテラスでは本当に色々な事が起こっています。団地のプロジェクトは持続的な集住環境を作るので、自分達で自分の暮らしも良くしていけたらいいなとプロジェクトの中で考えています。

団地の住戸改修実験プチDIYは、塗装でどこまで空間を変化させられるかという事を考えました。これは（資料38）最初に先代の先輩達でされていたプチDIYというプロジェクトで住戸改修をしました。ちなみにこの壁には、ペンキ屋さんがブランドのポール・スミスの壁を担当していたらしく、その余りの赤いペンキを塗ってもらったという逸話があります。団地の部屋をDIYで作るといふ事もずっと取り組んでいます。

模様替え申請という制度の中で出来る改修で学生達が実際に住戸改修し、住民向けに見学会をする等、集会のようなものを行っています。この中で、出来る事と出来ない事があると地域の人達もわかってきていて、様々なアイデアの話もだんだんテラスですんでいます。ワークショップで意見がどんどんたまっていきます。

DIY住戸という、設定された団地の一部屋を新規入居者ならばDIYしていいという制度がもともとURの中の制度としてあります。連携協定を関西大学と京都府・八幡市・URで結んでおり、そのなかで新しくココロタウンというエリアが出来ました（資料40）。C街区という20棟くらいある大きなエリアで全ての住戸がDIY住戸として認められました。自分達で住みたい家に改造できるエリアが出来たという事です。この部屋は実際にモデルルームとして内覧可能で、サポートもだんだんテラスですんでいます。それは学生が話しを聞く事もあれば、京都府の建築士会の人達と連携して話を聞ける会を開き、今後検証していく事もあります。それ以外にも子育てリノベーションで若い世代向けに団地の部屋のリノベーションを関西大学とURの協働ですんでいます。例えば、これはインナーバルコニーというバルコニーと玄関まで一緒になっている部屋で自転車を持ち込めると

いうライフスタイルも同時に提案しています。暮らし方を一緒に提案したり、古い建物の古さを良く生かし今の人達にも暮らしやすいような部屋にするため必要最小限の壁を壊したり、特殊な暮らし方をする人向けのものと、基本のモデルとなるような部屋を、リノベーションの提案として行っています（資料42）。

次はやってみよう会議という、やってみたい事を実際にやってみるという会議です（資料43）。10チームあり、中には八幡に住んでいる地元の大学生のチームもあります。子どもの宿題を見たり緑道でヨガをしたり（資料44）する人達が集まる「やってみよう祭り」（資料45）を年に1回開催しています。こういった取り組みの様子などをだんだん通信で毎月地域に発信しています。住民の人のページはコラムのような物を毎月書いています。また、鉄部塗装ですが（資料46）アフターを見ると微妙に色が付いているのがわかります。これは（資料47）駐輪場で、その駐輪場の塗装計画を学生がし、塗装しました。これはバルコニーの色が全部違いますが（資料48）、関西大学でカラーパレットを用意し、各住戸にバルコニーは何色がいいかというアンケートを実施し、それぞれの人達が選んだ色が、ランダムに並んでいます。住棟足元の階段室のエントランス部分にも塗装計画を施します。またリノベーションルームの手すりは赤くしたのですが、（資料49）外から見ると紅葉と相まってとても美しいです。実際ある団地は全部同じ色なので昼でも夜でも自分の家とわかりにくく、あまり認識できません。誰かの家や借りている家という風に思ってしまうととても寂しい感じがします。実際に私達は住民参加してもらい、このように色を計画してバルコニーも選んでもらうと自分の家だと認識でき、「あなたの家はどこですか。」「あの緑の階段の所です。」等会話を生むきっかけにもなります。色を塗ると、とても沢山のことが見えてきます（資料50）。これはとても重要な事で、色を塗る非常に簡単で誰でも出来る作業で、どれだけ人の暮らしに影響を与えるかという事も見えてきて、団地は四角い箱が並んでいて均質に経済合理主義で成り立った冷たい空間ですが、色を塗るだけで楽しくすることができます（資料51）。

・河内長野市の南花台団地について

河内長野市についてですが（資料52）、もともとKSDPの団地再編プロジェクトがきっかけになってスタートしました（資料53）。関西大学で南花台を舞台に団地再編コンペを企画しました。戸建てを含めた南花台地域をどうすれば持続的な環境で、暮らしやすく暮らし続けられる街になっていくのかという事を課題とし、全国から提案していただきました。2013年に関西大学が提案したのがきっかけで河内長野市の方に声を掛けて頂きプロジェクトがスタートしました（資料54）。南花台スマートエイジング・シティ団地再生プロジェクトというのがあり略して、咲つく南花台と呼ばれています（資料55）。スマートエイジング・シティというのは造語で、健康寿命の延伸といろんな世代の人達が住み慣れた場所で安心して住み続けられる街にする事が大きな目標です。地域住民

の人・UR・医師会・関西大学・大阪大谷大学のスポーツ健康学科・スポーツリハビリ専門の島田病院・コノミヤというスーパー・タニタ・大阪長野市等、本当に色々な主体が関わっていてこのプロジェクトを進めています（資料56）。私が主に取り組んでいるプロジェクトであり、プロジェクトが始まって3年になりますが、同時多発的に様々な事をしてきました（資料57）。私は実際に住んで生活しています（資料58）。住みながらプロジェクトに関わると何がわかるのかと言われますが、その場所に身を置いていると、地域の人の暮らしや朝焼け夕焼けの美しさ等、実際に見ないとわからない事が体験的に理解できます。地域連携をする際は、拠点づくりや暮らしてみるといった視点を持ってもらえると楽しいと思います。

ここでも拠点を作っています。拠点を作る際も地域の方と住民集会という話し合いの場を毎月1回行ってきました。住民集会とは別にもう少し気軽に話せるカフェを開き、住民集会とカフェの2本立てで意見交換をしてきました。拠点は365日誰でも参加できるような場所にしようという事で、完成予想図を描いて皆でイメージを膨らませながら、同時に色々な事をしてきました（資料59）。色々な事と言いましたが、今のワークショップを進めながら塗装のワークショップもしていました（資料60）。街のメイン通りの所にとっても錆びた柵がありました（資料61）。皆で錆び落としをして錆びとめを塗って色を塗る作業をしていると、呼びかけていないのに子ども達が集まりお母さんやおじいちゃんやおばあちゃんも集まってきました。そこからは芋づる式に地域の人と交流できます。他にも暗く汚れていた階段室を、雰囲気を一変するように塗り直しました。もともとこの階段はとても暗くてヤンキーがたまっていたそうですが、色を塗っただけでヤンキーはいなくなったそうです。街が綺麗になるという意味が私達の中で重大な問題で、スーパーの照明の傘がとても錆びていたので（資料62）赤く塗り替えました。コノミヤテラス前ですが（資料63）、右の改修後の方が明らかに楽しそうです。人が沢山いるわけではないのに人がいる感じがするのは、お花があったり椅子があったり、これらは誰かが管理しないとできないので、それが私は人気（ひとけ）に繋がると思っています。美しい景観は人が作り出す物なので、毎日通る道や街で暮らしている人達にとってどれだけ重要な事なのかを建築学科的に作り出せばいいなと思っています。そういったことを街の人に伝えたいと思っています。

これと並行してカヌー作りを行いました（資料64）。河内長野市は7割が森林なのでカヌーづくりを通して、木材のことを知ってほしい事がきっかけです。この写真のように（資料65）全然血の繋がりはないけどDIYが大好きなおじいちゃんと今までのこぎりも触れなかった子どもと一緒に何か作るという、ひとつの多世代交流のきっかけになったプロジェクトです。カヌー作りを通して繋がった多世代の繋がりは、今のプロジェクトにとっても重要で、今も一緒に何かしようとなった時にその子ども達とその友達も連れて来てくれます。最初は皆なぜカヌー作りなのだろうと疑問に思っていたそうですが、後から聞くと「カヌーはよかった。もう一度したい。」と言ってもらえています。

本当に沢山の事を同時多発的にしてきましたが、その間、コノミヤテラスは、2015年にオープンしてから2017年までに、3期に分けて段階的な整備を行いました(資料66.67)。まずは話し合える場所を作って、色々な使い方をしながら、何が必要で何が出来るかを話し合います。改修前の写真ですがこの部屋も大分変わります(資料68)。ここはもともと塾でした。本棚がいるという話になったので本棚を置き、カヌーの置き場所に悩んでいる間にクラシック鑑賞会をするためカヌーの上にスピーカーを置きました。改修途中で歌声喫茶という歌の会をしましたが歌を歌っている裏には材料が沢山ありました。今出た写真は全部改修途中で(資料69)3つの部屋、廊下も全部改修しました。ひび割れをそのまま利用している所もあります。また扉は大きなガラスの引き戸にし外から中の様子がわかるようにしています。本棚を作り、廃校になった小学校の本や地域の人からの本も沢山集まっています。殺風景な真っ白い壁は職人さんに壁紙を1枚1枚切ってもらい市松模様にしました。普段は手間もお金も掛かるからできないけれど、楽しい空間にするための工夫は、使う人達にとってはとても大切で、人が集まりやすい場所が作れたと思います。そのおかげで今はお茶会があります。

活動に学生が入る事が重要であると思います。この拠点でもラジオ体操をしています(資料70)。また、若い人の頑張りを見て元気をもらうという話も地方の方からよく聞きます。室内だけではなく外でも活動しようとどんどん外に出て行く活動もしています。これは(資料71)若いお母さん達が企画してくれました。使っていくうちにどんどん使い方が洗練されていき、例えば音楽を聞いていた真っ白い部屋が、掛け軸が掛かりお茶室として使われるようになりました。

地域拠点を作るとは色々な意味があり、これまでは単一の機能の建物が多かったのですが、新しい仲間を作る場だったり多世代交流ができる場になったり自分の表現の場になったりと、地域に今後必要なのはきっと1つの物事で成り立つのではなく結構複雑に絡み合ったものが、地域の拠点になっていく事だと強く思っています(資料72)。私は最初に完成予想図のようなイメージを膨らませて描いたイラストがあり(資料73)2年目になりますが、本当に絵の通りになりました。誰でも自由に入れる場所が、地域の居場所になると思いますし、色々な事が同時に起こっていても気にならない場所や共有できる空気はとても重要で、ルールを作り過ぎないというのも大事であると思っています(資料74)。それこそがきっと誰でも関われる環境を作れる重要な事だと思い、今取り組んでいます。

ここからは各プロジェクトについて説明していきます。まずは、買い物応援プロジェクトです。はじめに、社会学部の先生が住民の人に対して生活実態調査というアンケートを行い、その結果をもとに勉強会を行いました。その中で、今後、買い物に困っている人が増えてくるという事で、地域で買い物を応援するという仕組みを作り行うことになりました(資料75.76)。例えば、少し足腰の悪いおじいちゃんが重い荷物を買った時に、南花台は丘の街で坂があり、上り下りが大変なため、行きは歩いて来たのに帰りはタクシー

で帰るという話があります。それをサポートします。買い物は自分で来てもらいしてもらうが、帰る時は一緒に持って帰るというシステムです。最初は12月の冬に始めたため利用者はいなかったですが、現在では、毎月8回のうち3回は利用者がいます。地域の人達は困っている人が喜ぶというよりも、応援している側の人の方がもっと喜んでいきます。私は誰かの役に立っているという事が地域の人にとって、モチベーションにつながっています。不思議なことに80代のおじいちゃんが70代のおばあちゃんを手伝うという逆転現象が起こることもありますが、本当に良いプロジェクトだなと思っています。最初に利用された方が独居の80代のおばあちゃんでしたが、1週間に1回しか買い物に行かず、1回で買い溜めてタクシーで帰り、その時にしか外に出る機会がなく、家ではテレビしか見ないため本当に人と話す機会がなかったそうです。法律の関係で車で送ってはいけないため、買い物応援では、歩いて一緒に帰らないといけないので、「一緒に話して帰る事がとても嬉しくて、私はこれから買い物が楽しみになった。」と言われたそうです。それを聞いた住民の人達がこの取り組みは絶対に続けなきゃいけないと、モチベーションに繋がりと、地域の方が主体で困っている人達を支援しているのがこのプロジェクトです。これは地域のニーズを捉えていると思います。

健康仲間作りというプロジェクトがあります(資料77)。タニタや島田病院や大谷大学のチーム、地域住民も一緒にプロジェクトを進めています。コノミヤテラスに設置した体組成計という体脂肪等基本的な体組成を測る機械を使って、個人で健康管理したり、住民の人達も自分達で活動しています。元気体操という高齢者向けの体操をコノミヤ店内でしています。他にも歩こう会といって自然豊かな河内長野にある朝ドラの「マッサン」のロケ地の滝に自分達で歩いて行く会を開いたり、住民の人で医療福祉関係の資格を持った健康スタッフがコノミヤテラスで毎月各自1、2回の計8回の健康相談会を開いてくれたりしています。プライベートな内容を相談される事もありますし、それとは別に、わいわいしながら気軽に話せるコノミヤカフェもあります。気軽な場としてのカフェと真剣に相談したい相談会という2つの場を実際に地域の方々に運営されています。最終的には街の保健室というチームになればいいなと話を進めています。また、健康サポーターは、資格は持っていないが、健康を通じてまちづくりに取り組みたいという方々で、学生と一緒にコノミヤテラスの常駐をしていただいています。タニタの健康ヘルシーメニューを河内長野市内10店舗の協力を得て、開発しました(資料78)。これはポイント制度と連動しています。健康仲間作りの中で健康クラブというグループがあり、50人位いるのですが、その人達にポイントカードを配り、例えば歩こう会やラジオ体操に参加したらポイントがつき、ポイントがたまるとタニタの試食券になるという取り組みです。これは一般の人でも食べに行けます。ポイントをためるのは皆好きなようでどんどんたまり、健康になる上に健康ヘルシーメニューを食べられます。ポイントをためるのは単純に楽しいようなのでポイント制度はどんどん広げていこうと思っています。

大谷大学の学生が今年から来てくれて、色々な事をしてくれます(資料79)。ラジオ

体操の指導を通して地域の人達との交流を深めていく事でどんどん仲良くなり、最終的には体操の企画をしてくれました。皆が元気に踊っている写真がありますが、「一人じゃできない、恥ずかしいし楽しくない。でも皆でしたら楽しくできるから俺は来た。」と言われていました（資料80）。これはとても重要なことで、若い人とお年寄りが一緒にする事や小さい子ども達と一緒に入り皆ですと一人じゃできない事もできるというサポートをするのもコノミヤテラス等の役割だと思っています。

健康関係では、ピクニック弁当を作りました（資料81）。この弁当は南花台にあるお店にお願いして頼んでいます。特徴は一皿二人分という事です。二人分買って皆で食べるオードブルのような弁当です。健康ピクニック弁当なので、何が入っているのかどれを食べるのか等会話になり、一人暮らし等で普段コミュニケーションをとらない方々とコミュニケーションをとるきっかけになる1つのコミュニケーションツールとして開発しました。関西大学は、食べる場所も重要だ、という事で、ニュータウンの開発された団地の中にある気持ち良い場所でピクニックしてしようと、楽しい色々なアイデアを出して、皆で外にご飯を食べに行きました。継続的に開催していて、普段住んでいても気付かない事をなるべく地域の人達に発信しています。また、コノミヤテラスでは、子育て支援のプロジェクトをしたり（資料82）毎月通信を発行したり（資料83）、事業者の会という商店街を復活させたりしようとしています（資料84）。住民の人達で色々取り組んでいる中、勉強会を開いたり地域の活動にもでたりしていると、よくテラスに来る常連さんや子供が応援に来てくれます。

また、空き地や空き家がどんどん増えてくるので（資料85、86）、その活用実験や意見を聞く会や勉強会を今後開いていこうと思います（資料87）。最初に勉強会をなんか大学と名づけて実行しました（資料88）。提案した物をできる事から実現させようとして取り組んでいます。コノミヤの上の駐車場を使ってみたりプロトタイプ屋台を改造して大きな屋台を夏休みに子ども達と一緒に学生が作りそれを実際に朝ご飯会に使ったりし、その朝ご飯会がピクニックの屋外空間のイベントに繋がるように、一つ一つの事が最終的には繋がっています（資料89、90）。

また、廃校になった小学校を看護学校にリノベーションしました。もともと土の運動場は人工芝にし、今では子ども達が集まってサッカーをしています（資料91）。地域の人もその姿を見てとても喜んでおらっています。人工芝を張ることで外に出たくなるような中庭になり（資料92）、この写真は普段の様子ですが（資料93）看護学校の専門学生達が出てご飯を食べているそうです。実際とても変わったように見えますが、人工芝を張ったのと外壁を塗っただけです。階段も各階でめりはりがあるので、何階かすぐにわかる工夫等も関西大学で色々提案してリノベーションを掛けました。現在これまで色々取り組んできた事を踏まえて、これから南花台はどうしたらいいかと地域の人達と一緒に考えています（資料94）。南花台は団地がありその周りに戸建てがあり、また山を開いた丘なので空が綺麗です（資料95）。

南花台のプロジェクトでは、基本的には、まず小さい事から取り組んでいます。ニュータウンや大きい団地の抱えている問題の本質はとても見にくく、高齢化や少子化、交通の便が不便など様々な問題を抱えているため一体何をすればいいのかという話があります。その中で1つの指針になるのは丘という立地や空の美しさなど、その場所らしさ、暮らしであると思っています。そうした指針から漠然とした事の中からしてみたい意見を聞き、実際に出来る事をしています。出来る事をしてみると、成功したり改善策がでたり色々な意見がでてきます。気づきや発見を重ねていくうちにどんどん人を巻き込んだり連携が出てきたりし、活動をしていく中で活動がさらに大きくなり物事の本質へと掘り下げていきます。買い物応援も同じで最初に勉強会をして自分達が出来る事を話す中で物事の本質に迫っていて、このことを発見的プロセスと名付けています。発見や気づきがとても大事であり、失敗はないと思っています。全部発見や気づきでそれに対して改善策を出し、繰り返していく事が地域連携をする際に重要な考え方であると思います。

・福井県大野市での取り組みについて

福井県でも色々なプロジェクトをしようと今地域拠点作りをしています(資料97、98)。古い町並みが残っている場所ですが(資料99)、実は若い人も入ってきています。若い人達と一緒に何か出来ないかという事で、この部屋を(資料100)掃除し、来週研究室で合宿します。これが(資料101)学生の現実の様子ですが頑張った結果このようになります。しんどい等弱音も言いますが結局最後は楽しいと皆言っています。

<協働する学生のチカラについて>

最後に協働する学生のチカラについて話します(資料102)。私は協働する学生のチカラとは、間をデザイン出来る事だと思います。これは「あいだ」と読みますが、例えば人と人との間を学生が繋いでいたり、物体と出来事の間を学生が作ったりします。その間の作り方は学生がデザインしていて、他のプロジェクトでいうと、例えば企業と大学を繋いだりしていると思います。企業の人だと、本当はしたいけど自分の会社では出来ない事を学生の提案で実現したりしています。社会的にニュートラルな中立的な立場の学生だから皆の間を取り持って皆を繋いで協働でき、大学の力というよりは若い学生の力があるからこそ、そのデザインに繋がっていくと思っています。それが基本的には全部考える中で現時点での課題であると思っています。今日のスライドの中で心に響く物があればいいなと思い、その中で協働や地域連携はどんな事でそれぞれどんな事が出来るか等色々な事を考えていただけるきっかけになればいいなと思います。

私は建築環境デザイン研究室という名前を疑問に思っていて、特に、よく使われますが環境という言葉がよくわかりませんでした。私は吉阪隆正という建築家が好きで彼が「人間を中心とした、人間を取り巻く世界こそが環境だ。」と言っています。自然環境など環

境の前に〇〇がつきますが、私は環境とは基本的には彼の言っているものだと思う
ます。建築を考える時、やはり人間が中心になってその周りで起こっている事を考える事
が重要であるといつも思い、それがもしかしたら「あいだ」なのかもしれません。色々繋
げることが学生のチカラであるといつも思いながら活動しています。皆さんにも色々考え
てもらえたらいいなと思います。発表を終わります。ありがとうございました。

○司会挨拶

荒木：関谷先生ありがとうございました。時間が少し過ぎているので当初予定していた質
疑応答は省略させていただきます。本日はお忙しい中遠方より江川先生、関谷先生にお越
しいいただきました。今後本校の地域貢献に生かせるような大変貴重な話をいただきまし
た。両先生方にもう一度大きな拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。
それでは、黙祷をもちましてこの会を閉じさせていただきます。黙祷。

協働する学生のチカラ

in 佐治・男山・南花台・そして越前大野...

17.09.07

関西大学佐治スタジオ研究員 関谷大志朗

関谷大志朗

1990年10月3日 熊本県天草市(牛深)生まれ
大阪府大東市育ち

関西大学では建築環境デザイン研究室(江川直樹教授)に所属し

2015年3月に関西大学大学院理工学研究科

建築学分野ソーシャルデザイン専攻卒業

現在、関西大学佐治スタジオ研究員

関西大学佐治スタジオ研究員として様々な地域で活動を実践。

現在はコノミヤテラスの運営担当。



建築環境デザイン研究室について
2004年に発足。
今年で13節目
毎年24名の学生が在籍する。

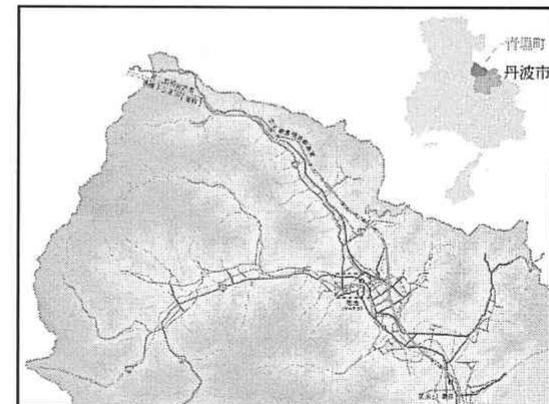
建築環境デザイン研究室



【事業の経緯】

関西大学 佐治スタジオ

- 2006年09月 日本建築学会反響設計競技が佐治を舞台に東西
関西大学チームの提案が「丹波市長夏」に選出。建築の具体化へ
- 2007年04月 建築学科建築環境デザイン研究室で活動の開始
- 2007年06月 「関西大学佐治スタジオ」開設
- 2007年07月 関西大学と丹波市がまちづくりに関する連携協定を締結
- 2007年10月 平成19年度文科省学芸的拠点形成支援プログラム(現代OP)に採択
- 2007年11月 「関西大学佐治スタジオ」空き家リノベーションなど滞在型体験の展開
- 2009年04月 一地域主体による空き家活用を軸組みの検討ワークショップ
「本町の家(本町ゲストハウス)」の空き家リノベーション1期(2010年3月)
- 2010年03月 「現代OP」の事業終了
- 2010年04月 関西大学と丹波市の予算で現代OPの事業継続
- 2011年01月 空き家活用サークル「佐治倶楽部」発足
- 2012年04月 関西大学が「佐治倶楽部」に関西大学佐治スタジオの運営管理を業務委託
- 2014年07月 「本町の家(本町ゲストハウス)」空き家リノベーション2期開始
- 2014年08月 関西大学長と丹波市長が2015年度以降の活動
- 2015年04月 関西まちづくり賞受賞
- 2015年10月 リデュース・リユース・リサイクル功労者等表彰 文科省大臣賞受賞
- 2016年03月 「夜川會館」の空き家リノベーション開始



関わり続けるという定住のカタチ

関わり続ける中でしか「良えてこない」ものがある
長い時間をかけながら「地域の再生」を考え続ける

21世紀の故郷作り

豊かな山河に囲まれた美しい故郷を持つことができる
将来にわたり訪れ、帰ることができる故郷のような場所



佐治スタジオにおける
空き家リノベーション

- 空き家の改修を通じて、良好なまちなみ景観を作る
- 学生が主体的に改修を行う
- 小さく、簡単な改修方法
- 木材などの地域資源を活用する
- 改修の過程をオープンにする
- 「まちの居場所」作り
- 大きな地域環境をデザインする

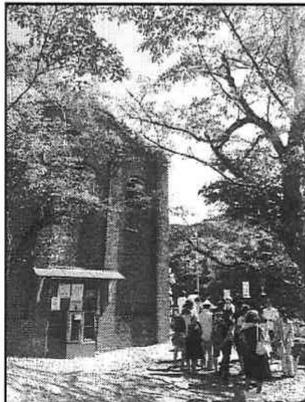


良好なまちなみ景観を考える。



地域資源である
木材の活用と詳細

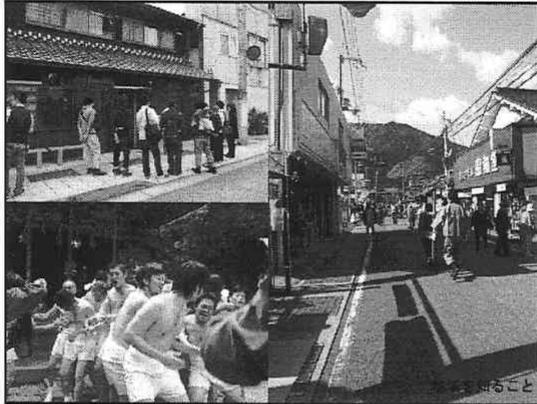




滞在型講座を通じて
地域に学生が関わる



滞在型交流ワークキャンプ 1週間丹波に滞在しながら就業体験



協働する学生自治会A20M

佐治スタジオでの滞在。

近所のお母さんたちが
学生の皆さんのために美味しい晩御飯を用意してくれる。
「お皿の上の作ったものがきれいに無くなって戻ってくるのが嬉しい！」



地域が主体となり空き家を活用するサークル 「佐治倶楽部」

地元住民 学生・卒業生・都市別に拠らす人

年会費3,000円で空き家を自由に使える

会議
交流会・宴会
カフェやBAR
ギャラリーなど

丹波に来る「理由」
故郷のような繋がりが

佐治スタジオ 本町の家 センバヤ

「お試し」から「本格的な事業展開」へ

自働的アイデア
※お皿の上が
「きれい」

※お皿の上が
きれいになって
お皿の上がきれい

※お皿の上が
きれいになって
お皿の上がきれい

月に一回の
佐治倶楽部ミーティング

アイデアを
実践・検証できる場



空き家の活用と
そこから生まれるつながり。

且の音楽会

PIZZA STUDIO

ピザ窯が焼く!
PIZZA STUDIO
22(土)
PIZZA STUDIO

隣の餅つき大会

PIZZA STUDIO



地域外へ発信

丹波が都市を元気にする。
都会の丹波人へ届け。
丹波と関わるきっかけ作り。



丹波コミュニティ
ツーリズムの社会実験

都市部に暮らす人が「関わり続ける」
きっかけとなるツアー作り

「故郷に帰って来た・・・」感を
持ってもらうために



地域の魅力は現地で感じる
街の歩きはその土地で

継続できる環境づくり
時間をかけてじっくりと
地域資源の発見と活用
地域の意識が変わってくる

渦巻きのカタチ

継続と発展の流れ

関わり続ける定住のカタチから

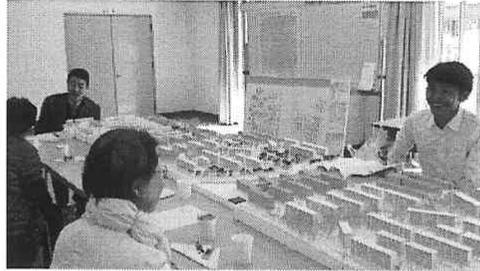
KSDP 団地再編プロジェクトとは

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究」として、大規模集合住宅団地を、住宅等のストックの活用を図りつつ、住民が守り育てて自立的に更新していけるような持続性の高い集住環境に再編する技術を開発し実践に活かすことを目的に、研究・活動をおこなっています。
（研究期間：平成23年度～27年度）



京都府の南西部に位置し、大阪府枚方市と接する八幡市男山地域。八幡市人口の約1/3が男山地域に集中している。日本住宅公団（現 UR都市機構）により、開発され1972年より入居が開始された。まちびらきから約40年が経過。

開発当初の男山団地



H24年男山団地の再編提案を作成し、地域住民とのワークショップを重ねた

まずは、365日オープンしてみる
地域に住む人たちとだんだん進める



常にオープンなだんだんテラスには、ふらっと立ち寄る方が多い



住民からの提案で始めた「朝10時からのラジオ体操」



金曜日は持ち寄りパーティー「dang dang BAR」



スロープの傾斜を使った「話しそらめん」



「塗装」という簡単な作業でどこまで空間を変容できるか



自分にあった、自分でつくった椅子には、特別な愛着が湧いてくる



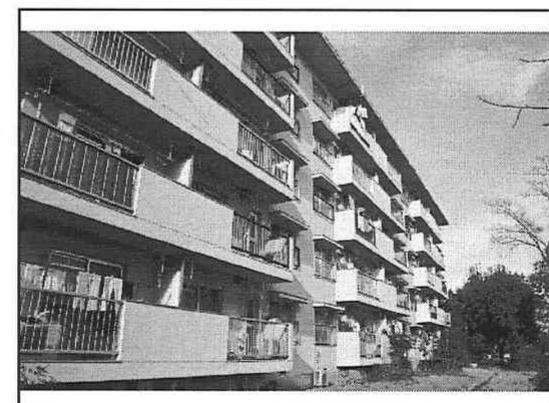
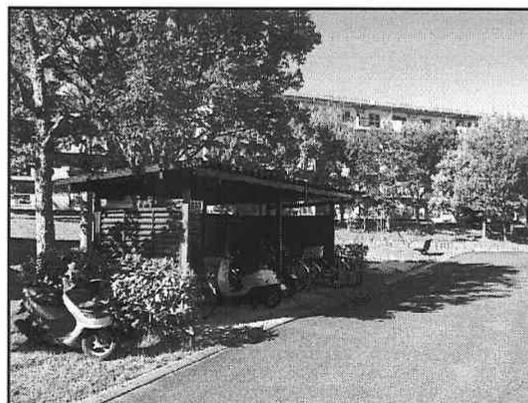
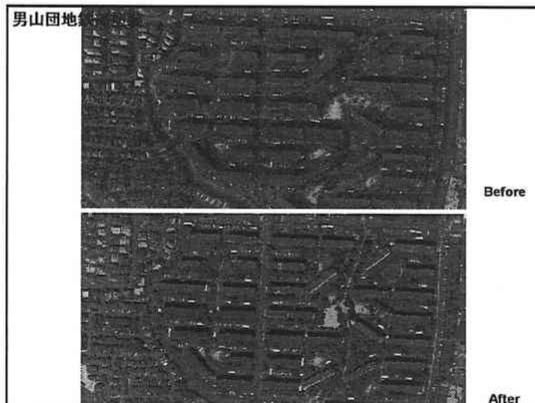
大学と堺市機構による協働設計



「住み続けたい住まい」

男山
やってみよう会議

毎月1回2年間で合計27回の会議
20代～80代が10チームに分かれ
計50回小さな実践を重ねてきた



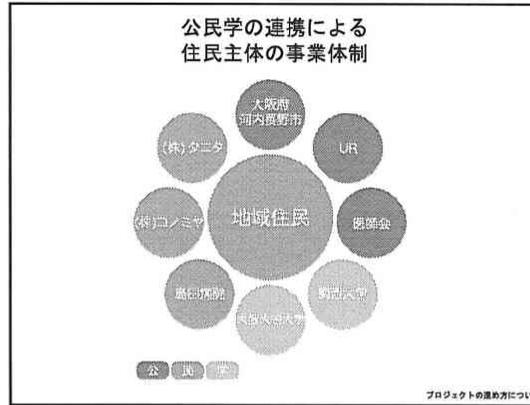


SAC HANNAI
咲く南花台
SAC HANNAI

2014年9月より、大阪府河内長野市南花台地区では、「南花台スマートエイジング・シティ」圏地再生を主とする事業（概要：咲く南花台わくわくプロジェクト）の、平成28年度は、3つのワーキンググループ（以下WG）、それぞれの趣向向上WG、小さなつながりたくさんWG、環境ポイントWGを設定し、活動の進捗状況や情報共有を行い、議論する場として総合研究会やワーキングリーダー会議を設け、各WG選抜のもと事業を進めている。

「スマートエイジング・シティ」とは、「健康寿命の延伸」を主旨に、高齢者だけでなく、いる全ての人が、自分らしい生活を送ることができることのできる、地域に寄り添い、みんなが働き、あそび、生活できる「まち」の像。（英語）

南花台地域を創る
大阪府河内長野市南花台地区再生事業



同時多発的に。

大分	大分	大分
1. 大分県庁舎新築工事	2. 大分県庁舎新築工事	3. 大分県庁舎新築工事
4. 大分県庁舎新築工事	5. 大分県庁舎新築工事	6. 大分県庁舎新築工事
7. 大分県庁舎新築工事	8. 大分県庁舎新築工事	9. 大分県庁舎新築工事
10. 大分県庁舎新築工事	11. 大分県庁舎新築工事	12. 大分県庁舎新築工事
13. 大分県庁舎新築工事	14. 大分県庁舎新築工事	15. 大分県庁舎新築工事
16. 大分県庁舎新築工事	17. 大分県庁舎新築工事	18. 大分県庁舎新築工事
19. 大分県庁舎新築工事	20. 大分県庁舎新築工事	21. 大分県庁舎新築工事
22. 大分県庁舎新築工事	23. 大分県庁舎新築工事	24. 大分県庁舎新築工事
25. 大分県庁舎新築工事	26. 大分県庁舎新築工事	27. 大分県庁舎新築工事
28. 大分県庁舎新築工事	29. 大分県庁舎新築工事	30. 大分県庁舎新築工事
31. 大分県庁舎新築工事	32. 大分県庁舎新築工事	33. 大分県庁舎新築工事
34. 大分県庁舎新築工事	35. 大分県庁舎新築工事	36. 大分県庁舎新築工事
37. 大分県庁舎新築工事	38. 大分県庁舎新築工事	39. 大分県庁舎新築工事
40. 大分県庁舎新築工事	41. 大分県庁舎新築工事	42. 大分県庁舎新築工事
43. 大分県庁舎新築工事	44. 大分県庁舎新築工事	45. 大分県庁舎新築工事
46. 大分県庁舎新築工事	47. 大分県庁舎新築工事	48. 大分県庁舎新築工事
49. 大分県庁舎新築工事	50. 大分県庁舎新築工事	51. 大分県庁舎新築工事
52. 大分県庁舎新築工事	53. 大分県庁舎新築工事	54. 大分県庁舎新築工事
55. 大分県庁舎新築工事	56. 大分県庁舎新築工事	57. 大分県庁舎新築工事
58. 大分県庁舎新築工事	59. 大分県庁舎新築工事	60. 大分県庁舎新築工事
61. 大分県庁舎新築工事	62. 大分県庁舎新築工事	63. 大分県庁舎新築工事
64. 大分県庁舎新築工事	65. 大分県庁舎新築工事	66. 大分県庁舎新築工事
67. 大分県庁舎新築工事	68. 大分県庁舎新築工事	69. 大分県庁舎新築工事
70. 大分県庁舎新築工事	71. 大分県庁舎新築工事	72. 大分県庁舎新築工事
73. 大分県庁舎新築工事	74. 大分県庁舎新築工事	75. 大分県庁舎新築工事
76. 大分県庁舎新築工事	77. 大分県庁舎新築工事	78. 大分県庁舎新築工事
79. 大分県庁舎新築工事	80. 大分県庁舎新築工事	81. 大分県庁舎新築工事
82. 大分県庁舎新築工事	83. 大分県庁舎新築工事	84. 大分県庁舎新築工事
85. 大分県庁舎新築工事	86. 大分県庁舎新築工事	87. 大分県庁舎新築工事
88. 大分県庁舎新築工事	89. 大分県庁舎新築工事	90. 大分県庁舎新築工事
91. 大分県庁舎新築工事	92. 大分県庁舎新築工事	93. 大分県庁舎新築工事
94. 大分県庁舎新築工事	95. 大分県庁舎新築工事	96. 大分県庁舎新築工事
97. 大分県庁舎新築工事	98. 大分県庁舎新築工事	99. 大分県庁舎新築工事
100. 大分県庁舎新築工事	101. 大分県庁舎新築工事	102. 大分県庁舎新築工事
103. 大分県庁舎新築工事	104. 大分県庁舎新築工事	105. 大分県庁舎新築工事
106. 大分県庁舎新築工事	107. 大分県庁舎新築工事	108. 大分県庁舎新築工事
109. 大分県庁舎新築工事	110. 大分県庁舎新築工事	111. 大分県庁舎新築工事
112. 大分県庁舎新築工事	113. 大分県庁舎新築工事	114. 大分県庁舎新築工事
115. 大分県庁舎新築工事	116. 大分県庁舎新築工事	117. 大分県庁舎新築工事
118. 大分県庁舎新築工事	119. 大分県庁舎新築工事	120. 大分県庁舎新築工事
121. 大分県庁舎新築工事	122. 大分県庁舎新築工事	123. 大分県庁舎新築工事
124. 大分県庁舎新築工事	125. 大分県庁舎新築工事	126. 大分県庁舎新築工事
127. 大分県庁舎新築工事	128. 大分県庁舎新築工事	129. 大分県庁舎新築工事
130. 大分県庁舎新築工事	131. 大分県庁舎新築工事	132. 大分県庁舎新築工事
133. 大分県庁舎新築工事	134. 大分県庁舎新築工事	135. 大分県庁舎新築工事
136. 大分県庁舎新築工事	137. 大分県庁舎新築工事	138. 大分県庁舎新築工事
139. 大分県庁舎新築工事	140. 大分県庁舎新築工事	141. 大分県庁舎新築工事
142. 大分県庁舎新築工事	143. 大分県庁舎新築工事	144. 大分県庁舎新築工事
145. 大分県庁舎新築工事	146. 大分県庁舎新築工事	147. 大分県庁舎新築工事
148. 大分県庁舎新築工事	149. 大分県庁舎新築工事	150. 大分県庁舎新築工事
151. 大分県庁舎新築工事	152. 大分県庁舎新築工事	153. 大分県庁舎新築工事
154. 大分県庁舎新築工事	155. 大分県庁舎新築工事	156. 大分県庁舎新築工事
157. 大分県庁舎新築工事	158. 大分県庁舎新築工事	159. 大分県庁舎新築工事
160. 大分県庁舎新築工事	161. 大分県庁舎新築工事	162. 大分県庁舎新築工事
163. 大分県庁舎新築工事	164. 大分県庁舎新築工事	165. 大分県庁舎新築工事
166. 大分県庁舎新築工事	167. 大分県庁舎新築工事	168. 大分県庁舎新築工事
169. 大分県庁舎新築工事	170. 大分県庁舎新築工事	171. 大分県庁舎新築工事
172. 大分県庁舎新築工事	173. 大分県庁舎新築工事	174. 大分県庁舎新築工事
175. 大分県庁舎新築工事	176. 大分県庁舎新築工事	177. 大分県庁舎新築工事
178. 大分県庁舎新築工事	179. 大分県庁舎新築工事	180. 大分県庁舎新築工事
181. 大分県庁舎新築工事	182. 大分県庁舎新築工事	183. 大分県庁舎新築工事
184. 大分県庁舎新築工事	185. 大分県庁舎新築工事	186. 大分県庁舎新築工事
187. 大分県庁舎新築工事	188. 大分県庁舎新築工事	189. 大分県庁舎新築工事
190. 大分県庁舎新築工事	191. 大分県庁舎新築工事	192. 大分県庁舎新築工事
193. 大分県庁舎新築工事	194. 大分県庁舎新築工事	195. 大分県庁舎新築工事
196. 大分県庁舎新築工事	197. 大分県庁舎新築工事	198. 大分県庁舎新築工事
199. 大分県庁舎新築工事	200. 大分県庁舎新築工事	201. 大分県庁舎新築工事
202. 大分県庁舎新築工事	203. 大分県庁舎新築工事	204. 大分県庁舎新築工事
205. 大分県庁舎新築工事	206. 大分県庁舎新築工事	207. 大分県庁舎新築工事
208. 大分県庁舎新築工事	209. 大分県庁舎新築工事	210. 大分県庁舎新築工事
211. 大分県庁舎新築工事	212. 大分県庁舎新築工事	213. 大分県庁舎新築工事
214. 大分県庁舎新築工事	215. 大分県庁舎新築工事	216. 大分県庁舎新築工事
217. 大分県庁舎新築工事	218. 大分県庁舎新築工事	219. 大分県庁舎新築工事
220. 大分県庁舎新築工事	221. 大分県庁舎新築工事	222. 大分県庁舎新築工事
223. 大分県庁舎新築工事	224. 大分県庁舎新築工事	225. 大分県庁舎新築工事
226. 大分県庁舎新築工事	227. 大分県庁舎新築工事	228. 大分県庁舎新築工事
229. 大分県庁舎新築工事	230. 大分県庁舎新築工事	231. 大分県庁舎新築工事
232. 大分県庁舎新築工事	233. 大分県庁舎新築工事	234. 大分県庁舎新築工事
235. 大分県庁舎新築工事	236. 大分県庁舎新築工事	237. 大分県庁舎新築工事
238. 大分県庁舎新築工事	239. 大分県庁舎新築工事	240. 大分県庁舎新築工事
241. 大分県庁舎新築工事	242. 大分県庁舎新築工事	243. 大分県庁舎新築工事
244. 大分県庁舎新築工事	245. 大分県庁舎新築工事	246. 大分県庁舎新築工事
247. 大分県庁舎新築工事	248. 大分県庁舎新築工事	249. 大分県庁舎新築工事
250. 大分県庁舎新築工事	251. 大分県庁舎新築工事	252. 大分県庁舎新築工事
253. 大分県庁舎新築工事	254. 大分県庁舎新築工事	255. 大分県庁舎新築工事
256. 大分県庁舎新築工事	257. 大分県庁舎新築工事	258. 大分県庁舎新築工事
259. 大分県庁舎新築工事	260. 大分県庁舎新築工事	261. 大分県庁舎新築工事
262. 大分県庁舎新築工事	263. 大分県庁舎新築工事	264. 大分県庁舎新築工事
265. 大分県庁舎新築工事	266. 大分県庁舎新築工事	267. 大分県庁舎新築工事
268. 大分県庁舎新築工事	269. 大分県庁舎新築工事	270. 大分県庁舎新築工事
271. 大分県庁舎新築工事	272. 大分県庁舎新築工事	273. 大分県庁舎新築工事
274. 大分県庁舎新築工事	275. 大分県庁舎新築工事	276. 大分県庁舎新築工事
277. 大分県庁舎新築工事	278. 大分県庁舎新築工事	279. 大分県庁舎新築工事
280. 大分県庁舎新築工事	281. 大分県庁舎新築工事	282. 大分県庁舎新築工事
283. 大分県庁舎新築工事	284. 大分県庁舎新築工事	285. 大分県庁舎新築工事
286. 大分県庁舎新築工事	287. 大分県庁舎新築工事	288. 大分県庁舎新築工事
289. 大分県庁舎新築工事	290. 大分県庁舎新築工事	291. 大分県庁舎新築工事
292. 大分県庁舎新築工事	293. 大分県庁舎新築工事	294. 大分県庁舎新築工事
295. 大分県庁舎新築工事	296. 大分県庁舎新築工事	297. 大分県庁舎新築工事
298. 大分県庁舎新築工事	299. 大分県庁舎新築工事	300. 大分県庁舎新築工事



塗ってみよう会について

第一回 5/31(日)10:00-
ペンキ職人さんを講師に迎え、
レクチャー形式のワークショップ
↓
そのノウハウを活かして学生主体で
塗ってみよう会を運営。

第二回 6/6(土)13:00-16:00
第三回 6/13(土)10:00-13:00
第四回 6/19(金)12:00-17:00
第五回 6/27(土)10:00-13:00
第六回 7/4(土)10:00-16:00
第七回 7/11(土)10:00-13:00
第八回 7/18(土)13:00-18:00
第九回 7/28(土)16:00-13:00
第十回 8/8(土)10:00-13:00
第十一回 8/5(土)10:00-15:00
第十二回 9/27(土)10:00-15:00

みんなの拠点づくり
塗ってみよう会
第一回
日時 5/31(日)10時
場所 コノミヤ南花台
南花台スマートエイジング・シティ
SAC HANNAI



まちがきれいになること

コミヤテラスではまちの中にある錆びた部分を塗装したり、歩行空間が楽しくなるような取り組みを行っています。「まちがきれいになること」が人の暮らす環境に大きな影響を与えると考えているからです。写真にあるように本当によったことなのですが、美しい景観だと人気(ひとけ)が感じられます。いや、人がいるからこそ美しい景観が生まれるのかもしれませんが。毎日通る道や過ごす場所がどどんきれいになると、より自分のまちが好きになれるのではないのでしょうか？



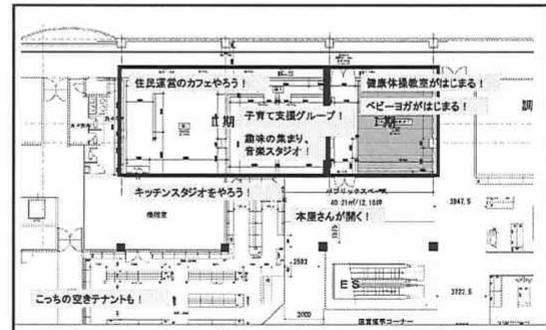
河内材を使ったカヌーづくりプロジェクトを実施



2015年7月～9月に実施

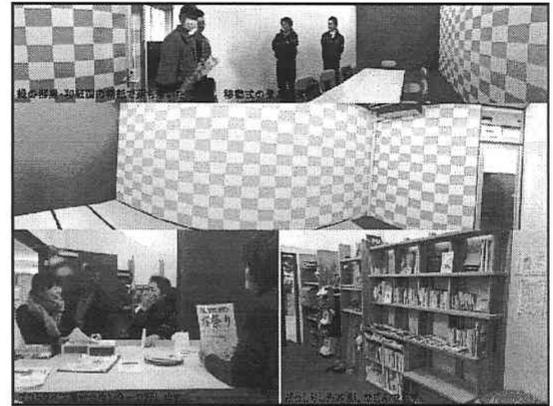
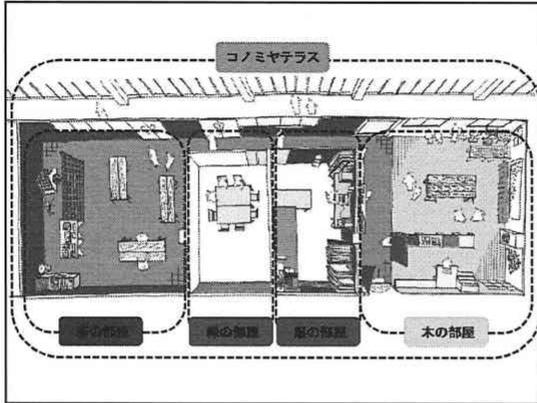


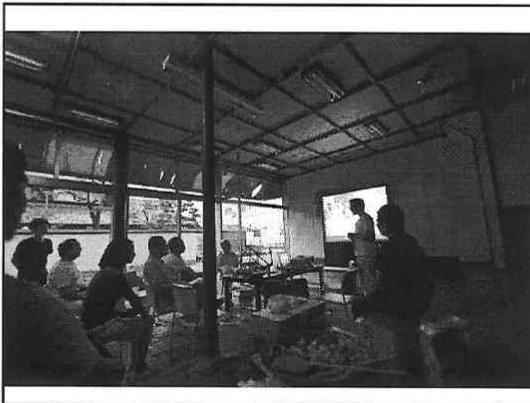
- ①変化に向けた第一歩を学生のテカで踏み出す
- ②これまでなかった考え方や新しい知識・アイデアを学生が持ち込む
- ③社会的中立な立場の学生がコミュニティや制限の枠を超えて
ヒト・モノ・コトを巻き込む



集まって、話ながら、活動しながら進める。

I期、II期に分け段階的な整備を行う。





発表は以上です。
盛りだくさんで疲れてないですか？

さいごに...

協働する学生のチカラって...

新聞記事に見る

地域連携室2017年度の歩み ～地域連携室の足跡～

- ・『西南女学院大の食事相談会』 ～商店街で模型使い助言～
2017年5月19日(金) 毎日新聞 朝刊
- ・『とどけ!ぬくもり 要から』
2017年8月9日(水) 「Facebook」せいなん散歩道
- ・『食べて遊んで「にっぽん」学ぶ』
～西南女学院大・短大部が連続講座 児童、地元のタコを料理～
2017年8月24日(金) 朝日新聞 朝刊
- ・『地域の子に「食育」講座』 ～学生と調理やクイズ挑戦～
2017年9月8日(金) 毎日新聞 朝刊
- ・『Wonderの心をはぐくむ』 2017年9月15日(金) 時事通信社 「内外教育」
- ・『九歯大 西南女学院大 西工大が合同集中講義』 ～高齢者支援多角的に学ぶ～
2017年9月22日(金) 毎日新聞 朝刊
- ・『家に眠る食料品持ち寄ろう』 ～「フードドライブ」来月1日、ミクスタ～
2017年9月26日(火) 読売新聞 朝刊
- ・『困窮子育て世帯に食品寄付を』 ～来月1日ミクスタに「きずなBOX」設置～
2017年9月29日(金) 毎日新聞 朝刊
- ・『西南女学院大と北九州市 地域貢献強化へ協定』
2017年11月1日(水) 西日本新聞 朝刊
- ・『食事をおいしく、認知症予防に』 ～九州歯科大と連携 西南女学院大で講座～
2017年12月3日(日) 読売新聞 朝刊
- ・『白いクリスマスイルミ』 ～西南女学院大 正門前で点灯式～
2017年12月5日(火) 毎日新聞 朝刊

- ・『クリスマスツリー 白い輝き』 ～西南女学院大にお目見え～

2017年12月6日(水) 西日本新聞 朝刊
- ・『西南女学院大のクリスマス礼拝』 ～地域連携へ学外に初公開～

2017年12月22日(金) 毎日新聞 朝刊
- ・『市営バスにお菓子の家』 ～ハッピーバレンタインバスお披露目～

2018年1月21日(日) 毎日新聞 朝刊
- ・『子育て支援講座来月3日に開催』

2018年1月26日(金) 毎日新聞 朝刊
- ・『さとにきたらええやん』

2018年1月26日(金) 西日本新聞 朝刊
- ・『「生涯活躍のまち」構築に向けて～「高齢者のQOL(生活の質)向上」をめざして～』

2018年2月10日(土) 西日本新聞 朝刊
- ・『スポーツ振興で連携』 ～北九州市と市内の9大学～

2018年2月23日(金) 西日本新聞 朝刊
- ・『W杯、東京五輪で連携』 ～スポーツ振興 市内全10大学と協定～

2018年2月23日(金) 毎日新聞 朝刊
- ・『スポーツ振興で協定』 ～北九州市と9大学～

2018年2月23日(金) 日本経済新聞 朝刊
- ・『北九州市、9大学と協定』 ～スポーツで人材育成など連携～

2018年2月23日(金) 読売新聞 朝刊
- ・『嘉代子桜・親子桜の植樹』

2018年3月1日(木) 「Facebook」 せいなん散歩道
- ・『大学連携型ふくおか版 CCRC「生涯活躍のまち」構築に向けて』

2018年3月7日(水) 朝日新聞 朝刊
- ・『出張栄養診断 高齢者支える』 ～西南女学院大 体脂肪測定や食生活相談～

2018年4月4日(水) 西日本新聞 朝刊

2017年度 地域活動論叢

2018年（平成30年）4月18日発行

編集発行 西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部
地 域 連 携 室
〒803-0835 北九州市小倉北区井堀1丁目3番5号
電話 093（583）5243
印 刷 モリプリンティング株式会社
〒806-0049 北九州市八幡西区穴生3丁目11番5号

とどけ！ぬくもり 要(かなめ)から

地域連携室

Eメール：chiiki@seinan-jo.ac.jp

ブログ URL：http://www2.seinan-jo.ac.jp/chiiki/

